椅子、その他

u_

椅子

　傷だらけの古い木の椅子をギシギシ言わせて、女は、ほぼ真上から差す月明かりの下で、黄ばんだ本を読んでいた。剥き出しの細い脚を組み替える度に、脹ら脛から太腿の内側に、月の光が青く映えて、空気を裂くナイフの音が、聞こえて来るようではないか。そこは、白い土が剥き出しである他に何もない、こんもりと丸く盛り上がった小さな丘の頂だった。もう一人の女が、その丘の周りの黒く沈み込んだ中を、滑るようにグルグルと巡っていた。顔を斜めに上げ、彼女の目はずっと、丘の頂の女の姿に向けられていた。

　椅子の下にだけ、椅子よりずっと大きな、くっきりとした輪郭の、綺麗に円い、黒い影が拡がっていた。丘の何処を見ても、影はそれだけだった。或いは、丘を巡る女は、その影が目当てかも知れない。その影はしかし、一体何の影だろう。本を読む女の影にしては、幾ら何でも大き過ぎるし、ただ円いだけなのもおかしい。

　本には、その本を読んでいる女自らが、剥き出しの岩肌が続く海辺で、男と

出会った時の事が、書かれてある。
（二人は、互いに距離を測って、ただ睨み合うだけで、立ち尽くしていた。）
そう書かれただけの頁を開けたまま、女は、両肘を薄い胸の下辺りに突いて、本を両手で持ったまま、先に進もうとしない。円い影は、その時海辺で、彼女が危なっかしく乗っかっていた、真ん丸い岩の影なのだ。次の頁をめくれば、その影がなくなってしまう。替わりに、彼女自らの影が、そこに晒される事になるだろうか。もしそうなったら、丘の裾を巡っているだけの女が、丘を一気に駆け上って、彼女から、本と椅子を奪うだろうか。円く大きな黒い影が、彼女を守っているのだ。その中に居れば、周りが、ぐるっとよく見えるが、影がなくなれば、丘の白さが眩しくて、自らの姿さえ見失われそうだ。
しかも、丘を巡っている女は、本を読む女が海辺で出会った男に瓜二つで、その事を、本を読む女に知られたくはない。だから、余計、円く大きな影がある内は、そこには近付き難いのだ。そして、その女の心持ちを全て、本を読む女は見通していたのだ。
海辺の岩の上で、彼女は、男から目を離さず、ゆっくり服を脱いで、脱ぎ終わると、嬉しそうに男に背を向け、海に飛び込んだ。黙ってそれを眺めていた男は、何処へか姿を消して、それきり、行方知れずになった。
誰も居なくなった岩場に、女の服だけが残されていて、その服を見付けたの

が、その消えた男に瓜二つの、丘を巡る女だった。そこに立って、彼女は海を見た。海と言っても小さな湾で、そこから時計回りに、岸辺がぐるっと回り込んでいて、その正面に見える岸辺の、そこだけ堤防が延びている直ぐ脇に、銭湯の煙突が突っ立っている。そして、その直ぐ前の浜辺に、裸の女が泳ぎ着くのが、小さく見えた。

そこに置いてある白いバスタオルで、女は体を拭いた。直に陽が暮れて、すっかり暗くなった。女は、銭湯の煙突に背を向けて、裸のまま、畑の中の低い石垣に沿った、くねくねした狭い道を進んで、大きな木造の黒い建物の少し手前で、そっと足を止めた。その建物までは、整然と葱の植わった、くの字形の畑だけで、道はまだ、先に続いて左に逸れていた。蛍光灯の明かりに煌々と照らされて、自動織機が忙しく働いているのが、その建物の窓から見えた。女は、それを眺めて、暗い中を、立ち尽くしていなければならないようだった。暫くして、黒い影のような男が、黒い建物を背に、いきなり姿を現して、女の肩に手を掛けた。二人の体が重なって、揃って葱畑の方に歩み掛けたところで、その形は、闇に溶けて見失われた。

それを、ずっと目を凝らして見ていた女は、それが見失われてみて、しかしどうして遥か対岸の人の動きが、まるで直ぐ側から見ているようであったのか、その不思議さに囚われて、この先何をどうしていいか、分からなくなった。生

暖かい海水が膝まで来ていた。海面が明るく透き通っていた。見上げても、月はなかなか見付からなかった。ギリギリ上を向いて、やっと目を掠めた。海面を見直すと、真ん丸い岩の先の深みの、海の底までが、明るく見て取れた。素潜りの二人の男が、つるはしを振るって、その海の底をのろのろと掘っていた。砂利ばかりで、掘っても直ぐに、元に戻ってしまう。

男達は、ずっと水の中に居て、何時息継ぎをするのだろう。女は、息が苦しくなって来た。彼女の居る所が、海の中で、男達の居る所が、陸の上かも知れない。彼女は爪先に力を込めて、その深みを覗き込み、そこに向かって飛び込んだ。二人の男が、砂利の中に埋まっている彼女の体を見付けて、掘り出した。二人の男は、つるはしを持ったまま海から上がって、そこを立ち去った。女は、暫くして目を覚まし、四つん這いになって、呻き声を漏らしながら、綺麗な玉砂利を、間を置いて、一粒ずつ、丁寧に吐き出した。それが、海底に落ちるたびに、月が輝きを増すのか、辺り一面、金色に輝き出すようではないか。

二人の男が、小舟を担いで戻って来た。早速三人がそれに乗り込むと、漕ぎ手が居なくても、小舟は砂利の上を滑って、岸を離れて行った。女は、舳先の側に、後ろ向きに乗って、男二人は、艫の側に、女と向き合って乗った。しかし、女には、どうして、このような事になるのか、さっぱり分からず、それが頭を離れなかった。男二人は、何処か楽しそうに見えた。

「あなた方は、誰なんです？」と、女は聞いた。
男達は笑い出した。
「私達は、何処へ行くんですか？」
「それは、あんたが、自分に聞けばいいだろう」と、笑いながら右の男が言った。
「あなた方は誰なんです？」
「あんたが、俺達を呼んだんじゃなかったのか？」と、左の男が言った。
話している内に、男の顔が見えて来た。顔自体が大きくて、目も鼻も口も耳も眉毛も大きくて、日に焼けた頬が脹らんで垂れていた。量の多い黒々とした長髪が、後ろに靡いていた。女が、それに目を遣ると、その目を遣っただけ、髪は何処までも後ろに伸びて、もう大分遠ざかった岸にまで届いているようだった。
「私達は、何処へ行くんですか？」
男二人は、女の股の辺りに目を向けた。女は、股を拡げていた。当然それは、男達の真正面に晒されている。どうにかしたいが、強い力で押さえ付けられて、どうにも出来ない。女は、自分の腰回りに目を配った。舟の底に穴が開いていて、彼女の尻が、そこにすっぽり嵌って、栓をしていた。そしてそこから、卵を産むように、女は、玉砂利を、ポトリポトリと、ひり出している。それらの

玉砂利は、細胞が分裂するように、脹れてはちぎれ、転がりながら、数を増やしていた。そうして、舟の通る、玉砂利を敷き詰めた道が、海の底を敷かれて行く。それが、舟を前に進める原動力に違いない。

男達の真っ直ぐ後ろに靡いていた二筋の長髪が、次第に波打って、今にも絡み合いそうだった。舟が進めば進む程、幾らでも長く伸びる長髪であれば、とても見過ごせない。恐らく、それはもう、三人の体重より、余程重くなっているに違いない。女は、それを指摘した。すると、男達は、ますます笑い出し、髪は、もっとひどく波打った。舟が左右に激しく揺れた。男達は、肩を抱き合って面白がった。

女は、立ち上がった。男達は、笑うのを已めて、咄嗟に止めようとしたが、全く間に合わなかった。女の顔だけが、海面の上に出た。遠い岸辺が一筋に見渡せて、その中に、まだ真ん丸い岩も、辛うじて見分けられた。その岸辺に至るまで、物凄い量の髪の毛が、途切れる事なく、海面の直ぐ下辺りを緩やかにたゆたって、扇形に拡がっていた。二筋の髪が絡み合うどころではない。目に入る岸辺までの海面の殆どが、水にほぐれて混ざり合い、月の光を満遍なく浴びて、グルグルと蠢いて光る髪の色で、真っ黒だった。しかし、よく見ると、そのー番手前の髪の付け根の、扇の要の部分が、彼女より、二、三メートル先にあって、そこで途切れているではないか。女は、息を大きく吸って、またし

ゃがみ込んだ。

男は、二人とも、髪を短く刈り上げていた。小舟は、岸に乗り上げていて、男達は腰を上げようとしていた。

そこからまた、玉砂利の道が、真っ直ぐに続いた。女が先頭を歩き、舟を抱えた二人の男が、後に続いた。直に、森に入った。しかし、暫く進むと、玉砂利の道が逸れて、森の外に出てしまう。玉砂利の道も、そこで絶えた。三人は、また森に入ったが、直にまた、外に出てしまう。結局、三人は、森の周りを、グルグル巡る事になった。そうして歩き続けた甲斐あってか、森は少しずつ縮んでいるようだ。そして、何時の間にか、三人は、森ではなくて、人の背より少し高いくらいの、玉砂利を山積みにした周りを、巡っていた。玉砂利は、少しずつ砕けて行った。それに連れて、その玉砂利を積み上げた小山も、少しずつ低くなりながら、拡がって行った。

やがて三人は、白い砂を敷き詰めた円い空き地の周りを、時計と反対回りに、巡っていた。そして、その空き地を、濃い緑の森が取り囲んでいた。森は、人が踏み込めない程に、木々が密生していた。空き地の真ん中で、あの葱畑の方へと消えた男と女が、三人に背を向けて、立ったまま、体を密着させていた。互いの耳元に代わる代わる口を当てて、二人は、何事か話し込んでいるようだった。三人は、それを横目で見て、グルグル巡りながらも、その進路を少しず

つ、空き地の中心へと切れ込ませて行った。砂地は、とても歩き難くて、小舟を抱えている男達が、直ぐに音を上げた。

そうして彼らが空き地に踏み込んだせいなのか、男と女の体が、少しずつ砂に埋まって行くようだった。三人はもう、その空き地の外縁から中心に向かうまでの、中程辺りにまで、入り込んでいて、自分達の身の危険を察して、舟に乗り込んだ。直に二人は、そのまま、埋まって消えた。最後まで、背を向けたままだった。月明かりはもう、大分弱くなっていた。森は、真っ暗だったし、白い砂地も、その色を失い掛けて、闇が浸り込んで来るのを、許していた。舟もまた、その場で、ずるずると沈み始めていた。

籤を引いて、男が一人、舟から降りる事になった。しかし、どちらかが不正をしたと、もう片方が指摘して、二人は、取っ組み合いを始めた。舟の上なので、大立ち回りをする訳にはいかない。ただひたすら相手と組み合って、少しでも自分が上になって、相手を押さえ付けようとするだけだった。それは、延延続くように見えた。舟は沈み続けている。ただ、女は、そんな男達を眺めながらも、自分の尻が栓をしていた、舟の底の穴の事を考えていた。あの穴があれば、また玉砂利をひり出して、舟を浮かび上がらせ、動かす事も出来る。この窮状を救うには、それしかない。たとえ今直ぐケリが着いて、男のどちらかが舟を降りたとして、今更それが、何になるのか。

男の体は、捏ね合わされて、一つになった。そうして、男と女の二人切りになると、舟は、ゆるゆると前に滑り出し、向きを変えて、空き地の縁に辿り着いて、止まった。そこから先の、森の中へは、歩いて行くしかない。一歩も踏み込めそうにない森だったが、女が舟から降りれば、それがもう初めの一歩であるしかない。そこに小径が開けた。男が舟から降りると、また元の二人になっていた。それを見た女も、自分が二人になっている事に気付いて、驚いた。

小径は直ぐ、急な上りになった。女二人は、男達を気遣うように、何度も振り返った。しかしその度に、男の足元に、砂粒が湧き上がり、男達の足を滑らせた。それを見た女は、自分達の体が、自然に引き上げられて行くのを感じた。女が、坂を登り切って振り返ると、それが最後のトドメでもあるかのように、その小径の上から下までが、砂の川のようになって、男二人は、腹這いのまま、為す術なくずるずると滑り落ちて、砂に埋もれて消えた。

女二人は、高い絶壁の縁に立っていた。その先は、海があるだけだった。金色の雲が、空一面、絨毯のように敷かれていたが、海の色は、暗く沈んでいて、水平線の辺りが、微かに明るいだけだった。目の前の、絶壁の本当にギリギリの縁で、小さな飛行機が、機首を下に向けて、ユラユラと揺れていた。打ち寄せている筈の波の形さえ見て取れない、遥か真下に、海面が覗けた。女二人が、恐る恐る、その翼に触れると、それは飛行機ではなくて、傷だらけの古びた木

の椅子で、その上に、今にも滑り落ちそうに、本が一冊乗っていた。女二人は、一人になっていて、その本に触れると、女は女ではなく、その女に瓜二つの、行方知れずになっていた男だった。

本を開くと、それは、翼を拡げるようだった。彼は、自分の背中に生えている翼が拡げられたように思えて、大胆にも、大きく前に傾いているその木の椅子に、深く腰を下ろした。椅子と彼の体は、そこでゆっくり宙に浮いて、後は何処までも落ちるだけだった。もっと早くに、男に戻っていれば、森の真ん中の白い空き地で、砂に埋もれる事も出来ただろうか。椅子と彼の体は、やがて暗い水面に叩き付けられ、ばらばらになって、流されて行くだろう。

それらが纏まって、遥か南の小さな島の浜辺に流れ着いたとしよう。色々頭を捻って、誰かがそれを、一つに組み立てれば、椅子男に仕上がる。（二〇〇一年八月一日）

＊　＊　＊

看病

空腹と喉の渇きを堪えて、私は、四人に手紙を書かなければならなかった。

二通は、それぞれ相手の言葉で、何とか書けた。但し、それを受け取った相手が、どう反応するかは、私には計りかねた。全く正反対の事が浮かんだが、その二つが、頭の中で結び合わさる事は少しもなく、それ以上何も考えが浮かばなかった。次の一通は、相手の言葉を操れないので、その近くに居る、言葉の通じる者に向けて書いた。これもまた、私の手紙によって、相手が何を蒙るか、計りかねたが、もし手紙を出さなくても、それによって何が起こるかは、計りかねたので、まあ、気は楽だった。ただ、最後の手紙は、書きあぐねた。相手の言葉を、一応は操る事が出来たが、私の本意が少しも伝わらないように思えた。どう言葉を組み立てても、まるで見当違いの事をしているようだった。しかし、私の本意は何処にあるのか。いやそれ以前に、私は、私の言葉を受け取ろうとしない相手に向けて、書いているのかも知れない。私にそれが分かっているなら、伝えるべき本意など、私に定められるだろうか。それでも、私は書かなければならない。もちろん、それで相手に何が起こるかは分からないが、必ず何かが起こる事だけは分かる。その何かを起こそうとして書くのだ。それなら、何を書いても構わないかとなると、そうでもない。私の書く一言一句が、その起こる事の中に刻み込まれて行くのだから。ただ、言葉が自ずと積み上がって、一応手紙の体裁を取っているように見えて来ると、それでもう、それ以上言葉を動かしようがなかった。後味の悪さは、書く前から分かっていた。私

は、冷たい空気の、見晴らしのいい部屋に移った。

　その部屋が特に好きな訳でないが、用のなくなった物と当分用のない物ばかりが、ごっちゃに積み上がっていて、何も考えなくて済むところは、気に入っている。そうして私はもう、先程から、天井の直ぐ下の、太い鉄の棒にぶら下がって、外の景色を眺めていた。

　月明かりを採り入れている、その正面の四角い窓が、少しずつ縮んで、円くなって行く。そこから見える、小さな漁港と、岬の付け根と、その間の何時も通り波の静かな荒磯が、それぞれに少しずつ丸みを帯びて、盛り上がって行くようだった。その景色に気を取られている内に、窓そのものが、もう、小さな点になっていて、そこから一本の光線が、真っ直ぐ私の方に、差すだけになっていた。丸まって行く景色の残像を残しながら、窓が闇に呑まれると、そこからの最後の光線が、針が一本、床にポトリと落ちるようにして消え掛けた。それを見失うまいと、私は、目をギリギリ見開くだけでは足りず、部屋全体を、私の目玉にしたかった。そう出来たかどうか、分からない。それでも、その光は見付かった。それは、ギリギリ膨らんだ私の目の中に入って、弾けるように、パッと拡がって、目の中を明るくした。もちろん、目の中を幾ら明るくしても、決して外のものが見える訳ではない。外の闇は、愈愈退けられ、目の中の明るさだけが、私の周りに満ちた。或いは、私の中にと、言うべきか。

私にはもう、自らの目の中しか見えないのだ。私は、その私にしか見えない中に、飛び込んだ。そこは、光の池のようだった。殆ど息が出来ずに苦しかったが、それでも微かに吸い込める空気が、研ぎ澄まされた刃物のような切れ味で、胸の苦しみを鮮やかに切り裂いて、却って、嘗て味わった事もないような、晴れやかな気分になれた。その切り口からも光が吹き出して、光の池は、光を溢れ出させた。それは、川になって何処かに流れて行くに違いないが、私には見て取れなかった。それは、池そのものが、流れて行くようではないか。その先に、白く丸みを帯びたものが見えた。光は、全て、その周りに向かって流れていた。丸みは一様でなく、その表面の何処を見ても、そこにしかない丸みが描かれていた。幾ら光がその近くまで届いても、その白さは、特に輝きを増す事もないまま、その光よりも、鮮やかに私の目に映った。しかし、もし僅かにでも、私がそれに近付こうとすれば、私は光の中に溺れて、あっという間に、その流れに呑まれて消える事は、はっきりと分かるのだった。

それなら私は、私の方へ、その白いものを近付けたかった。私は、それに向かって呼び掛けた。それは応えたが、何かを求めて来るようだった。それにまた私が応えた。私は、光の中に溶けていた。それでやっと、それが何を求め、私がその通りに応えたかが、分かった。私は、自ら光に溶けて、それに近付いて行けるのだった。

いや、そうではない。私は、溶けてもいないし、少しもそれに近付いていない。寧ろ私は、光の池から切り離されて、独り、別の場所へ沈んで行くようではないか。薄紫色の細長い平面の中に、私は向かっているようだった。そこは平面に取り囲まれ、実は、深い裂け目に違いないのだ。見上げると、白いものは、光に見えるが、光に蝕まれるように、縮んで行くようだった。二度ともう、その姿を見る事はないのだと、分かった。なぜなら、自らはっきりと、その二度と見られない事を、受け入れられたからだ。私は、擦り切れて、長く尾を引く一個の流線型になってしまう程の、物凄いスピードで、薄紫の中を落ちて行った。

首だけ出していた。では首から下は、そこに埋まっているのか。どうやらそうではなさそうだ。首の下が、妙に冷たい。では、首から下はどうなったか。首全て、擦り切れて、削り取られて、なくなったに違いない。その替わりに、首だけが無傷のまま残ったのだ。いや、そうだろうか。私は、光の池に飛び込んだ瞬間、その刃物のような切れ味の池の表面によって、スッパリと首を切られ、胴体は、その池に沈んだが、首だけは、コロコロ転がって、ここまで遣って来たのかも知れない。その方が、余程、ありそうではないか。あの薄紫の墜落の中で、どうして首だけが、助かるのか。それとも更に遡って、最後の光線が、目の中にパッと拡がった時、首から下は、闇に犯されて腐って落ちて、首だけ

が、鉄の棒にぶら下がったままだったのだろうか。しかし、鉄の棒を渡せるような所は、何処にもない。

　私の首は、黒い地面の上に乗っかっていて、その場で、三六〇度ゆっくり回っていないだろうか。なぜなら、三六〇度の景色が見えるからだ。黒いだけの平坦な地面が、どちらに向かっても、見渡す限り緩やかに下りながら、地平線まで続いている。ただ、一様な細かな粒の、黒い土だけが綺麗に均されて、下って行く。石ころ一つ、塵一つ落ちていなかった。ただ地平線の上には、微かな肌色が滲んでいた。その向こうの地面は、肌色なのだろうか。それとも、黒い地面であっても、それを覆い尽くす程の、肌色の何かがあるのだろうか。それなら、その地平線を踏み越えて、誰か、こちらに遣って来ないものか。それとも、こちらは、余りに平坦過ぎて、何もなさ過ぎて、しかもだらだらと上るばかりでは、誰も、来る気にはならないのだろうか。

　それで思わず私は、空を見上げたくなったが、頭の直ぐ上に、目に見えない庇が張り出しているようで、全く空を見る事が出来ないのだった。それなら、ここは地面ではないのではないか。黒い土が敷かれてはいるが、地平線までを覆う、巨大な建物の屋根か、或いは、空が見えないなら天井裏だろうか。いや、恐らくそのどれでもない、ここはただ、この通りの所であって、他に、付け加わるものは何もない。この上にも下にも向こうにも、何もない。ただ私が、何

処からかここに来て、ここからまた何処かへ行くまで、居場所でしかない。いや、或いは、場所でさえなくて、私はただ、私の姿を眺めているだけかも知れない。私は、このようである前に、どのようにかあって、この先また、どのようにかあるまで、このようにあるままの自らの姿と、対面しているだけではないのか。私は誰かに、私の事を呼んで欲しかった。呼ばれさえすれば、このような姿から、また別の姿に移れるのだ。そう思うだけで、何処からか、呼ぶ声が聞こえた。私には、口を利く事も、表情を作る事も出来ない。それでも、何としても、声に応えなければならなかった。首を、前に転がした。首は、黒い土の上に、渦巻き模様の跡を引きながら、ゆるゆると下って行くようだった。しかし、直に渦巻き模様は絶えて、風など吹く筈もないのに、それは掻き消された。初めから、首などなかったのかも知れない。

　明るいだけの小さな部屋に居た。いや、部屋であるかどうか、分からない。どちらを見ても、ただ明るいとしか見えて来なくて、じっと見詰めれば、それが、明るい壁に見えてしまうだけかも知れない。それを見ている私は、どのような姿をしているのか。私もまた、ただ明るいとしか見えないものではないか。それ以外のものは、何一つ見当たらないのだから。また、私を呼ぶ声を聞きたかった。別の姿に移りたいからと言うより、その声に、自らの姿を映したかった。しかし、声は聞こえて来そうにない。それなら、直に鏡を見出せばいいの

だ。或る一点に狙いを定め、そこに、鏡を呼び込もうとした。形の定まらない、半透明の水色掛かった小さな平面がじわじわと現れ、細長いぼんやりした影が、次々に映っては、通り過ぎて行った。そのどれも、少しも私に似ていない。影は吹き払われた。すると、そのどれもが、私の影だったように思えた。それきりそこには、何も映らなかったが、そこに、女が姿を現しているのは分かった。何も映らないのは、女の徴か。女は、何かを頬張って、舌で転がしていた。女は、それを吐き出した。それは、自分の目玉だった。男が、刳り抜いて行ったのだろうか。いや、それは、私の目玉ではないのか。男が、それを踏み潰した。そこにはやはり、男も居るのだ。ただ明るいだけなのは、私が、目玉を通さずに見ているからではないか。

男は、私の目玉を踏み潰して満足したのか、何処かへ行ってしまった。女は、独り切りにされて、冷たくなって行くようだった。女は二人になっていた。そうして二つの体で、その冷たさを分け合って、凌ごうと言う積もりらしい。体を寄り添わせれば、温め合う事も出来そうだ。しかし、冷たくなって行くのは止められない。女は、四人になった。彼女達は、互いの目玉を刳り抜き合って、どれが誰のか分からなくなるまで混ぜ合わせて、それを二つずつ頬張って、暫くしてから、それを呑み込んだ。男が戻って来て、順々に女の腹を割いて、目玉を取り出した。それは目玉なのか。卵ではないか。すると、男が、そこに倒

れ込んだ。瀕死の重傷を負っていた。女達は、順々に体を重ねて、男の看病をした。いや、それは看病する振りだけで、男は直ぐに死んだ。男の姿が、水色の上に、じわじわと現れて来た。細長いぼんやりとした影でしかなかった。

それは、そこから抜け出して、私の中に収まった。それは、二枚の薄くて尖った小さな刃物のようになった。それが、私の中で、私の何かを切り裂きながら、グルグルと回り出した。何も映らない水色の奥で、四人居た女が、一人に戻っているのが分かった。女は横座りになって、背筋を反り返らせる程に伸ばし、細い腕を前で組んでいた。見えないのに、どうしてそんな事まで分かるのか。刃物以上に、その女の姿が、私を切り裂いて行くようで、耐え難かった。私は、水色の中から、女を引っ張り出さずにはいられなかった。

それは、白い影だった。見て取れた訳ではない。そう分かるだけだ。それが、二枚の刃物と組み合わさって、三枚のプロペラのように回り出した。それはまた、私を、別の私へと連れ去るようだった。目玉を置き忘れた事には、途中で気付いた。そう言えば、一人に戻った女の姿の、腹は割かれていなかった。彼女の目はどうなっていただろうか。目玉の他にも、数え切れない程のものを、置き忘れたに違いない。プロペラは、移動中の今も、私から私の何かを切り離して、それらを、次から次へと、置き去りにしているのではないか。それはどういう事なのか。それを理解するためのものも、私から切り離されて、もう為

す術はなさそうだった。（二〇〇一年八月三日）

*　　*　　*

苦み

　四人でチームになって、私達は、その部屋の床と壁を、ペンキで真っ白にしていた。耳障りな音楽が、全く馬鹿げた大音量で流されていた。私は、部屋の一番奥の隅っこで、眠気に襲われないように、一心不乱に、四つん這いになって、刷毛を握る手を動かしていた。私は多分、ひどく青白い顔をしていたと思う。仲間が、私に声を掛けていたが、音が凄くて聞き取れなかった。漸くそれを聞き取って、そう言えば先程から、低音がブルブル響く騒音の中に、ナマの人の声が混じっていたようだったと、気付いた。誰かの名が、しつこく呼ばれていたようだ。その中に、ひょっとすると、女性の声も、挟まっていたかも知れない。仲間が、目で合図した。そちらを見ると、疲れで視力が落ちていて、ぼんやりとしか見えなかったが、部屋のたった一つの出入り口に、白っぽい服を着た髪の長い女性が立っていて、私に向かって、笑顔で軽く会釈して、直ぐに立ち去った。彼女は、後に残る全員に、挨拶をしたかったのだ。一人だけ、

そっぽを向いたままの私を見付けた彼女が、私に届くように、何度も声を掛けたらしい。他の三人は、ちゃんと彼女に挨拶を返しているのだし、一人くらい、そっぽを向いたままであったところで、構わないではないか。しかも、その場で聞かされて知ったのだが、彼女は、何時も取り巻きに囲まれているような、世間から大切に扱われている人だった。一方、私は、ここに流れて来たばかりで、彼女との係わりなどある筈もなく、そんな幾らでも取り替えの利くようなヤツなど、見向きもされないのが普通ではないか。他の三人も、彼女が私に向かってだけ、「お先に失礼します」を繰り返すのに驚いて、慌てて、それを私に気付かせようとして、私の名を連呼したのだ。後で三人は、彼女が、懸命になって、二度三度と私に声を掛けるのを、羨ましがるような事を言ったが、騒音に遮られて、殆どそれを聞き取れなかった私には、ピンと来ない話だ。

　さて、床も壁も真っ白にして、私達は、その部屋を後にした。最後の後片付けは、新米の私の仕事で、私が最後に、部屋の灯りを消して、そこを出た。それから私は、一人、そこに戻った。何のためかは、はっきりしない。多分、何かやり残したか、気になる事でもあったのだろう。ただそれが、十分後なのか、十時間後なのか、十日後なのか、十年後なのかが、分からない。しかし、部屋のドアを開けようとする私は、私への挨拶に拘ったあの女性が、その後、痛ましい闘病生活の末に、若い命を落とした事を知っていた。とすれば、それは十

年後であるしかない。
　ドアを開けて、直ぐに分かった事は、部屋を間違えたと言う事だ。見上げると、ドーム型の天井の直ぐ下に渡された鉄の棒に、他でもない私が、裸でぶら下がっていた。肌は、精悍な褐色だった。
　私が、部屋のドアを開けたなら、予めその部屋に、私が居る筈がない。それなのに、そこに私が居るなら、初めからそこは別の部屋で、その部屋のドアを開けた私も、そこに居る筈のない私であるしかない。十年は、更にその先へと、引き延ばされるようだった。
　ぶら下がって、私は、真っ青な床を見下ろしていた。四面の白い壁は、垂直かも知れないが、床は、ひどく傾いていた。その床のあちこちから、満遍なく、卵形の白い塊が生えて来る。どれも、ちょうど鶏の卵くらいになって、成長を止めた。それが次から次に生えて来て、床が、その塊ですっかり覆われて真っ白になったら、私は、そこに飛び降りる積もりだった。そして、そこに尻餅を搗けば、それがクッションになって、私の体は、その場から低い方に向かって、ピョンピョンと跳ねて、その低い方の壁の隅にあるドアから、外に飛び出そうという、目論見だった。しかし、初めの内こそ、その白い塊は、次々に生えて来ていたが、後が続かない。しかも、既に生えているものも、成長が鈍っている。床からの養分が足らないのだ。床に肥料をやるべきだ。

床の高い方の壁にだけ、窓がある。窓は開いていた。その窓枠に、小さな猿が飛び乗って、手に持った袋から、ピンクの粉を撒いた。粉が、床の白い塊に降り掛かると、その塊の成長は、全く止まってしまったし、新しいものも、二度と生えて来なくなった。私は、精一杯、下半身を振り動かして、猿を脅したそれは、仲間を呼び集めようとするような声だった。

猿のように素早く、窓枠に飛び乗って、猿の方を向いて、窓枠を跨いだのは、人間の女だった。女が、私を見上げた時には、私は、体を動かすのを已めていた。女は、顎を上げ、口一杯に含んで噛んでいた透明なガムを、猿の顔に吐き付けた。それを、猿は、取ろうとして、却って、顔面にそのガムをなすり付けるような事になって、顔中、ガムだらけになった。ピンクの粉の入っていた袋が、脇の下から滑り落ちると、ちょうど窓から風が入って来て、その袋を、私の方に、舞い上がらせた。私は、鉄の棒にぶらさがったまま、それを巧く口に銜える事が出来た。骨を焼いたばかりのような匂いがした。首を傾けて、何とか中を覗くと、ピンクの粉は、もううっすらとしか残っていなくて、袋の底に、色とりどりの長目の針が、何十本と入っていた。時計の秒針ばかりを集めたようにも見えたが、それならもっと重くて、袋が風にフワフワと舞い上がったりはしないだろう。何かもっと、別のものに違いない。

　顔中ガムの猿は、それを取り去るのを諦めてしまえば、それでどうにでも、自分の顔を、指で作る事が出来そうだった。猿は、真っ青な、人間の男の顔になった。すると、女の方が、顔だけ猿そっくりになった。猿は、急に、甘えるような科を作って、女の袖を引っ張った。女の着ている服を、欲しがっているようだった。女は、穏やかな猿の表情で、猿の青い男の顔を見詰め、上着を一枚脱いだ。それは、透ける程薄くて、その下にまた、同じような服を着ていたので、脱いでも脱がなくても同じように見えた。猿は、それを着ようとするが、全く、丈が長過ぎるし、胸回りも細すぎて、どうしようもない。色々やっている内に、服はあちこち破れて、潰れて、段々ネバネバして来て、猿の全身にこびり付くようになった。しかし、ガムで学習したのか、そのまま、ずるずると、それを捏ね回すような事はせず、体のあちこちに唾を吐いては、そこを順々に、指でそっと撫でて行って、そのネバネバする布片を、体から落として行った。それらは、窓から床にこぼれ落ち、床を滑り落ちて、ドアの脇の壁際の、床の一番低い所に、溜まって行った。猿の体はと見ると、体中の毛が、粗方毟り取られて、なくなっていた。また、風が吹き込んで来て、猿がブルブルと体を震わせると、残っていた毛も呆気なく抜けて、それが部屋中に舞った。風が、天井のドームで渦を巻き、その猿の毛の殆どが、粘っこい汗をかいている私の全身に、まぶされた。私は体中が、痒くて仕方ないが、手が塞がっていて、掻く

事が出来ず、袋を銜えたまま、歯を食いしばるしかない。
　猿顔の女が、それを見て笑ったが、猿の鳴き声だった。それが、壁を震わす程に、部屋中に響くと、四面の壁から、女の顔が、次々に浮かび上がって、壁中に、女の顔で埋まった。それが一斉に、口一杯の、透明なガムを吐いた。ついでに、血と髪の毛の混じった唾も吐いた。青い男の顔の猿が、人間の声で、「もっと濡らせ」と叫んだ。すると、壁中の女の顔が、猿の顔になって、猿は、血の混じった唾を休みなく吐いて、最後には、ドロドロした全くの血を吐いて、血歪みながら壁の中に消えて行った。壁は、血糊をみるみる吸い取り、直にまた真っ白に戻った。
　青い男の顔の猿が、私の直ぐ横で、私と並んで、鉄の棒にぶら下がっていた。壁に気を取られた隙に、こんなにまで、コイツを近付けてしまうとは、不覚だった。顔は人間だし、体中の毛も、ほぼまるきり抜けていて、しかも、ぶら下がっている内に、ゴムが伸びるように、胴も脚も長くなって、およそ猿のようではなくなった。しかし、それは、人間の体にも見えては来なかった。もしこれを人間の体と見るなら、胸も腹も腕も脚も、何処か歪んで、妙に薄っぺらな、極端に頭でっかちの、小柄な男の丸裸の姿だろうか。ヤツは更に、ジリジリと私の方に近付いて来た。私は飛び降りたくなった。下を見ると、女が、私の真下で、四つん這いになって、卵形の白い塊を、ペロペロ舐めていた。私は、そ

の女の背中目掛けて、飛び降りた。
しかし、私の体は落ちて行かなかった。直ぐに、青い男の顔の猿の片腕が、私の首に伸びて来て巻き付き、私は宙吊りになったのだった。当然、その腕は、私の首を絞めた。しかし、手が自由になったので、咄嗟に私は、銜えていた袋を手に取って、中の針を一握りで全て掴み取り、一気に飲み込んだ。それは、複雑に絡み合う一塊りとなって、喉に詰まり、喉に突き刺さって、内側から、私の首を補強するような形になった。おかげで、私は、多少血を流しても、絞め殺されずに済んだ。
女は、次々に白い塊を舐めて行った。それらは、女の舌に擦り取られて、最後は女の腹に収まった。女はそれらを綺麗に平らげて、床はまた真っ青になった。女は、四つん這いのまま、床の傾斜の低い方を頭にして、尻を突き立てた。そして、真上を向いた肛門から、次々に、卵形の白い塊をひり出した。ひり出すと言うより、ポンと音を立てて、真上に向かって、一つ一つ打ち上げた。それらは、天井近くまで飛び上がって、青い男の顔の猿の腕が、それらを順々に受け止めた。見ると、猿は、両脚で鉄の棒に逆さにぶら下がり、左腕を、私の首に巻き、右腕を、リズミカルに、ヒュンヒュンと音を立てて撓らせては、卵形の塊を掴み取っていた。掴み取ったものは、直ぐに口に運ばれた。噛み砕いている時間はなさそうで、恐らく、順々に呑み込んでいるのだろう。

女は、腹の中のものを全て出し尽くしたようで、晴れやかな顔付きで、私達の方を一度見上げてから、四つん這いのまま動き回って、両掌で、青い床をさすり始めた。床は、みるみる磨き込まれて、私と猿らしきものの姿が、床に映った。そこに、ピンク色の卵が生えて来た。女は顔を曇らせて、そのままズルズルと床を滑り降りて、振り返りもせず、黙ってドアから出て行った。猿が腕の力を緩めたので、私は、床に落ちた。大口を開け、喉に突き刺さった針を抜いては、ピンクの卵の表面に突き刺して行った。そこから真っ赤な煙が吹き出し、その塊は、みるみる萎んで、そこに小さな穴を残しては、消えて行った。その穴を針で塞いだ。それでも卵は、その塞いだ穴の直ぐ横から、また次々に生えて来たが、それに見合うだけの針も、私の喉から幾らでも出て来た。

男と女の叫び声が、絡み合って響きながら、天井から落ちて来る。ドームは、煙が籠もって真っ赤だった。男と女が、鉄の棒を跨いで抱き合って、腰を振るわせているのが、真っ赤な中に、影のようになって見えた。私の喉の針は出尽くした。それでもまた、ピンクの卵は生えて来た。私は、先程、女がしたように、それを、ペロペロと舐め取って行くしかなかった。それは、恐ろしく苦かった。舐めれば舐める程、慣れるどころか、その苦さは、決して舌で味わうべきものではないと思えた。それでも、已めるに已められなかった。その味以上に、ピンク色と卵の形は、目にすべきものではないと思えるからだろうか。し

かし、女と違って、私の舌の動きは鈍く、とても追い付かない。床一面、ピンクの卵でいっぱいになった。

　その溢れかえったピンクの卵に目が眩みながら、それでも私は、舌を動かしていただろうか。いきなり、背中に重い衝撃を受けて、顔面がピンクの中に埋まったところまでは、覚えがある。

　気が付くと、私はまた鉄の棒にぶら下がっていて、口から、ピンク色の卵形の塊を、一つまた一つと、吐いていた。その苦みは尋常ではなかったが、逃れようがない。見下ろすと、男と女が、並んで四つん這いになって、床を磨いていた。床はもう真っ青だった。私が幾ら卵を吐いても、それは、床に届く前に赤い煙になって、消えた。男と女は、頭の上で何が起こっているか、全く気に留める様子もなかった。

　いや、私は、部屋を間違えてはいなかった。ただ、随分と、遠くまで来てしまっただけだ。そうだろうか。案外、大して遠くでもないのかも知れない。いや、遠い近いの問題ではないのではないか。では、何が問題なのだろう。（二○○一年八月五日）

*　　*　　*

横道

　それぞれのモノの形が見分けられる程には明るかったが、その見分けられたモノの形は、見覚えのないものばかりだった。しかもそれらは、そこに引き込まれてしまいそうな程、恐ろしく密集しているようだった。それらを、私は、高い所から見下ろしていた。真四角なビルの屋上が、遥か真下に見て取れると、どうしてもそこに目が行って、他のものが見え難くなった。私は、途轍もなく高い所に居る。どうしてかは、分からない。
　何時までも、その真四角ばかりを見ていても、何も起こりそうにない。そんな遥か下の事よりも、私の周りは、どうなっているのか。そうは言っても、果たして私に、周りを見回す事が出来るのか。もし、見えているにしても、そこは、明るくも暗くもなく、モノの形一つ、現れて来ない、見えても見えなくても変わらない所でしかなさそうだ。
「そこで、何をしているんですか。」と、誰かが、問い掛ける。
　それは、誰かの声だろうか。側に誰かが居るかどうかなど、分かる筈もない。しかし、そのまま黙っている訳にはいかなかった。その、声だか何だか分からないものが、ずっと、分からないままに、私を縛り付けて来そうだった。何か、応えるべきだ。

「あなたには、私が、見えるんですか。私は、何処に居るんですか。あなたは、私の側に居るんですか。いや、私はあなたに呼び掛けて、構わないんですか。そもそも、あなたは、私に声を掛けたんですか。それとも、他の誰かに、声を掛けたんでしょうか。それなら、あなたを、私が、あなたと呼んでも、そのあなたは、何処にも居なくて…」

言葉が続かなかったが、それで良かったのだ。私はそれで、私を縛り付けそうなものから、逃れられたようだった。

　そのビルの屋上だけが見えるなら、私は、そこに向かって飛び降りよう。他に、出来そうな事などないではないか。私は、最後の積もりで、周りを見直した。すると、透明なガラスの壁が、見えて来た。或いは、そのガラスの壁に当たる光が、微かに見て取れただけか。しかし、その光は、ガラスの表面を舐めながら、私の足元まで、届くようではないか。それなら、その光はカーブを描いている。ガラスは、平面ではない。私は、足元に掌を持って行って、そっと触れた。触れた筈なのに、何も感じ取れず、触れていないかのようだ。掌ではダメなのだ。慌てて、ポケットをまさぐった。小さなカッターが出て来た。細かく折られた、半透明の薄っぺらな紙を開くと、硬いものなら何でも切れるが、柔らかいものは、巧く切れないので、已めた方が良い、と書かれてある。試しに、腕を切ろうとしてみた。なるほど、皮膚が刃物に貼り付いて、刃を滑らす

のも、ままならない。

　足元のガラスの曲面に、刃を当ててみる。やはり手応えは感じ取れず、ガラスが切れているかどうかは、もう一つはっきりしないが、そこを舐めている光に、筋が付くのは、はっきり見て取れた。余りに切れ味が良過ぎて、それで手応えがないのか。カッターの長さと同じ深さの傷は付けられても、ガラスの方が、ずっと厚いようだ。遙か真下に見下ろせる、ビルの屋上の真四角を、カッターでなぞってみた。光の筋が、黒い線になって、小さな真四角を描いた。それでやっと、その他の見覚えのない形のものにも、目が向いた。私は、それらをカッターでなぞって、その見覚えのない形を、夢中で、ガラス面に写し取って行った。写し取れたものの形は、何処か見覚えがあるように見えて来る。そうして、真下に拡がる都市の鳥瞰図が、描き出された。私は、ごちゃごちゃした街並みが続く、大都市の遙か上空に居るのだ。そして、その鳥瞰図は、どうやらガラスの球体の底に、描かれているようだ。

　拳を振り下ろすと、私が描いた線に沿って、ガラスは細かく砕け、一斉に落ちて行った。球体の底が抜けて、私も落ちて行く筈が、そうはならなかった。割れた直ぐ後に、また同じ厚いガラスで、私の足元は塞がれた。そこから、無数の細かなガラス片が、斜めの光を受けて、キラキラ輝きながら、舞い落ちて行くのが見えた。それらはどれも、その描かれた地上の構築物に向かっている

ようだった。そして、ガラス片が、その上に落ちると、それらの構築物は、どれも、その形を一変させた。その新しく見て取れた形は、いかにも、その本来の形のようだった。

　では、私が描いた形は何だったのか。かりそめの姿か。かりそめの姿しか見て取れなくて、私は、独り、空の上に残されたのではないか。私は、急いでまた、その形を、カッターで、ガラス面になぞって行った。ところが今度は、その見たままの形ではなく、ガラス片がまたそこに落ちて行って、また形を変えるであろう、その予想される形を、私は描いてしまうのだった。それなら、それもまた、そのもの本来の形ではなく、或る局面での、その局面の中にしか現れない姿でしかないのではないか。しかし、手は止まらない。またガラスの底に、びっしりと、都市の鳥瞰図が描かれ、また、拳の一撃で、それらは砕かれて、落ちて行った。案の定、私だけが、また取り残された。しかし、ガラス片が、それぞれの、その予想される形を描いたものの上に落ちると、私の全く予想しなかった、見覚えのないものに、そのそれぞれは、形を変えた。

「こっちに来ませんか。」とまた、さっきと同じ調子で、誰かが、問い掛ける。

「是非、そうしたいとも思うんですが、難しそうです。どうやら私は、割れても割れても、直ぐに修復されてしまう、ガラスの球体に閉じ込められている

ようで…」
「全く、そんな事はありませんよ。」
何が全くそんな事はないのだろうか。私は、受け答えそのものがなかった事にして、また地上の、数え切れない構築物の形を、順になぞり始めた。しかし今度は、その見えた通りにも、その変化が予想されるようにも、描けなかった。
それらは、まるでデタラメな形にしか、描けなかった。すると、実際に見下ろされている都市の景観と、それを描いている筈の鳥瞰図が、ずれて来る。ガラス面の上の、それを見て取れている位置に描いている積もりが、どうしてもはみ出して、順々に、外へ外へと押し出されてしまう。どれがどれが分からなくなって、収拾が着かない。仕事を投げ出すしかなかった。
見下ろすと、また、あの真四角なビルの屋上ばかりが、目に留まって、他が巧く見え難くなった。ビルの屋上は真っ青だった。そしてそこに、誰かが、私の投げ出した鳥瞰図を、白い線でせっせと描き出しているのが、見て取れた。私その者は、決してこちらを見上げたりしない。ただ俯いて、私の引いたのとそっくりの線を、引いていた。そしてそれは、やはり四角い屋上に収まらず、外にはみ出した。何もない空中に、白い線だけが延びて行く。そんな事が出来るのは、誰なんだろう。私は、その屋上に降りたくて堪らなくなった。
「あそこに行きたいんだけど…　聞こえてるんでしょう？　行けないんなら、

せめて、あの人に私の事を伝えて欲しいんですが…」
返事はなく、私はまた、ただ屋上を見下ろすしかなかった。暫くすると、もう一人屋上に居て、線を引く者に近付いて行くのが、見えた。
「なんか、うまくいかない。ねー、どうしたらいいの。」と、女は男を振り返って言った。
男が、何か、ぼそぼそ言うと、白線は全て、消えてなくなった。屋上の真ん中で、女はチョークを持って四つん這いになり、男がその上にのし掛かって、女の手を取り、男の意のままに線を引いていった。そうして引かれた白線の描く形は、私には、初めて見るものばかりだった。二人は、屋上の隅から隅までを、全くはみ出す事もなく、白線の図柄で埋め尽くし、鳥瞰図らしきものを完成させた。女が男にぶら下がるようにして、二人は非常階段をノロノロと降り、白い車に乗った。私は、遥か上からそれを見ていられるのだから、二人の行く先を簡単に目で追える筈が、発進して直ぐに、その車を見失ってしまった。
私は、彼らが残して行った、屋上の図柄を、そっくり、ガラスの底に写し取りたいが、途中で投げ出された鳥瞰図の線でいっぱいだった。出来損ないでは、幾ら拳を打ち付けても、踏み付けても、ガラスはビクともしないようだ。どうして振るう弾みに、カッターで腕を切った。傷は深くて真っ直ぐだった。拳をそうなるのか。腕は硬くなっていたのか。それとも、その刃に、ものを振り立

てれば、柔らかくても切れるのか。血が滴って、ガラスの線の中に染み込んだ。その血は透明になって、線を埋めた。私は、片手でカッターを固定し、そこに腕を振り下ろしては、腕に傷を作り、血を滴らせた。そうして線を埋めて行ったが、その出来損ないの鳥瞰図を全て消し去ると、私は、気が遠くなりかけて、ガラスの底に仰向けに倒れ込むしかなかった。服を破って、胸から腹に、屋上の図柄を、記憶を頼りに、カッターで刻み付けて行った。カッターの刃は、もう大分なまくらで、皮膚を傷付けるには丁度いいようだった。

その一方で、周りの温度がどんどん下がって行き、私の体はすっかり凍った。拳で胸を叩くと、胴体は粉々になって、球体の中をグルグル回り出した。

「私は、死んだんですね。」

「死んだのなら、そんな事は聞けませんよ。」

先程から、私は、私に向かって話し掛けていたのだ。私は二人居た。どちらかが死んだ私で、どちらかが死んでいない私だ。生と死以外に、ここで私を、二つに分けられるものはない。しかし、どちらがどちらか分からない。いや、粉々に砕けた方が、死んだ私に決まっている。それなら、後の事は、粉々にならなかった私に任せるしかないか。

粉々になったのは、胴体だけだ。私は、首だけで寝返りを打って、俯せになった。地上が、少しずつ近付いていた。青い屋上を探した。その真上に落ちた

い。しかし、屋上はなかなか見付からなくて、見付かった時には、軌道を修正して幾らかは近付けても、もう届きそうになかった。それどころか、そのビル自体が、解体されていた。

　ガラスの球体は、何処か分からない、暗い所に落ちた。高度が下がるに連れ、ガラスはその厚みをなくして行ったのか、シャボン玉が割れるように、殆ど音も立てずに割れた。私の粉々の胴体が飛び散って行った筈だが、それで、地上のものの形が、変わる事はないようだった。腕と脚は、そのままそこにボトリと落ちて、市の職員に持ち去られ、水族館の鮫のエサになった。首は、ゴムボールのように、大きく跳ねて、青い屋上の取り壊されたビルの跡地に落ちた。そこには穴が開いていて、首は、そこから地下深く拡がる巨大な空洞に落ちて行った。空洞の内面は、ほぼ一様に灯りに照らされ、剥き出しの地肌を浮き立たせた。

　屋上に居た男と女が、その鮫の水槽の前を、鮫など見向きもせずに、通り過ぎた。水族館は、その地下の空洞の中にあって、二人は、そこを出て、やはり地肌が剥き出しの坂道を上って、空洞の出口に向かうようだった。その坂道を、首だけの私が、コロコロと転がり落ちて行く。二人は気付いただろうか。気付いたとしても、それとなく目を逸らすだけだ。擦れ違いざま、私に、首から下が戻った。すると途端に水族館が見失われた。

私は、それでもゴロゴロと転げ落ちて、その空洞の一番底の濁った水溜まりの前で止まった。その水を掬って飲もうとしたが、掌に穴でも開いているかのようで、どうしても巧く行かない。私は、全く時間をムダにしていると思い至った。立ち上がって、坂を全力で駆け上った。しかし、その地肌は、とても硬くて、濡れていて、元々滑り易い上に、細かなガラス片が、一面に撒かれていた。脚が滑るばかりで、殆ど前に進めない。若い女達のグループが、私を取り囲んで、けたたましい声を立てて笑うのだった。

「どうして、こんな事になるんですか。」

「こっちに来ませんか。」

「どうやって？」

「女の子達に頼んでみたら。」

私が、その一人の肩に掴み掛かろうとすると、彼女達は、急に黙り込んで、一塊りになって、横道に逸れた。その先に、水族館の建物が見えた。彼女達が、その入り口から中に入ったのが見えたが、私は、その入り口が何処だか分からず、あちこち歩き回った末、その屋上に上がっていた。そう深くもない円いプールがあって、そこを泳いでいる鮫は、私の顔をしていた。プールの脇に立つと、その鮫が水面に尻尾を振り立てて出来た波しぶきは、私の胴体だった。そのまま私は、プールに飛び込んだ。

遠くで、車を発進させる音が聞こえた。あの白い車に違いなかった。（二〇〇一年八月七日）

＊　＊　＊

匂い

一人も客のいない薄暗い本屋の、一番奥の隅っこの辺りで、彼は、「水」に関する本を探していた。棚に並んだ本の背表紙を、順に目で追っていると、自分が生まれ育った県の名を見付けた。海も川もあって、水と関わりがない訳でもない。その本を棚から引っ張り出すと、表紙のタイトルは、その隣の県の名だった。背表紙も隣の県の名になっていた。同じ棚を幾ら見直しても、彼の生まれ育った県の名は、もう見付からなかった。手に取った本を、また棚に戻してみたが、やはり隣の県の名だった。その両隣に、背表紙に県の名を記した本がずっと続いたが、彼の生まれ育った県からは、遠ざかるばかりだった。仕方なしにまた、彼は、隣の県の本を抜き出した。ついでに、その上下の棚にも目を配ると、余所の国の名がズラリと並んでいて、なぜか砂漠を連想させる国ばかりだった。それらの国にも、川は流れているだろう。しかし、それを思い浮

かべる彼の頭の中では、そこを寒気が襲って、川は丸ごと凍り付き、その黒く凍った川面が、乾燥してギザギザと脹れ上がるのだった。

店番の中年の男は、汚そうな手の爪に、ヤスリをかけるのに夢中のようだった。もう夜ではないのか。それなのに、中の灯りは消されたままで、街灯の光が差し込むだけだった。隣の県の本を開くと、お茶畑の写真が載っていた。初め白黒に見えたが、見詰めている内に、色が着いているのが分かって来た。彼は、両脚を少し拡げて、踏ん張っていた。腰に両肘を突き立てて、二本の腕で支えなければならない程、本は、大きく重くなっていた。一面、葉の色が赤紫で、茶畑は全て、病気にやられているように見えて来た。本の重さに耐え切れず、腰を屈めて、本を膝の上に乗せて、やっと頁を捲ると、お茶の木は、全て枯れていた。次の頁を捲ると、そこには、全面見開きで、全くの禿げ山が、月明かりを浴びている写真が、載っていた。禿げ山は、紙の中から、今にも浮き立って来そうだった。重過ぎて、本は、勢いよく閉じながら、膝の間から滑り落ちた。

しかし、何の音もしなかった。いきなり彼は、小さな木の椅子に掛けて、小さな木の机に、肘を突いていた。女が、肩越しに話し掛けて来た。後ろから机の上を覗き込むようにしたので、彼女が、小柄で、髪が短いのが分かった。彼女は、溶鉱炉の事を聞きたがった。なぜかと聞くと、子供の頃、家の近くに製

鉄所があったからだそうだ。机の上は傷だらけで、その傷を見ながらであれば、彼は、女の質問に、何でも答えられた。女の質問が途絶えたので、そちらを見ると、彼女は顔を曇らせていて、「何にも知らないのね」と言った。

本棚が全てなくなっていて、がらんとしていた。レジの台さえなくて、店番の男は、両手を後ろで組んで、俯き加減に棒のように細い体を傾けて、狭い店の中を忙しく歩き回っていた。歩き回る程に、それは、ますます細くなって、縮んで行くようだった。

小柄な女が、お茶の事を聞いて来た。彼は、何も答えられず、窮屈なのにも嫌気が差して、立ち上がって、外を見た。そこは、駅前の広場で、裸同然の、五、六人の女達が、通行人に何かを手渡そうと、セカセカと歩き回っていた。しかし、直に通行人は居なくなった。もうすっかり夜中なのだ。彼は、開かない自動ドアを手で押し開け、本屋を出て、女達の方に近付いて行った。しかし、黄色と黒のロープが、迷路のように張られていて、直ぐに先に進めなくなった。女達は、薄緑色の大きな葉っぱを、何枚か重ねて、手に持っていた。

針も文字盤も、真っ赤に錆びた時計台を見上げると、時計の上の小さな青い屋根の上に、女がよじ登っていた。今さっき、本屋で話をした女のようだった。真っ黒なロングスカートを穿いていて、真ん丸い小さな尻を、彼の方に、突き出していた。時計の針は、動いているのかも知れないが、文字盤の色の中に暗

く溶けて、ぼんやりとしか見えない。それなら、その女の尻が、時を告げるしかないではないか。のっそりした、その動きの中に、今の時刻を読み取らなければならないように思えて来て、彼は、追い詰められた気分になった。或いは、それは、ここには、もう時間はないと、告げているのだろうか。いや、時間がなくなる筈はない。精々、暫くの間、止まっているだけだろう。ただ、そうであるにしても、彼独りだけが、その止まった時間の外に居るように思えた。外に居るのでなければ、それが止まっているとも、分からないのではないか。

　そんな事を思いながら、彼は、知らず知らず、しゃがみ込んで、舗道のタイルを剥がしていた。面白いように、ポロポロと剥がれて、已められなくなる。剥がしたタイルは、少し先の、地下通路に降りる階段に投げ込んだ。それもまた、面白いように、一つの失敗もなく、回転するタイルが、その降り口に吸い取られて、カラカラと籠もった音を響かせた。次の一枚を剥がそうとすると、そこに、高いヒールを履いた小さな女の足が、二つ揃って乗っていた。女は、両脚をぴったり閉じて、しゃがみ込んでいた。女は、科を作るように、首を少し傾げて、薄緑色の葉っぱを一枚、彼に差し出した。彼は、それを受け取って、立ち上がった。丁度顔と同じ位の大きさだったので、目の穴を二つ開けて、お面にして被った。お面の穴を通して見ると、駅前の一番大きなビルの正面の入り口が、大きく開いているのが見えた。しかし、そこに行くには広場を横切る

しかなく、ロープの迷路が、彼を阻んでいた。地下通路は、駅ビルの地下に通じているだけだった。それでも彼は、何歩か、ふらふらと前に進んだ。ほんの少しだけ、ビルが、前に傾くようだったので、足は止まった。

　振り返ると、しゃがみ込むままの、女の後ろ姿が見えた。尻だけは、辛うじて隠れていたが、柔らかそうな背中は、全くの剥き出しだった。彼の真似をしたのか、葉っぱのお面を被っていた。いや、被っているのではなく、首から上は、葉っぱだけだった。葉っぱが、丁度顔の位置に浮いているだけで、彼は、その葉っぱの裏側を見ているのだ。女の頭は、何処へ行ったのか。しかし、その葉っぱに息が掛かって、細かく震えているのは分かった。それなら、ただ光の具合で、たまたま彼に、彼女の頭が透き通って見えるだけだ。彼女は、膝をきつく抱えていて、さっきよりもっと、俯いているようだった。

「他の葉っぱは、どうしたの？　もう全部配れたの？」と、私は、囁くように聞いた。

　彼女は、首の代わりに、葉っぱを横に振った。

「じゃあ、葉っぱは、どうしたの？　もっと、いっぱい、持ってたでしょ。」

　女は、首の代わりに、葉っぱを縦に、微かに振った。それは、風が揺らしたようにも見えて、彼は暫く、じっとして、風を感じ取ろうとした。しかし、風は全くなかった。

「そんな恰好じゃ、寒いでしょう。」
「そんな事、ないよ」
葉っぱが、カサコソ鳴って、そのような言葉になって、彼の耳に届いたのだと、彼には直ぐに分かった。女は、葉っぱの顔を上げていた。葉っぱの二つの穴が、本屋の方を見ていた。
「本屋」とだけ、彼女は、葉っぱを鳴らして呟いた。
「本屋」とだけ、大きく書かれた看板が、女に見詰められているせいか、まるで、熱を出して、燃えているかのように、赤くなっていた。
「一緒に見て」と、葉っぱの音で女に言われて、彼も、その看板だけを見詰めた。看板は、どんどん大きくなって、大きくなり過ぎて、見えなくなった。本屋もなくなっていた。四角い窓が並ぶだけの、灰色のビルがあるだけだった。本屋は、その一階の真ん中辺りにある筈だった。彼は、女の尻を蹴飛ばさないように注意して、その直ぐ脇を通り、真っ直ぐそのビルの前まで進み、そこを行ったり来たりし出した。そうしている内に、本屋がまた戻って来るように思えて、足を止められなくなつた。
舗道を見ると、五人の裸同然の女達が、タイルを剥がした跡に、彼に背中を向けて、五人横一列に並んでしゃがみ込み、そこに生えて来た草を毟っているような、手の動きを見せていた。それで、彼は、やっと足を止める事が出来た。

しかし、彼女達は、何を毟っているのか。剥がしたタイルの下は、コンクリートの筈だ。

五人とも、首から上は、葉っぱだけだった。それを見ると、彼は、近付いて声を掛けようとしたくても、出来なくなった。彼女達の方が、少しずつ後退りしながら、立ち尽くすままの彼の方に、ジリジリと近付いて来た。彼女達は、毟り取ったものを、脇に抱え込んでいた。彼には、それが、黒っぽい塊に見えた。

女の数が、一人減っていた。どういう訳か、急に彼は、時計台が気になった。或いは、一人減った女達から、目を背けたかったからかも知れない。目は広場を彷徨うだけで、時計台を見付けられなかった。女達に目を戻すと、三人になっていた。三人が、ジリジリとしゃがんだまま、後ろ向きに近付いて来る。後少しで、女の匂いを嗅ぎ取れそうだった。また、何時の間にか、時計台の方に気を取られていて、また見直すと二人になっている。もう目を逸らすまいと、彼は、二つ肩を寄せ合う女の背中を、じっと見詰めた。そのせいか、二つの背中は、ゆっくりと溶け合って行くようだった。そうして背中が一つになると、女は、立ち上がり、直ぐに彼の方を振り向いて、毟り取った黒い塊を、彼に差し出した。彼は、受け取りたくなかったが、女の腰が砕けそうになったので、それを支えようと手を差し伸べると、そこに、その黒い塊を乗せられた。女は、

その場に倒れ込んだ。
　黒い塊は、ただ表面がギザギザしていると分かるだけで、どう見ても、ただ黒い塊であるよりなかったが、鼻を近付けて匂いを嗅ぐと、それは直ぐに、腐った葉っぱを一塊りに捏ね合わせたものだと知れた。しかし、それを鼻から離すと、途端に、何だか分からなくなって、その度に鼻を近付けて、それが腐った葉っぱの塊だったと、思い出さなければならなかった。
　倒れ込んだ女は、這いつくばりながら、自分の体のあちこちから、その肉をちぎり取っては、舗道に嵌め込んで行った。女の肉のタイルで、舗道は真新しく輝いた。女は、殆ど骨と内臓と葉っぱだけになって、舗道とビルの間の、コンクリートのドブ板を剥がし、そこから、ドブの中へと身を滑らせた。血の一滴も、跡を残さなかった。彼の目は、自ずと、ビルの方を向いた。
　街灯の光を浴びて銀色に輝く、真新しい本屋の入り口が見えた。ほんの二、三歩で、彼は、中に入った。
　中は、また、がらんどうで、例の小柄な女が、まるで待ち構えていたかのように、真っ直ぐに、彼を見据えた。スカートは穿いていなかった。剥き出しの短い両脚が、ぴっちりと揃えられていた。彼は、腐った葉っぱの塊を、床の真ん中に放り投げた。
「ここを、お茶畑にしましょうか」と、女は、二、三歩、彼の方に歩み出し

ながら、囁くような調子で、明るく言った。
「それもいいね」と、彼は、囁くような調子を真似て、話を合わせた。
　店番の男が、顔を背けたまま、紙縒のように痩せ細った黒い体を傾けて、外からシャッターを閉めた。中が真っ暗になった。腐った葉っぱの匂いが、ムンムン立ち込めて、蒸し暑くて堪らない。暫く経って目が慣れて、シャッターを通して、外からの光が漏れて来るのが見えて来た。女が何か呟いたようで、彼は、そちらを振り向いた。少し先に、微かに光るものが見えた。白いものが、ただそれだけ、空っぽの棚に、乗せられているようだった。近付いて手に取ると、どれも生暖かい骨だった。匂いを嗅ぐと、女の匂いがした。彼は、それを、歯で噛み砕いては、床にばらまいて行った。歯は、ひどく神経過敏になっていて、骨を噛んでも噛まなくても、ズキズキと痛んだ。全ての骨をばらまくと、四つん這いになって、拳で、それを更に細かく砕いた。床中の骨が粉々になって行くに連れ、床全体が、うっすらと白く光るようだった。その光は、壁を上って、天井までも微かに届いた。女の姿も、腐った葉っぱの塊も、その匂いも、なくなっていた。女の匂いだけはした。
　彼は、自分独りの気楽さから、俯せに、大の字になって、その場に倒れ込んだ。頬を、交互に、床に擦り付け、胴体も、両腕、両脚も、捻ったり回したりしながら、擦り付けた。耳の奥に、カサコソと葉っぱの音が聞こえる。手を頭

に持って行くと、首から上がなくなっている。一体、それが、何時からなのか。念のため、「水」に関する本を探すところから、順を追って、頭の具合を思い出そうとしてみても、何の手掛かりも掴めなかった

　シャッターから漏れて来る光が、真っ白だった。明らかに昼の光だ。その中に、二つ円い穴が並んでいて、その中に、一つずつ、ポツリポツリと店番の目が輝いていた。彼と目が合うと、店番の目は、素早く消えた。店番はずっと、中を覗き込んでいたのだ。彼は、重い体を何とか立ち上がらせ、足元をふらつかせながら、そちらに向かい、その穴から外を見た。舗道を、若い女が、嬉しそうに、得意げに、大股で歩いて行くのが見えた。その交互に振り出される、剥き出しの細く長い脚は、そこでは時間が動いているのを、彼に告げていた。また時間が止まるまでは、外には出られないのだと、覚悟を決めるべきだろうか。それとも、時間の外にいるなら、それが動いていても止まっていても、同じだろうか。いや、それは理屈に過ぎない。止まっている時間を、止まっていると分かってだけ、やっと、その時間の外に居られもするのだろう。（二〇〇一年八月九日）

*　　　*　　　*

（十字路↓血↓数字）

十字路

　高い鉄の柵で囲まれた、楕円形のだだっ広い敷地の中の、一番高い建物の最上階の、広い部屋の一番端で、私は、縦長の狭い窓から地上を見下ろしながら、前の夜、夢に見た、大きな白い鳥について、考えていた。

　鳥は、幼い子供達ばかりが何人も寝かされている部屋に降りて来て、その子供達を包み取るように、翼を大きく拡げた。近くで見ると、翼は、思いの外、煤がこびり付いたように汚れていた。鳥は、その翼を、曲芸師のように巧く操って、その狭い部屋の中で、体を前後左右に振った。子供達は、痩せた柔らかそうな裸の上体をノロノロと起こし、鳥の胸が自分の真上に来た時に、曲がった腕をいきなり跳ね上げるようにした。それで、鳥の羽根を毟り取りたいのだろうが、手が滑るばかりで、彼らの体は、みるみる冷たくなって行った。その部屋には、天井がなかった。夜の冷気が真面に降りて来て、その部屋から、止め処なく熱を奪っていた。白い鳥の胸の一ケ所から、血が滲み出した。子供達の手が、必ずそこに、触れるからだ。そこだけは、ドクドクと熱かった。それを感じた子供達は、鳥の血の付いた小さな指をしゃぶりながら、疲れたような虚ろな目付きで、鳥の顔を見上げ、またその場に横になって、全く動かなくな

った。鳥は、天井から夜の高い空へと飛び立ったが、まだ上を向いて、翼をぶんぶん振り立てている途中で、すっかり溶けて、どろりとした白い液体になつて、一渡りの風を伝って、危うく途切れそうになり掛けながらも、何とか一本の筋のまま、池の向こうに落ちて行った。池は、切り立つ崖の上にあった。部屋では、大人達が集まっていて、冷たくなった子供達を、どうやって、その池まで運び上げるかの、相談を始めた。私も、その中に居て、多分一番積極的に発言したが、まるで聞き入れられなかった。意見が出尽くすと、大人達は、私に対して、寄って集って何かをした。すると、もう、彼らには、子供達などどうでも良くなって、子供の知らない彼らだけの楽しみのために、そこを出て行った。遅れまいと足がふらついて、子供の体を踏み付けてしまう者さえ居たが、大人同士顔を見合って、控え目な薄笑いを浮かべるだけだった。それから、私はどうしたのだろう。大人達の後を付いてはいかなかった。では、責任を感じて、子供達を、無理にも全て背負って、池の下の崖をよじ登ったのだろうか。それも違う。池の向こうの、凍て付いた地面で、白い液体が、一塊りになって固まって行くのを、思い描いていたのかも知れない。そしてそれが、最良の選択だと思えていたのかも知れない。多分、子供達は、私に指一本触れさせなかった。ただ、それから暫くして、その部屋がもぬけの殻になったのは、確かだ。それまでの間に、何が起こったのか。子供達の背中に、翼でも生えたか。そし

て、私は、何処に行ったのか。池の水が、バケツを傾けたように、崖の上から、一気に、流れ落ちた。崖の下は、丈の高い草が鬱蒼と茂る草叢だった。私は、それを見上げながら、鳥もまた、その物凄い水の音に驚いて、池の端から、飛び立って行くように感じられた。しかし、なぜ、そう感じるのか。

考えても、何も出て来ないのだ。いや、私はもう、恐らく、二、三時間も前から、何も考えられなくなって、窓の真下で、十人ぐらい一列になって、役者志望の若者達が、発声練習しているのを、ぼんやり見下ろすだけだった。声は、微かには、耳に届いていただろうか。しかし、その姿が、消えていた。ただ、コンクリートの、剥がれ掛けた濡れた白い地面が見えるだけだ。振り返ると、広い部屋には、誰も居なくて、大きな机と椅子だけが、ズラリと並んでいた。ガラスの壁の向こうの廊下は、真っ暗だった。私は、ふらふらと立ち上がり、その廊下に出て、部屋の灯りのスイッチを切った。エレベータはもう止まっていて、その奥の、大掛かりな造りの階段を降りた。まるで、エレベータで降りるような、浮き上がるような感覚で、七階か、八階くらいの階段を、一気に降りた。外も、すっかり暗かった。そこから鉄の門まで、急ぎ足で進み、守衛がいないので、私は、鉄の門によじ登って、幅が一メートルもない、凸凹した狭い舗道に降りた。

暑くも寒くもない、風のない、静かな夜だった。上体は、まるで、その夜の

中に溶けてしまったようで、ただ二本の脚だけが、鳥の翼のように、音もなく悠々と風を切った。鉄の柵に沿った狭い舗道は直に途切れ、くねくねした、青いアスファルトの道を、大股で歩いていたのだが、道の表面に、空気の膜が張られていて、その上を、ただ滑っていればいいようだった。それで上体は、空気の抵抗さえ、易々と遣り過ごせるのだ。頭の中も、自ずと、その真空であるかのような夜の空間を、真っ直ぐ何処までも、受け入れて行く。私は、もう、回復不能な程に、果てしなく空っぽだったが、そのようになるのを、ずっと追い求めて来たのではなかったか。求めて得られなかったものが、遂に私に訪れたに違いない。その時、確かに、そう思えた筈だ。

　今にして振り返れば、物心付いた時から、その日の夜まで、歩くには、必ず体の痛みが伴った。足首や膝から腰まではもちろん、体中の神経が、重く軋むようで、歩き出した途端に、もうそうなっていて、後はただ、心身の消耗と向き合わされて、それをどのように耐えて、切り抜けて行くかだけで、頭は一杯になるのだった。そして、その夜やっと、そのような葛藤から解き放たれ、その夜の天候のように、全く穏やかな澄み渡った気持ちで、道を進んで行けた。私は、成長したのだ。虚弱な子供時代を通り過ぎて、いっぱしの大人になったのだ。そして、大人になったからには、当然の事のように、それがずっと続くのだと思った。しかしそれは、その夜限りで、次の日には、私の足はまた痛み

出し、腰に溜まって抜けない疲れに、体の衰えを感じない訳にはいかなかった。今に至るまで、二度と、あの穏やかに歩みは、甦らなかった。

さて、そうして進む内、鉄の柵で囲まれた敷地も後ろへと遠ざかり、相変わらず道は、緩やかながら、右に左にくねくねしていたが、その両側に、木造二階建ての同じような建物が隙間なく並び、狭い道を更に狭く見せた。一階はその何処も、黒く塗られた壁ばかりで、出入り口もよく見えなかったが、二階は、大抵、大きな窓が、開け放たれていた。その夜に限って、ガラス戸が全て取り外されていただろうか。それとなく顔を上げて、先ず目に飛び込んで来た窓では、雄ライオンのような髪型の、真っ黒な髪を振り立てた、白くて尖った高い鼻の女が、私の進むのと同じ方向に、横顔を晒していた。その奥では、イガグリ頭の、幅の広い怒り肩の、胸板の分厚い少年が、盛んに野球のバットの素振りをしていた。その目は爛々と輝いて、後半歩でも窓際に寄れば、バットは、女の横顔を直撃しそうではないか。

ほろ酔い加減の割りには、きちんと紺のスーツを着込んだ、二人の男が、肩を組んで頭をぶつけ合い、私と擦れ違いながら、その少年を見上げて、大声で激励の言葉を掛け、それで大いに満足したかのように、楽しげに通り過ぎて行った。鼻の高い女が、顔をこちらに向けた。道には、私しか居なかった。女は、無表情に目線だけ落として、その建物の一階の方を、そっと見下ろす素振りを

見せた。私は、それを、私に中に入って二階まで上がって来て欲しい、という合図のように受け取った。私は、ひらりと体を右に向け、黒い引き戸を、力を込めてやっと開けた。その勢いで中に入ると、直ぐに私は、また戸を開けて、道に出てしまっていた。あっと言う間で、何が起こったか、よく分からない。振り返って、そこの初めの戸の前に、また戻り、今度は注意深く、その戸を引き開けて、中に一歩、踏み込んだ。その、中に踏み入れる一歩が、その直ぐ横の道に面した戸の、中から外へと踏み出す、同じ一歩になってしまうのだった。三度目を試そうとは思わなかった。二度とも、直ぐに外に出されたのは、たまたまで、一つ間違えば、二つ並んだ戸の間に挟まって、一瞬の内に、磨り潰されていたかも知れない。

　その真向かいの建物も真っ黒で、その前の電信柱の陰で、若い女が着替えをしていた。白い下着を着けた、丸っこい狭い背中と、二本の細い腕と、その腕に絡み付いた布の切れ端のような青い服が、電信柱から私の方へと、はみ出していた。腕は、ごそごそと動くが、なかなか先に進めず、手こずっているようだ。その真上の二階の窓では、髭剃り跡の真っ青な角刈りの男が、蛙のような扁平な顔付きの大きな白茶けた猫を抱いて、女の方をじっと見下ろしていた。さっきの二人組の酔っぱらいが、何やらを落とした、財布を落とした、ついでにもっと大事なものの落とした、などと、陽気に大きな声を上げながら、戻っ

て来た。電柱の陰の女も、二階の窓の男も、何処かに消えていた。私はさっさと、何も見なかったような顔をして、また歩き出した。酔っぱらいには感謝すべきだろうか。なぜなら、もし彼ら抜きで、男女が消えたのを目の当たりにしていたら、私は電柱を登って、彼らの跡を、追っていたかも知れなかったからだ。

暫く進むと、十字路だった。その横切っている方の道は、右から左に緩やかな上りで、私の道の倍程も広く、真っ直ぐで、人の往き来も多く、皆早足で、殆どは右から左へと流れて行った。私は、もちろんまだ、空気の膜の上を滑るようなままで、その人と人の間を、苦もなく擦り抜けて、道を渡った。ちらっと左を覗くと、少し先で、人の流れが滞っているようで、ざわめきが聞こえて来そうだった。

その先の道は、更に狭く、くねくねしていた。黒い建物も同じように続いた。その左側の三軒目と四軒目の間に狭い隙間があって、その少しだけ奥まった所に、不動産屋が、小屋のような店を斜めに構えていて、ガラス戸一面に物件紹介の紙が貼ってあった。私の体は、ふらりとそちらに傾いた。それで、紙の字面が見えてくると、それらはどれも、家でも部屋でもなく、全て踏切の案内だった。踏切を売るのだろうか。紙と紙の間から、薄暗い奥が覗けた。くすんだ色の服を羽織った初老の男と女が、前屈みになって、向き合って低い椅子に掛

け、目を細めてタバコを吹かしながら、将棋を指していた。その足元で、汚れたよれよれの小さな服を着た二人の娘が、屈み込んで、身を寄せ合って、線香花火に目を輝かせていた。その体は、その脇の、水を張ったバケツと同じくらいの大きさに見えた。

　何時の間にか、私は、そこに立ち止まって、貼られた紙を眺め回していた。今居る町の名を見付けた。紙に描かれた小さな地図によれば、その踏切は、今通り過ぎたばかりの十字路を北に進んで、直ぐの所にある。

　私は、三軒戻って、十字路を右に折れた。緩い上りの直ぐ先にその踏切は見えていた。人は別に滞ってはいなかった。線路が二本あって、そこを渡った左の角も、二階建ての黒い木造の家だったが、先程までの、くねくねした道に面するものよりも、ゆったりとした大きな造りだった。二階の窓だけが、やはり大きく開いていた。私は、踏切から線路沿いに続く細い道に、五、六歩、踏み入って、窓を正面から見た。そこでは、丈の高いピンと伸びて少しも萎れていない青々とした草の束を持った、眼鏡を掛けた二人の中年過ぎの男が、窓際を、忙しく行ったり来たりしていた。その草をどうするかについて、盛んに議論を戦わせている声が、降り掛かって来た。下からは見えないが、その奥には、昼間、ここの踏切で、電車に撥ねられて重傷を負った双子の兄妹が、寝かされているのだった。二人の言葉の端々から、そう察する事が出来たのだった。いや、

二人は、ただ草の事しか話していなかったのではないか。では、どうして、分かったのだろう。元々私は、その兄妹の事を知っていたのだろうか。それとも、事故の話を、昼間、別の誰かから聞いていたのだろうか。

私の直ぐ前の窓の真下で、折れそうな程に首を真上に向けて、窓を見上げている男女が居た。事故に遭った子供の両親に違いなかった。じっと固まって、ものも言わなかった。

「まだ決まらないんですか？ 私が、見てきてあげましょう。」

そう言うと、私は、二人の脇をスッと擦り抜けて、雨樋をよじ登って、二階の屋根に上がった。私の体は全く身軽で、訳のない事だった。

そうして、窓を見ると、下からは見えなかった中年男の腰から下が見えた。二人とも、腰から下がなかった。草は、そのなくなった下半身の代わりをするためのものらしい。私は、てっきり、その草で、二人の子供のための担架が編まれるとばかり思っていた。（二〇〇一年八月十一日）

血

それなら、幾ら議論しても、答えが出ないのも無理はない。直に草は萎れて、

愈愈、何の使い途もなくなって行くようだ。草の束は、振り立てられる度に、カサコソと小さな音を立てた。それは、私の耳に、何とも心地よく響いて、二人には、そのまますずっと、言い合っていて欲しくなった。下からは見えなかったが、窓の奥には、部屋一杯に、丈の高い草が、深々と茂っていた。男達の腰から下がないのも、ただ草に隠れて見えないだけだろうか。しかし、そのカサコソ言う音を聞くまでは、腰から下のない男達の後ろに見えていたのは、畳の上に敷かれた布団に寝かされた、双子の兄妹の瀕死の姿ではなかったか。私は、漆喰の壁に囲まれた四角い草叢に向けて、呼び掛けた。すると、壁が崩れて消え、その先に、私の声の届く距離だけ、草叢が拡がって行くようだった。私は、何度も何度も、呼び掛けた。草叢はもう、私の声の届く筈のない、ずっと遠くまで続き、斜面を上って、その向こうの高い所には、暮れ掛けた金色の空までで見えた。その斜面を上り掛ける辺りの草叢の中に、双子の兄妹の小さな背中が、寄り添っているのが見えた。彼らは、空の光を見上げていた。草叢も金色に染まって行った。

それは直に、漆喰の壁の中に消えた。カサコソ言う音も消えていた。畳の上で、二人の中年男が四つん這いになり、その背中に、双子の兄妹が、一人ずつ、跨いで乗っていた。馬になった男二人は、嬉しそうに大仰に喚きながら、部屋の中を動き回った。双子の短い脚が、男のだぶついた横っ腹を忙しく蹴るのは

目に入ったが、男の下半身がどうなっているかは、見えないままだった。もし見えて来ても、目を逸らす積もりだった。畳の上に草の束を探した。それは見付からなかったし、それを探したせいで、お馬さんゴッコをする者達も、見失われた。

　部屋の中央に、楕円形の小さなテーブルがあって、そこに膝を乗せて、大人の体にまで成長した兄妹が、オデコをくっつけそうな程に、向き合っていた。畳の上なのに、二人とも土足で、畳の上は、泥の足跡だらけだった。よく見ると、そのテーブルは、二人の裸の中年男の腰から上が、首を窄め、肩を組み合って、出来ていた。一方、椅子は、男達の腰から下を切り取って、それを、巧く折り畳んだモノだった。そうしてやっと、男達の下半身を目の当たりに出来て、私に、この部屋から見て取れる最後のものまでを、見て取れたように思えた。いや、それにしても、それは、全く椅子そっくりではないか。それが、男の下半身に見えるのが、寧ろ不思議な位だ。それなら、椅子をそのように仕上げた者が、まだこの部屋の何処かに居るのだ。テーブルを見直すと、椅子と違って、それは、まるきり人の体に見えた。そしてそれは、男の体ではなく、二人の中年女が、白い腹を真上に突き出して、左右対称に、反り返っている姿だった。それには、ちゃんと、腰から下があった。彼女達が、男二人の下半身を、片方ずつ、見事な椅子に仕上げたに違いなかった。上を向いた女の二つの

腹は、波打つ事はあっても、互いにぴったりくっついて、決して離れなかった。まるでそこに鏡が置かれて、どちらかが、どちらかの鏡に映ったもののようではないか。すると、二人の兄妹も、どちらが男で、どちらが女か分からない程に、そっくりだった。或いはこれも、どちらかが、どちらかの鏡に映った姿かも知れない。そうであるにしても、やはり、男か女かは、まるで分からない。今度こそ、畳の上に、すっかり枯れ果てた草の束を見付けられそうに思えたが、もうどうでも良くなった。

私は、目を逸らした。二度と、この窓の中を覗きたくなかった。振り返って、地面の方を見下ろすと、人集りが出来ていた。双子の両親を探したが、見付からなかった。人集りは、男ばかりで、古臭い眼鏡を掛けた、白髪混じりの、薄くなり掛けたもじゃもじゃ頭の、目の鋭い太った初老の男と、小さな目の落ち窪んだ色白で犬ヅラの、背の高い若い男の二種類で、しかもどれを見ても、その一人ずつが、一組になっているようだった。そして、その一組ずつが、順々に、私に向かって、屋根から降りるように命令していた。初老の男が、小声で若い男に指示を出し、若い男が、胸を反り返らせて、私に向かって、早口で捲し立てた。

私は更に、そこから雨樋を伝って、二階の屋根に登った。そうしてしまえば、その命令からはもちろん、彼らの姿からさえ、逃れられるように思えた。そし

て、実際、屋根の天辺まで登って、ちらっと下を見下ろすと、そこにはもう、何も見えなかった。

そこから、太くて赤い艶々したロープが、踏切の向こう側の遮断機まで、張り渡されている。何時もは滑車が付いていて、それを掴んで身を投げ出せば、一気に下まで降りられるのだが、その日に限って、滑車が取り外されていた。あの眼鏡の初老の男の指図に違いない。仕方なく両手を組んで、ロープにぶら下がり、体を預けた。

加速度が付いて、下って行く途中、踏切の直ぐ先にある、駅のプラットフォームが見下ろせた。ちょうどそこに、運転席の窓が真ん丸で、虫の顔のように見える電車が、入って来た。それは、ゴーゴーと物凄い音を響かせているように見えた。その響きに駆り立てられるかのように、黒っぽい服を着込んだ者達が、次々にプラットフォームに湧いて出た。そこは、忽ち真っ黒になった。電車の中だけは、煌々と明るくて、吊革にぶら下がったまま、眠りこけている男の姿が見えた。男は、ギラギラと輝く青い袋を背負っていて、それに負けず大きな目を輝かせる女が、直ぐ後ろで、両手を腰にあてて、その袋を狙っていた。男が本当に眠っているかどうか、判断しかねているのか。袋の口をじっと見詰めるだけで、それに触れたりはしなかった。それとも、袋には、違法な危険物でも入っていて、女はそれを見張っているのだろうか。もし、その危険物が見

付かっても、男に背負わせておけば、女は、ただ知らん顔で、その場を立ち去ればいいのだ。それなら、それを背負っているのは、眠りこけている男ではなく、女が持ち込んだ、男の死体か、或いは、人形なのかも知れない。後は、空席ばかりのようだった。電車は、ブレーキの音を軋ませて、止まりそうで、なかなか止まらなかった。

ロープを括り付けた遮断機が、目の前に迫っていた。私は、手を放して、踏切の線路の上に、ポトリと降り立った。誰も居なくて、薄暗くて、静まり返っていた。両手を拡げてみると、案の定、掌は真っ赤だった。そこから血がポタポタと落ち始めたので、私は、それが服に付かないように、両手を体から前の方に離した。線香花火を上げていた不動産屋の二人の娘が、尻と胸を大きく脹らませた、すっかり成熟した女になっていて、跪いて、片方ずつ私のその手を取り、掌の傷から滲み出て止まらない血を、ペロペロと舐め始めた。黒いスカートの下から、肉付きのいい白い膝小僧が覗いて、それは地面の上で擦り合わされた。二人の指は冷たかったが、唇と舌は熱かった。私は、このままずっとその血が流れ続けて、時が止まればいいと思った。掌は、血を流すためにあり、その血は、女に舐められるためにあるのだ。この地上に、それを凌ぐ事など、ある筈がないではないか。

踏切の警報機が、カンカンとけたたましく鳴って、耳を劈くようでも、私は、

中空を見上げて、立ち尽くした。寧ろ、そこに踏ん張って、電車を受け止めようとしていたのかも知れない。それからゆっくり目を閉じて、耳を満たす警報機の音の中に、全ての感覚を沈み込ませようとした。少しだけ遠ざかって、掌の感覚だけが、二枚、その外に残った。それが不意に途絶えて、ひりひりと痛み出した瞬間、私は、胸を強く突かれた。目を開いて、尻餅を搗くと、直ぐ目の前を、回転する電車の車輪が、幾つも幾つも通り過ぎた。何時になったら終わるのか。ひどく長く感じられた。上体を支えるために腕を突っ張らせていて、掌は地面に着けたままだった。私は、体を後ろに倒し、両手を腹の上に乗せ、掌を指でまさぐった。車輪が線路の隙間にぶち当たる振動が、背中から全身に伝わった。掌の傷は、なくなっていた。体は寝かせても、首だけは起こしていて、私は、じっと動かない柔らかい掌と、物凄い速さで行き過ぎる鉄の構造物を、眺めていた。

　私は、立ち上がるべきだった。そうして、踏切に背を向けて歩き出すべきだった。電車が行き過ぎれば、不動産屋の娘達の姿は、恐らくもう見当たらなくて、私は、ただ掌だけを見詰めて、それをどうしていいか分からないまま、踏切を動けなくなってしまうだろう。

　車輪が突然、目の前から消え、静けさが、電車の音をみるみる遠ざけて行く。前を見ると、線路の向こうの遮断機の陰に隠れるように、そのくせ全身を私の

目に晒して、二人の娘は、肩を寄せ合い、頬を擦り寄せ合って、にっこりと歯を見せて笑いながら、私の方を見ていた。いや、顔は私と真正面に向き合っていても、その目は何を見ているか、分からない。或いは、私の掌の血を舐めていた時の、自分達の姿をだろうか。そうして、二人は、掌から血を流す次の男を待つようだった。

私は、立ち上がっていた。もう私は、用済みなのだ。そうして踏切に背を向け、決して振り返らずに、その先の道の左側を、真っ直ぐに進んだ。道の真ん中は、ノロノロと車が往き来していた。

電信柱の陰から、顔見知りの若い男が姿を現した。彼は確か、何時まで経っても試験に受からない医者の跡取り息子だった。上は、そこそこしっかりした身なりだったが、ズボンはよれよれで、靴は擦り切れていた。彼は私に、或る女が、人々の耳目を集めるような事をしでかしたのを、少しばかり興奮気味に、しかし囁くような口調で、短く話した。私は、微笑みながら話を合わせたが、その女の名を聞くのは初めてだった。彼は、直に失望したような顔付きをして、私の脇を擦り抜けて行った。私が立ち止まったままでいると、柱の陰から、同じ年頃の男達が、ゾロゾロと姿を見せて、彼の後に続いた。男達が行き過ぎて、やっと私は、その話題の女の顔形を、朧気に思い浮かべていられるような気になれた。しかし、聞いたばかりの名前は、もう忘れていた。その代わり、電柱

から出て来た男達の名前が、すらすらと浮かんで来た。全部で七人で、初めの男を加えると八人で、私を加えると九人だ。もう一人居る筈だった。知っている男の顔を総動員したが、誰も当て嵌まらなかった。

それなら、十人目は、私ではないか。九人目の私は、誰か別の私で、十人目の私こそが私なのだ。私は慌てて踵を返し、彼らの後を追った。辛うじて尻尾の九人目が、左に折れて行くのが見えた。私は足早にそこに向かった。そこは、白い壁に挟まれた狭い道で、知った道だった。昼間も全く陽が当たらないで、何時も、じめじめとひんやりしているのだ。男達の姿はなかったが、一本道で、その行く先は知れていた。そこを、雨も降っていないのに、お揃いの長い髪の二人組が、相合い傘の中に身を寄せ合って、ふらふらしながら、歩いて行く。私は直ぐに追い付いて、先を急ぐ私の行く手を、彼らが阻むような事になった。やっと脇を擦り抜け、追い越しざま、私は、二人の顔を覗き込むようにして、素早くカメラを構え、二人の写真を撮った。黙ってまた、前を向いて歩き出すと、後ろでクスクス笑う男女の声が聞こえた。私はそれを振り払うように、更に早足になった。道が分からなくなっていたが、キョロキョロすれば、ますます後ろのアベックに笑われそうで、私は、ただ真っ直ぐに、グングン進んだ。

何時の間にか、線路沿いの道に出ていた。そう言えば、本当は、さっきの電車に乗らなければならなかったのだ。しかし、歩いて帰る道も分かっている。

足は相変わらず、鳥の翼のように、音もなく悠々と風を切るままに、疲れ知らずだ。窮屈な電車の中より、夜の間、ずっと歩いている方が、どれ程、心地よいか分からない。道は、少しずつ線路から逸れた。もう、人も車も通らない道だった。（二〇〇一年八月十三日）

数字

廃屋や、空き地や、錆びたシャッターの降りた小さな倉庫なども、パラパラと目に付いた。その寝静まった住宅街の中を、広いとも狭いとも感じられない道が、大体真っ直ぐに続いていた。左右の家々は、闇にぼんやりと沈んで、色形は見分け難かったが、窓は、何処も、しっかりと閉じているようだった。

少し先の道の上に、白いものが見えた。翼を拡げた白い鳥が、尾をこちらに向けて、地上から、一、二メートルくらいの高さに浮かんで、先に向かっていた。私を先導するようだった。私は、数十秒先の自らの未来を、そこに見て取れているような積もりになって、それにじっと目を据えて進んだ。翼はピクリとも動かず、まるで、そこに敷かれた見えないレールの上を、滑って行くようではないか。

それが、不意に消えると、その上には、太いコンクリートの柱に支えられて、高架の高速道路が横切っていた。それは、緩やかな弧を描いて、巨大な翼にも見える。鳥は、高速道路に姿を変えたのか。なるほど、その下にも、私の数十秒先の未来はあるだろうが、そこを潜ってしまったら、その先、何処に未来を見出せばいいのか。私の足は、止まってはいなかっただろうが、その翼の巨大さに気圧されて、ひどくゆっくりにしか、進めなくなっていたに違いない。お揃いの長い髪のアベックが、少し前屈みになって、肩をゴリゴリ寄せ合って、私を追い越して行った。細くぴっちりと畳まれた長い傘が、二人の密着した腰の間から、尻尾のように、私に向けて振り立てられた。相変わらず、クスクス笑う声が聞こえた。しかし彼らは、こんな夜中に、何の目的で外をうろついているのか。すると、二人は、道に沿った直ぐ左脇の家のドアの前に張り付いて、そこで、ガチャガチャと鍵を鳴らしながら、鍵穴をまさぐり出した。なぜか私には、その鍵穴の形と鍵の形が、違っているのが見て取れた。しかし、私は、それを彼らに教えなかった。それで、笑われた事への、ささやかな意趣返しを果たせたような気になれた。再び私が、彼らを追い越すと、直ぐ後ろで、鍵穴にぴったり鍵が差し込まれる音が聞こえた。振り返ると、その家の周りは、背の高い竹でびっしり囲まれていて、アベックの姿はなかった。

　その家の斜向かいは、正方形の小さな用水池で、そこから、少しも泡立った

りしない透き通ったままの水が、ドクドクと物凄い勢いで、道の方に溢れていた。割れた池の底から、水が湧き出しているに違いない。このままでは、住宅街全体が、水浸しになるだろう。しかし、住民を起こして回っていては手遅れで、ここは私が、池の中に飛び込むしかないのだ。そうすれば、きっと、水は止まるのではないか。なぜか、そう思えてしまって、私は、金網の破れ目を見付け、そこを潜って、水に飛び込もうとした。顔が水に浸かると、水の中は明るかった。そうして見渡せたのは、どうやら池ではなくて、池と道の間に掘られた溝のようだった。溝は、広くて、底が見えない程に深かった。池の水が幾ら溢れても、全てそれを呑み込むだけの容量を、備えているようだった。その溝の奥の少し先に、翼を拡げる白い鳥の背中が見下ろせた。それはまた、見えないレールに沿って、先に進むようだった。私は、水面に顔を着けたまま、その姿を追って、先に進んだ。鳥の姿は、溝のずっと深くにあって、そんな所に私の数十秒先の未来がある訳ではないが、そのゆるゆると先に進む姿は、私の数十秒先の未来を、常に保証するようではあった。池の底の割れ目を、一目でも見ておくべきだったが、引き返せる筈もなかった。

　溝は、少しずつ狭く浅くなって行って、鳥も明らかに、小さくなっていて、それは鳥ではなくて、鳥の模型であるのが、分かって来た。私は、顔を上げた。直ぐ先は、斜交いに交わる十字路だった。

そこを渡った先の、尖った角はタバコ屋で、長い髪を左右に分けて束ねた、小柄な若い娘が、何時ものように、不自然な程にずっと笑顔のままで、座っていた。直ぐ奥で、お婆さんが、蹲ってラジオを聞いている。前を通り過ぎようとすると、彼女は、私の方を見て、ウフフフと、笑い掛けるのだった。私は立ち止まって、散々迷って、そこに並べられたタバコの箱の中に、見た事も聞いた事もないような銘柄を見付け、やっとそれを口にした。彼女は、小さな肩を捻って腕をいっぱいに伸ばし、ケースの奥をまさぐった。そうしてやっと取り出したのは、その珍しいタバコの箱ではなく、鏡張りのタバコ入れだったが、それをそのまま、私に渡した。深夜で、暗い事もあり、彼女は、少しもそれに気付いていないようだった。その頃はもう、私はタバコをやめていて、タバコより、そのキラキラ輝くタバコ入れの方が良かったので、知らん顔でそれを受け取った。それは、見掛けよりずっと軽くて、何か別の使い途があるかも知れない。ポケットから、お金を出そうとしたが、その夜の私は、小銭さえ持っていなかったのか。代わりに、さっきアベックを写した小さなカメラが出て来て、それを彼女に渡した。カメラは、そのレンズまでも傷だらけで、ボディを軽く押すだけで、蓋の蝶番がギイギイ鳴った。それを見て、また彼女は、ウフフフと笑い声を上げたので、直ぐに私は、そこを立ち去った。

道の先の東の空が、白み掛けていた。それを見て、私は、ついでに、スーパ

ーで食料品を仕込んでおこうと思った。スーパーは、道から少し奥まった所にあって、道との間のコンクリートの狭い空き地は、自転車だらけだった。私は、蛇のように地べたを這い、車輪の間を擦り抜けて行った。私が腰を捻る度に、水が出て、地面はびしょ濡れになった。入り口に辿り着いて、身を起こすと、体の表面が硬くカサカサに乾いていて、それを脱ぎ捨てられないのを、呪わなければならなかった。そのまま、中に入ると、レジが三つ並んでいて、三人の女が立っていた。奥が白人の女で、真ん中が黒人の女で、手前が猿だった。猿もちゃんと、女の制服を着せられていた。体型は、人間の女と同じだった。白人は、深い切り傷のようなＶ字の皺を眉間に寄せ、目を釣り上げて、物凄く恐い顔をしていた。体調不良か、過剰なストレスでも溜め込んだかで、倒れるのをやっと堪えている風だった。猿の女は、耳の奥で鳴り響く、ビートの利いた音楽を止める事が出来ずに、ひたすら体を揺すっていなければならないようだった。黒人の女だけが、穏やかな表情で、人懐っこい目をして、ごく当たり前に立っていた。私は、必ず、真ん中のレジで精算しようと思った。

しかし、どうしてもそれを憶えられないのだった。（奥が白人で、真ん中が黒人で、手前が猿。精算は真ん中の黒人のレジでする。）それだけの事なのに、何度、そう繰り返しても、それが全く頭に入らない。そうしてただ、リンゴを積み上げた前で、立ち尽くしていると、紺のスーツを着た長身の男が、近付い

て来た。胸に名札を付けていて、スーパーの従業員だった。
「どうか、なさいましたか。」と、彼は、まるで体で話し掛けるように、体を揺すりながら、笑顔で聞いて来た。
私は、自分の窮状をどう説明すればいいか、分からなかった。しかし、黙っている訳にもいかず、
「人参は、何処にありますか？」と、聞いた。
「人参ですね。どうぞ、こちらです。」と、彼は、身を翻して、飛ぶように、人参売り場の前に立ち、私に笑顔を向けた。ほんの、五、六歩の所だった。私は、彼の見ている前で、人参を七袋、篭に入れて、レジに向かった。私は、予め決めておいた、三つの内のどれかのレジに行かなければならない。それが、どのレジか分からないまま、レジに、人参を持って行かなければならない。真ん中のレジに篭を置いた。レジ打ちは黒人だったが、それでいいのか悪いのか、分からなかった。そうして愈愈、お金を払う段になって、お金を持っていない事を思い出した。私は、光明を見出した気分になって、お金を持っていない事を詫びて、また篭を持って、人参売り場に走り、そこに人参を戻して、外に出た。スーツの男は、微笑みながら、見て見ぬ振りをする風に、黙ってキャベツを眺めていた。
空は、白み掛けてなどいなかった。スーパーの前の、狭い空き地のコンクリ

ートは、カラカラに乾いて粉を吹き、自転車は、飲み物の自販機の前に、二台ある切りだった。辺りは真っ暗で、どちらが東か西かも、まるで見当がつかず、私は、道に迷った。右にも左にも、道に人の姿はなかった。せめて、タバコ屋まで戻れれば、あの娘に道を聞けるのだ。タバコ屋までなら、何となく道が分かる気がした。しかし、タバコより明らかに値の張りそうなタバコ入れを、向こうが間違えたとは言え、そのまま受け取ってしまった手前、足はどうしてもそちらに向かなかった。笑顔の彼女は、笑顔が続く限り、ずっと私を待ち続けるのだろうか。それとももう、私の事など忘れてしまっただろうか。私は、タバコ入れを取り出して、その縁を指で撫でながら、そこに映る自分の顔を見詰めた。

　しかし、そこに映るのは、私の顔ではなく、紺のスーツを着込んでいた、スーパーの従業員の顔だった。外に出て来たのは、私ではなくて、彼だったのか。どうしていいか分からず、スーパーの前の空き地を、意味もなく歩き回ると、コンコンと、自らの靴音が響いているのに、気付いた。それが、隣近所に響き渡って行くのに気が引けて、靴を脱いだ。それでも足は、ペタペタと音を立てたが、隣近所に聞こえる程ではない。グルグル歩き回る内に、私は、いや、彼は、今度は、自らのハーハーと大きく息を吐く音を、聞き取った。それはとても耳障りで、苦になった。しかも、彼が或る方向を向いた時だけ、その音は、

彼の耳に大きく響くようだった。彼はあえて、その方向に向かって、踏み出した。

　アスファルトの道は、思いの外、冷たかった。それは、足をみるみる冷やし、それに立ち向かうように、彼は、愈愈早足で、息の響く方へと、グングン進んだ。息もどんどん速くなった。そして、その息の音が、ずっと先まで、届いているのが分かった。そして、その響きの先端との距離を、耳は正確に聞き取れていた。しかし、彼の足よりその響きの方がずっと速くて、その先端は、今にも捉えられなくなりそうだった。走り出したが、追い付かない事は直ぐに分かった。彼は、靴を脇に抱え、タバコ入れを、そちらに向かって投げた。その夜の彼もまた、私と同じように、充実しきっていて、思い通りに体を動かす事が出来たのだ。タバコ入れは、ぴったり彼の息の響きの先端まで飛んで行って、それをそこで、綺麗にはね返らせた。もう走る必要はなかったが、それでも早足で、そちらに急いだ。足音は聞こえなくなっていたが、かと言って、滑るように進むのでもなく、彼は泥濘に足を取られて、そこで足踏みするようだった。

　息の音が次第に収まって、少し先に、斜めになったタバコ入れが、パックリ口を開けて、地面すれすれに浮かんでいるように見えて来た。それとも、何かに凭れ掛かっているだけなのか。その開いた内側も鏡張りで、その上にあるものを映していた。その上は、そこだけ、白い光を遠くから受けているようで、

ぼんやりと明るかった。彼は、足を止めて、その光を受けているものの姿に、目を凝らした。

小さな白い机に、若い女が肘を突いて、猫背になって、小さな紙に細かく数字を書き込んでいるようだった。彼はまた、歩き出した。泥濘でも、少しずつ前に進めるのだ。女は、慌てて立ち上がり、机と椅子を素早く折り畳んだ。机と椅子は、一つの小さな白い箱に収まって、全く机と椅子には見えなくなった。それから、足元のタバコ入れを拾い上げ、それをパタンと閉じて、こちらに背を向けて、軽々とした足取りで、そこを離れ、白い光の中へ消えて行くようだった。仕方なしに、彼はまた立ち止まって、その失われ掛けた形を、じっくりと目でなぞった。するとそれはまた、机に覆い被さるようにして、紙に数字を書き込む女の姿だった。足元には、開いたタバコ入れが、斜めを向いたまま落ちていた。彼が歩き出そうとするだけで、女は、軽く腰を傾けて、肩を素早く左にずらした。それは、立ち上がろうとする時の、始めの動きだった。彼女は、彼の動きを察知していて、彼が近付こうとすれば、直ぐにも立ち上がれるのを、彼に見せ付けたいのだ。彼が歩き出せば、女はまた、慌てて立ち上がって、同じ事をするだろう。彼はそれ以上近付けなかった。

私には、それがどうしてなのか、分かる。彼女はまだ、生まれていなかったからだ。彼女が生まれて十九年後に、私は彼女と出会う。その夜から、二十五

年後の事だ。ただ、彼女は、そこに至る長い時が、全くムダだった事を私に知らせるためにだけ、私の前に現れる。もちろん、二十五年が長過ぎたからだろう。或いはもう少し正確には、私が、そのような長い時を、ぼんやり待ってしまうような人間だったからか。(二〇〇一年八月十五日)

＊　＊　＊

石

七竈が白い花を咲かせていて、若い女達が、そこを通る度に、花を一つ摘んでは、口に含んで行った。狭い道は、若い女ばかりが、白い素足に履いた木のサンダルを、カラカラ言わせて、往き来していたが、花は、それに負けず、次から次に咲いて出るようだった。女達は皆、籠をぶら下げたり、袋を抱えたりして、夕食のための買い物に、出て来たのだ。七竈の横に、黒く塗られた小さりな木の家がある。そこの窓のカーテンは、熊の絵柄で色褪せて白っぽかったが、何時も閉まっていて、そこを通ると、大抵、中から、ピアノの音が聞こえて来る。バイエルを弾いているのだが、なかなか先に進まないので、通学の行き帰りにそこを通る音大生のカップルなどは、「先が思い遣られる」などと言って

は、クスクス笑うのだった。なぜか、何時も必ず、先に男が笑い、後から女が笑った。

しかし、ピアノの音にしてみれば、それを弾く者の行く末や、誰に笑われるかなど、どうでもいい。巧かろうが、下手糞だろうが、家から外に出たその音が、女達の雑踏に掻き消されてしまう事が、問題なのだ。実際、それはもう、誰の耳にも届いていない。耳のいい音大生が帰って来るのは、もっと遅くなってからだし、その頃にはもう、女達は居なくなっていて、音は、夜の闇の中に、過不足なく、自らを浮かび上がらせる事が出来る。やっとそこに避難出来たかのように、音は、七竈の根元に、微かに残るだけだ。しかし、そのままでいても、仕方がない。何か他のものに姿を変えて、それを見て取れる者にだけでも、自らの在処を知らせなければならない。

それは、白くヌルヌルしたものになって、そこを滑り出た。もちろん、そこでは、女の足が忙しく動き回っていて、その白いものは、その間を、擦り抜けて行かなければならない。そうしてそれは、狭い道を、先へ進んで行くしかなかった。緩やかな上りで、進む勢いを付けるために、それは蛇のように細長くなって、身をくねらせた。

その狭い道の右側の地面が、急に白く大きく脹らんで、その奥の方に、白い穴が開いている。そこから、白い米粒のようなものがジリジリと湧き上がって、

道の方に流れ出て来る。身をくねらせる白いものは、それに埋もれるのを避けるために、左右二つに分かれようとした。しかし、ピアノの音は、ピアノの音であるしかない。二つに分かれれば、別のものの音になってしまう。と言って、一つのままで留まる訳にも行かないので、それは、そのまま、二つになった。二つに分かれた所を、一つのままに、白くて丸い玉になって、行ったり来たりするのだ。

それは、独りでにラリーを続けるテニスボールのようなもので、その玉が、地面に打ち付けられる度に、そこの米粒のようなものが、跳ね飛ばされて、道沿いの古びた塀に、パチパチと軽い音を立てて当たった。塀には、画面いっぱいの耳のない男の顔のポスターが貼ってあって、その口元に、米粒のようなものが当たると、その男の口から見えている歯が、ポロポロと、その下のドブに落ちて行った。若い女達が、そこに群がり、篭や袋を脇に抱えて、四つん這いになって、素手で、そのドブの泥を、掻き回したり、掬い出したりするのだった。

そうして湧いて出たメタンガスは、行ったり来たりする白い玉にばかり吸い取られ、玉の表面は、見るからに湿っぽくなって行った。元々音であれば、ガスに対して無防備なのだ。直に、その玉の表面に、半透明の緑色の小石のようなものが、浮いて出た。もちろん、玉に含まれたガスの仕業だろう。

それは目だった。その目を通して見ると、米粒のようなものの一つ一つが、何かしら食料品を携えた、若い女の姿だった。それらが、白い穴から、止め処なく湧き起こって来る。そしてそれらは、その穴の、更に奥の方に向かっても、溢れ出ていた。穴の向こうは、ビラビラした苔に囲まれた、緑色の池で、そちらへと溢れて行った女達は、その池に落ちて、溺れる素振りさえ殆ど見せず、そのまま沈んで、浮かんで来なかった。

じっと、彼女はそれを見ていた。それ以上、何も起こりそうになかった。それでやっと安心して、彼女はそこに姿を現した。始めの一歩を踏み出した姿勢のまま、笑みを浮かべ、暫く、周りの様子をそれとなく窺う風だったが、何事もなかったかのように、道を先に進んだ。女達の群れは、直ぐに、後ろに遠ざかった。しかし、道も、後少しのようだった。

ポスターやら値札やらで色とりどりの、二軒の薬局が、道を挟んで、向き合っていて、狭い道は、そこで終わりだった。その先は、真っ直ぐな広い道が横切っていて、それを斜めに渡った先に、また同じような、狭い道が続くのが見えた。彼女は、左の薬局に入った。

中は、蛍光灯の光に明るく照らされていたが、店の一番奥のカウンターの辺りだけ、その蛍光灯が外されていて、暗かった。日焼けした顔の、びっくりしたような真ん丸な目をギョロギョロさせた、白衣の男が、その奥のカウンター

に、背筋をピンと伸ばして腰掛けていて、男と彼女の目が合うと、棚の全ての商品が、一斉に床に落ちて、足の踏み場もなくなった。しかし、それにしては、大して音はしなかった。商品の箱の中身は全て空っぽで、彼女の開けたドアから入って来た風に、それらは、吹き飛ばされたのではないか。そんな錯覚さえ抱かせる。彼女は、両腕を翼のように拡げて、その商品の山の一番高い所に向かって、身を投げた。そして、そこが水の上でもあるかのように、手足を振り回し、腰をくねらせた。そこでくるりと仰向けになり、首を反らせて、世界を逆さまに眺めると、広い方の道に面したガラスの壁を通して、向かい側の狭い道の脇に、人の頭くらいの丸っこい石が置かれてあるのが見えた。その辺りだけ、黄色っぽい陽の光を受けていた。彼女は、それから目を離さないまま、腕をいっぱいに伸ばして、そちらを指差して言った。

「あそこへは、どうやって行ったらいいんですか？」

「え、何でしょうか？」

「あっちに行きたいんですけど。」

「ええと、道の渡り方をお尋ねなんですか？」

男は、目を伏せて、視線をさまよわせた。腰を浮かせ掛けたまま横に進み、カウンターの脇の小部屋に頭を突っ込んで、そこから、黒い表紙の大きな分厚い本を、歯を食いしばって取り出し、重さで持ち切れないかのように、直ぐに、

商品の散らばる床の上に、投げ出した。バタンと凄い音がして、空の棚を震わせる程だった。それから、足音を立てずに、素早くカウンターを回り込み、腰を屈めてその本を拡げ、四つん這いになって、頁を繰り出した。

「えー、ちょっと待って下さいね。」

そうして男は、少し芝居掛かって、指で文字を辿ったが、彼女はもう、立ち上がっていて、男の後ろで待ち構えていた。彼女が、眉を八の字にして、笑いながら、男の尻を蹴飛ばすと、男の体は前に突っ込んで、水のように、その開いた頁の中に吸い込まれた。その吸い込まれて行く時の、綺麗な流線型に変化して行く男の姿を、彼女は気に入ったようだった。それで今度は、床の商品を、胸一杯に抱え込んで、それを開いた本に向かって投げ込んだ。期待通りそれらは、一個一個水のようになって、それらが、真ん中に集まって、流線型を作りながら、紙面に吸い取られて行った。彼女は、独りで、さも面白そうに声を出して笑いながら、それを繰り返した。薬局の中は、空っぽになった。

白衣を着た女が、白い壁の中の白いドアから、入って来た。言葉を交わすどころか、目を合わせる間もなく、二人の女は、床に倒れ込んで取っ組み合いを始めた。棚が、ガラガラと薙ぎ倒された。彼女は、その薬剤師の交代要員らしき女の白衣を、ビリビリに引き裂いた。一方、彼女は、細身の体にぴったりフィットさせたツルツルの素材の服を着ていて、その女がそれを掴み取ろうとし

ても、手が滑るだけで、優劣は、始めから明らかだった。裸にされた女が、堪らずに、広い道へと転げ出ると、その体は、みるみる萎びて、老人になった。

それを彼女は、細い目を力を込めて見開いて、眺めていた。本の中から、紙の上にギョロ目だけ浮き上がらせていた男が、今がチャンスとばかりに、身を起こした。そうして本から抜け出た男も、素っ裸だった。彼女の直ぐ脇に立って、自らの体のあちこちを、素早く掌で擦ると、その体臭が、彼女の鼻を突いた。それから彼は、床に散らばった白衣の残骸を、さも手慣れた手付きで拾い集め、唾を吐き掛けては、それを捏ねて、ネバネバにして、それを体中に塗りたくって行った。

彼女は、目を逸らす振りをして、それをじっと見ていたが、急に、眉間に皺を寄せ、口を結んで尖らせ、死んだような冷たい目を、何処か高い方に向けた。そして、その表情を男に見せ付けるようにして、男の直ぐ脇を通って、外に出た。その間、男は、手の動きも止まり、ただ黙って、じっとしているだけだった。彼女を目で追う事さえ出来ず、ただ体のネバネバが乾くのを、待つしかないようだった。

彼女は、狭い道を渡って、隣の薬局に入った。彼女の情報が、先に伝えられていたに違いなかった。中の商品は、棚ごと撤去された後だった。痩せた中年の男が、青いシャツを着て、丸椅子に掛けて、新聞を読んでいた。その第一面

の上の縁に印刷された昨日の日付だけが、くっきりと彼女の目に映った。先の割れた木のサンダルを履いた足を組んで、その上の足をブラブラさせて、サンダルと足とで、プカプカと音を立てていた。男は、目を上げて、奥に引っ込んだ小さな目で彼女を見て、言った。
「新聞だけが、楽しみなのに。もう今日の新聞はありません。と言う事は、明日も明後日も、ずっと。」
いや、昨日だと思っていた日付は、今日ではないのか。彼女は、新聞を上から鷲掴みにして、男から乱暴に奪い取った。
「今日の新聞じゃない、これ…。騙されるとこだった。」
しかし、彼女の手にした新聞には、活字が全く印刷されていなかった。それとも、それを手にする彼女にだけ、それは真っ白に見えるのか。
「ほらね、返して下さい。これは、私の新聞です、私の。」
男は、そっと彼女の手からそれを取り返した。男が、彼女の目を見ると、何処も見ていないような目だった。皺を伸ばすと、また活字が現れるようだった。そうしてまた男が、紙面に目を落とすと、
「私の事、載ってる？」と、彼女は、明るく抜けるような、高い声で、言った。
男は、疑り深そうな目付きになって、暫く、知らん顔をしていたが、急に、

新聞の顔写真と、彼女の顔を、大仰に見比べて、
「これは、あなたじゃないのかな。」と、抑えた平板な調子で言った。
彼女が、男の方に回り込んで、男の指差す所を見ると、指を窄めれば、ちょうど彼女の小さな手が入るくらいの穴が、紙の上に空いていた。中は真っ赤で、彼女は早速、手を突っ込みたくなった。
ガラスの自動ドアが開いて、四人掛かりで洗濯機を持ち上げた男達が、入って来た。洗濯機は一番端に置かれた。後から後から、同じ洗濯機が運び込まれて来る。彼女は、次々に入れ替わる男の顔を見比べて行った。その内の一人が、やっと彼女に気付いて、近付いて来て、彼女の顔と、新聞紙の上の真っ赤な穴を見比べた。彼女が、じっと男の顔を見て微笑み掛けると、男は、少しだけ苦しげな表情になって、真っ赤な穴しか見る事が出来なくなった。男の体は、その穴に吸い取られて消えた。
彼女は、晴れ晴れとした顔付きになって、穴に手を突っ込んで、指に絡み付いて来るものを、引っ張り出した。その赤茶けた皺皺の皮膚の表面は、明らかに胎児のものだった。それは、ズルズルと伸びて、全部引っ張り出してみると、彼女の背丈と同じ程にもなった。それなりに、頭も手も足もあり、人の体のようではあるが、骨や内臓や筋肉まで抜き取られてしまっているかのようで、彼女が手を放せば、忽ち床にくずおれて、クシャクシャに丸まってしまいそうだ

った。彼女は、その凹んで傾いた頭らしき辺りに向けて、何度も何度も、唾を吐き付けた。そうしている内に、段々とそこは、大人の顔として、見分けられるものになって行った。

「それは、誰なんですか？　あなたにしか分からないと思うが。」と、新聞の下の端の広告欄に目を落としていた男が、顔を上げて行った。

彼女には見覚えがあった。それは、彼女の母親の二十歳の頃の顔に違いなかった。

「知らなーい」と、彼女は同じ明るい声で答えて、それを床に抛った。それはクシャクシャに萎れて行ったが、その顔に掛けられた彼女の唾が、トロリトロリと、その萎れた方へ流れ出して、そこを肌色に変えて行った。

彼女は、その股の間を見たくなった。さすがに男の目には晒したくなかったので、彼女は、それと男の間に身を置いて、男に背を向けてしゃがみ込み、その脚らしきものを拡げてみた。彼女の頭程の穴が、突き上がるように口を開けた。その奥まで覗こうと、首を窄め、前屈みになると、そのまま体は前に傾いて、彼女は、頭からその穴の中に吸い込まれて行った。

男は、直ぐ後ろで、馬鹿丸出しの薄笑いを浮かべて、新聞越しに、それを見ていた。穴は、彼女の纏っている服は受け付けなかったので、それが穴に詰まって、暫くは手こずったが、最後は、その硬く丸め込まれた服を吐き出して、

彼女を丸ごと呑み込んだ。

「フン、これでも、知らないって言うのか。」と、男は、なじるように言って、

「知らない訳、ないだろ」と言いながら、新聞を閉じて、立ち上がった。

女の体が丸ごと一つ、中に入っている筈なのに、それは萎れた姿のままだった。まるでその穴だけが、彼女を呑み込んだかのようだ。その穴も、みるみる萎んで、皺と区別が付かなくなっていた。男は、タバコに火を着け、それを銜えながら、その萎れた一塊りを新聞紙にくるんだ。男達に頼めば、ついでに持って行ってくれるだろうか。しかし、洗濯機は、奥の側の壁沿いに一列に綺麗に並べられ、男達の姿は、もうなかった。それで、仕方なく、自動ドアの前まで行って、それが開いたところで、その新聞紙にくるんだものを、道に放り投げた。

冷たい乾いた風が吹いて、新聞紙は、直に、拡がって、破れて、飛んで行った。緑色の一つ目の、細長くて白いものが、蛇のように身をくねらせて、近付いて来て、その萎れたものを、端から順に囓って行った。すっかり陽が暮れるまで掛かったが、その全てを腹の中に収めると、その白いものは、少しくびれた楕円形にぷっくり脹れて、動かなくなった。その中に彼女が居て、彼女は、道の向こう側の、人の頭くらいの丸っこい石の事を考えていて、そのせいか、

その白いものも、石のようになった。

男が出て来て、それを金槌で打った。何しろ、女の体の丸ごと一人分なので、硬い石になったそれを、叩き割って行くのも、一通りの事ではなかった。物珍しげな顔の通行人には、

「いやぁ、目障りなもんで…」と言って、尚も、粉々になるまで叩き続けた。

白い粉は、一夜明ければ、大方、ドブの中に蹴散らされていた。（二〇〇一年八月十七日）

*　　*　　*

髪

まだ風の冷たい春の初めの頃、彼女は、道が二つに分かれて行く角の、その角に沿ったＶ字のブロック塀の下に、白いものを見た。それは、何かを白い布でくるんだもののようだった。左へ行く道は、陽を受けて明るく、右は、日陰で暗かった。その白いものに、ずっと手前の遠くから、彼女は気付いていた。しかし、そこでどちらの道を選ぶかが、ただ一つの問題で、その白いものは、どうでも良かった。彼女は、ブロック塀の尖った真ん中をじっと見据えて、ど

んどん早足になって、進んだ。
　どちらの道を行く積もりだったか思い出すまで、塀の手前で立ち止まるべきだろうが、足が言う事を聞かない。そのままの勢いで、彼女の体は、尖った角にぶつかった。体はそこで、二つに裂けて、右半身は右に、左半身は左に、進んだ。それを彼女は、塀の手前で眺めていた。
　白い布が、白い花のように開いていって、中に、真っ黒く光る水が見えた。それを、男が、覗き込みながら、そこで焚き火をしていた。古びて黴臭い匂いのする革の切れ端が、燃やされていた。
　そこは通学路らしく、小学生達は、その焚き火の上を飛び越えて行かなければならなかった。それを避けて、道の隅から真ん中の方に踏み出せば、そこを、数珠繋ぎになって、途切れる事なく走り過ぎるオートバイに、撥ね飛ばされるだろう。男の子は、ノロノロと焚き火を跨いで、股ぐらを焼いた。しかし、直ぐに互いにそれに気付いて、オシッコを掛け合って、それを消した。女の子は、素早く、一っ飛びに焚き火を跨いだ。股ぐらは焼かなかったが、その勢いで起きた風で、火は大きくなって、彼女達のランドセルに燃え移った。しかも、彼女達は、暫くそのまま気付かずに走って、気付いた時にはもう手遅れで、背中全体が燃え上がり、直に火は全身を包んだ。
　彼女は、男に、道を尋ねた。男は、彼女がずっと早足で歩いて来た道を、指

差した。振り返ると、等間隔に、プラスチックの緑の容器が、置かれてある。それを見て、彼女は、もう一度始めから、道を歩き直さなければならないと思った。

オートバイに乗ってしまうのが、手っ取り早い。後ろにもう一人しがみついているのは、やり過ごして、独りで乗っているのを選んで、その後ろの席に飛び乗ろうとした。自分では、巧くタイミングを測って飛び乗れたと思うのだが、そのままオートバイは、行き過ぎるばかりだった。

足元に、毛むくじゃらの小さな子供が蹲っていた。いや、それは、そのようなものを描いた絵だった。或いは、オカルト映画のポスターが、破れて、そこまで飛んで来たのかも知れない。それが、適当にクシャクシャになって、その絵を立体的に見せていた。男が盛んに、それへと目配せしている。彼女は、それを拾い上げた。その小さな化け物は、白いマントを纏っていた。

「ほら、見た通りさ。」と、男は、顔を焚き火の方に背けながら、言った。

その化け物は、何か金色に波打つものを掴まえていて、耳を尖らせて、満面の笑みを浮かべていた。その口の中に見えている歯は、どれも丸っこくて、小さな金色の鈴を並べたようだった。彼女は、すっかり分かったような気になれて、男への返答の積もりで、その紙を、焚き火に投げ入れた。

早速彼女は、オートバイの後ろの席に乗っている、ヘルメットの下から長い

髪を靡かせた女に、狙いを付けた。その髪を両手で掴み取り、そのまま、両脚を跳ね上げた。彼女は、宙に浮いたまま、今来た道を戻って行った。しかも、彼女の体は、女の量の豊富な髪の中に埋もれて、外からは、見えないかに思えるのだった。笑いが、こみ上げて来た。その声は、鈴の音のように、彼女には聞こえ、それがまた、彼女を笑わせた。

女の長い髪は、真っ直ぐ後ろに靡いているのではなかった。それは、その女の首を一回りしてから、後ろに靡いていたのだ。彼女がそれに気付いたのは、その女の頭が後ろに反り返って、その目を剥いた紫色の顔を見たからだった。彼女は、その女を、オートバイから投げ捨てた。女の体は、冷たくなっていた。そうして、自分が後ろの席に収まろうとすると、先程、飛び乗ろうとした時のように、そのまま、オートバイは、走り過ぎた。

そこはまだ、道の途中だった。始めから歩き直すには、まだまだ、そこを遡らなければならない。オートバイの列の尻尾が遠ざかって行く。ただ、それを眺めて、どうも、その道に、見覚えがないように思えるのだった。彼女は、鳥の鳴き声に気付いた。見上げると、大きな樹が、枝を広げ、鬱蒼と濃い緑の葉を茂らせていて、空をすっかり隠している。鳴き声は、そこから無数に降って来て、すっかり彼女を包んでしまうので、うっかりそれを聞き逃して、何も聞こえていないようにも、感じられてしまうようだ。彼女は耳を塞ぎ、アとオの

中間のような低い声を引き延ばして、耳の中から、鳥の鳴き声を取り除いた。道が、見慣れたものに見えて来た。顔見知りの女ばかりが、そこを往き来し始めた。その一人に近寄ると、その人は、彼女を手で追い払うような素振りを見せた。その顔に見覚えがあるのは、さっき焚き火の火で燃えてしまった、小学生の女の子の顔だからだと、気付いた。もちろん、どの顔も、中年の女の顔になっていた。

後ろを振り返ると、道は、ただ真っ直ぐに続いていて、遙か先に、ポツンと小さな点のように、さっきのブロック塀の色が浮き出ている。その脇でチカチカしているのが、焚き火に違いない。プラスチックの緑の容器の代わりに、それよりもっと背の高い、ガラスの透明な瓶が、等間隔にずっと置かれている。そこには、ランドセルに貼られてあったのと同じ名前が、書かれていて、中には灰が入っていた。それなら、その灰は、燃えた女の子の灰でなくて何だろう。そう思うと彼女は、自らの服の裾を捲って腹を出し、臍の下辺りを、手刀で真横に切り裂いた。そして、そこに、逆さにした瓶の口を付けて、腹の中に、灰を全て落とし込んだ。

彼女は、一々瓶を拾い上げて、その灰を腹に収めては、先に進んだ。灰は幾らでも腹の中に収まるのだが、瓶を拾う度に腰を屈めなければならず、腰はも

う、擦り切れそうだった。それでも、同じ事を根気よく繰り返し、ブロック塀の十メートル手前くらいの所まで来て、遂に彼女は、そこに蹲って動けなくなった。その十メートルの中に、三本の開けず仕舞いの瓶が残された。彼女は、腹の傷口が塞ぐのを見届けて死んだ。それでも、女の子達の灰は、彼女の体の中を、血のように経巡ったのだろうか。その灰の作用によってか、彼女の体は、溶けて水になった。

　そこはちょうど窪みで、水溜まりが出来た。十メートル先で、男は、焚き火の炎の先に、強く息を吹き掛けた。炎の先は、水溜まりの上まで延びて行って、その水を蒸発させるまで、そこに留まった。それで彼女は甦り、三つの瓶をピョンピョンと跳び越えて、ブロック塀の角まで辿り着いた。

　彼女がそうして近付くのを嫌うかのように、白い布にくるまれた黒い水が流れ出て、左右の間に、もう一本、別の道を敷いた。ブロック塀は、左右に大きく割れていた。彼女は、そこに踏み込もうとしたが、左右の道から吹き付けて来る春一番が、そこで捩り合わさって渦を巻き、彼女を、跡形なく吹き消したかに見えた。しかし、彼女は、それを避けて、素早く身を屈め、焚き火に身を投げていたのだった。濛々と立ち上る水蒸気の中から、細かな灰が、パチパチと音を立てて、噴き上がり、焚き火の周りに散らばった。それが一通り収まると、男は、その灰を素手で掻き集めては、焚き火の上に撒いた。焚き火が消え

ると、男も居なくなっていた。

　私は、暫く男を探したが、直に諦めて、春の明るい色の日差しを受けて輝く、三本並んだ、ガラス瓶に目を向けた。中の灰が、キラキラ輝いている。誰も見ていないか、周りを確かめて、私は、その三本を上着のポケットにねじ込んだ。その間も、怪しまれないように、私は歩みを止めなかった。それで、私は、焚き火の跡を踏んでいた。右でも左でもない、真ん中の道が開けて来た。何時また見失われるかも知れないようだったので、私は、慌てて、そこに、先ずは第一歩を踏み入れた。

　するとやっと、そこが緩やかな下りで、その地面が真っ黒であるのが、見えて来た。道の両脇はそのままに、ただ道だけが低くなって、進む程に、どんどん暗くなって行く。見上げると、空ではなく、水が流れているのが見えた。小学生達が、その水に絵の具を流し込んで遊んでいるらしかった。雲の形にモクモクと湧き起こる、ピンクや緑が見えた。私は、足を止めていた。ちらりと行く先に目を遣ったが、ただひんやりとしているだけで、全く何もなさそうだった。

　上の、水のある所に行くには、どうしたらいいのか。私は大声で、消えた彼女の名を呼んだ。私はその時、彼女の名を知っていただろうか。しかし別に、間違えても構わないのだ。ここからなら、誰がその名を呼んだか、知られる事

はなさそうだったから。小学生達が、一斉に答えた。しかしそれは、私にではなく、彼女に対してのようだった。彼女は、小学生達が見ている前で、独り、服を着たまま、水の中に飛び込んだに違いなかった。何色もの服の色が、水の中に溶けて流れて、やはりまた、湧き起こる雲のようになった。服は、色褪せる事なく、水の中に、何時までも、その溶け出した鮮やかな色が、混ざり合う事もなく流れて行くのが、見られた。

　服の色が幾ら水に溶けても、服は、水に溶けなかった。その代わりなのか、彼女の体が、水に溶けているようだった。水から上がると彼女は、一回り痩せて、小さくなっていた。それに合わせるかのように、彼女を取り囲む小学生達が、よちよち歩きの小さな子供になってしまった。

　私の体は、その間も少しずつ、浮き上がっていたようで、水の直ぐ下まで来ていた。しかし、そこは水の底で、私の体は、その底に横たえられた。身動きが取れないのは、背中をそこに接着剤で貼り付けられたからか。子供達が、物珍しそうな顔付きで寄って来て、水際から私の姿を見下ろした。彼女は、言葉巧みに、子供達を引率して、私から離れて行った。独り残された私の体が、少しずつ水に溶けて、殆ど骨だけになると、彼女独りが戻って来て、手で、水を掬って、一口含んで、口をゆすいで、吐いた。その後ろに、黒尽くめの大男が現れて、水際で四つん這いになっている彼女の尻目掛けて、細くて硬そうな鞭

を振り下ろした。鞭が当たる直前に、彼女の体は、ダブダブの服を擦り抜けて、水の中に滑り込んだ。私の直ぐ真上に、裸の彼女の体が来た。骨だけの私は、少しばかり肉を取り戻せただろうか。彼女はそのまま泳いで、向こう岸に渡った。男が水に入って、彼女の後を追い掛けようとしたが、男の体は、水の中では鉄のように重く、直に動けなくなって、男は、溺れ死んだ。女は、向こう岸で、風に当たって、横座りになって、伸ばし始めた髪を、しつこい程に梳いていた。その度に、髪の先から水が滴り、そこが、この水の流れの源流だった。それが分かると、私は、自らの体を、水底から、引き剥がして、一度も息継ぎをせずに、水に潜ったまま、その源流を目指していた。

　口の中に、丸めた紙屑のようなゴワゴワしたものが、入って来る。噛み砕いて、やっとの事で飲み下しても、直ぐまた、新しいのが、入って来る。源流を遡るどころか、私はどんどん押し流され、黒い大男の溶け出した死骸を行き過ぎて、更に下流へと流されていた。なかなか踏ん切りが付かなかったが、諦めて立ち上がると、水は、脹ら脛の下辺りまでしかなかった。

　遥か遠くの、濃い緑の木々に覆われた山の、その頂からほんの少し下った辺りに、小さく、彼女の姿が見えているようだった。それともそれは、濃い緑の中に沈んでいる、更に濃い翳りのようなものに過ぎないのか。私は、風上に立っていて、乾いた息を、その息の中に血が混じるまで、吐いた。山裾の辺りに、

小さな炎が走った。紙芝居の画面が入れ替わるように、山は、丸ごと火に包まれた。それがまたいきなり、その一面真っ黒に焼け焦げた姿に変わった。私は、彼女を探した。

その探している私が、彼女だった。彼女は、山に踏み込んでいた。まだあちこちで、焼け爛れた大木の幹が、シューシューと音を立てていて、そんな山肌の有様を、分厚いスケッチブックの最後の頁までが真っ黒になるまで、描いて回らなければ、気が済まないようだった。

そのスケッチブックを抱えて、暗く狭い緩やかな坂道を、自らの全く疲れ知らずの軽やかな足取りに、ウキウキしながら、彼女は一息に上り切った。空は、高く真っ青に晴れ渡っていた。振り返ると、ブロック塀は、二つに割れたままだったが、中を覗いても、そこは、手入れをする者が居なくなって、荒れ放題の、狭い庭のようだった。枯れた植木が、乾いた地面に幾つか並んでいるのが、目に付くだけだった。

彼女は、陽の当たる左の道を進んだ。小学校に上がるか上がらないかくらいの、色白の、何処か体の弱そうな男の子が一人、さらさらした細い髪を振り立てて、嬉しそうに前から駆けて来た。その直ぐ後ろに、色白の太った大きな女と、野球帽を被った顔中皺だらけの小柄な男が続いた。行き付けの、大して旨くもない中華料理屋の夫婦だった。二人は、甲高い声を立てて笑いながら、子

供の後を早足で追っていた。彼女は、軽く会釈し、ついでに、スケッチブックを、太った女に渡した。夫婦は、急に顔を曇らせた。子供だけが、どんどん先に走って行った。

店はその日、定休日で、次の日、そのまま行き過ぎた。

客が、持ち帰った。それきり彼女は、姿を見せなかった。毎日のように、私は、そこで不味い炒飯を食っていた。（二〇〇一年八月十九日）

＊　＊　＊

（家畜↓種↓腹拵え↓物音↓石器）

家畜

遠い太鼓の音に急き立てられるように、その頃の私は、毎日休みなく、誰に出会してもいいように、ちゃんと身支度を整えて、まだ暗い内に家を出ていた。潮の香りを吸い込んでは、心臓をバク付かせ、自ずと胸が左に傾くのを戻し戻し、全身がふうっと舞い上がりそうな早足で、湿った青い道を、幾つも折れて行くのだった。下り坂沿いの低い金物屋を過ぎて、何時も引き戸のガラスがピカピカに磨いてある指物屋に向かう辺りで、必ず私は、背の高い、チリヂリの

長い髪の、痩せた中年の女と擦れ違った。その大股に強く振り出される足取りは、薄汚れたゴワゴワした白い長いスカートを、ブリブリと靡かせた。貝殻の二重の首飾りが、薄い胸の辺りで、左右に激しく揺れ、それを、彼女が、その揺れを抑えるように、右手に持った頭でっかちの尖った小さな棒で打つと、カリカリと濁った音が鳴った。その後ろには、まるで年齢不詳の、灰色のスーツを着た小柄な男が続いて、腋に抱えた古ぼけた太鼓を、黒っぽい傷だらけの棒の先に、赤い布を申し訳程度に巻き付けたバチで、間断なく打ち鳴らすのだった。間近で聞く太鼓の音は、何度聞いても、耳に馴染まなかったが、貝殻と棒の打ち合わされる音が聞けるのは、私の毎朝の楽しみだった。

太鼓の音は、女の足を進めるために、貝殻の音は、男がちゃんと女の後を付いて来るように、鳴らされるのだ。もちろん、私の想像に過ぎないが、そうに違いないと必ず考えては、私は、安心して彼らと擦れ違えた。うっかり、余所事を考えたまま、擦れ違った日には、これからまだ、たっぷり一日、働かなければならないのに、心臓に突き刺すような痛みが走って、歩く気力さえ萎えて、左に傾いたまま、ドブ板の上で、四、五回、回って、少し目を回して、その勢いに任せて、やっとまた前に進めるような事になるのだった。そんな時には、また別の想像が巡って、私の気力を取り戻させた。

それは、二人は、指物屋の脇の小道を抜けた先の、石垣の上の草叢に立つ火

の見櫓の奥の小屋で、毎夜毎夜、一晩中、彼らの仲間といかがわしい秘密の会合を開いている、というものだった。その小屋は、医者の居ないこの辺りに初めて出来た診療所で、今は何に使われているか分からない。前を通ると、何時も、なぜか、戸がいっぱいに開いていて、中に人が居た例しがなくて、家財道具一つ見当たらなくて、それにしては、床など塵一つ落ちていなくて、怠りなく人の手が掛かっているようなのだ。そこを使うのは、あのような者達しかないだろう。そして、何か曰く付きのガラクタでも持ち寄っては、そこから死人の声でも聞き取っているのだろうか。そうしてそれから、必ず私は、昔飼っていた猫が、何時も乗っかって寝ていた、太い木の棒を思い浮かべる。それを、その会合に持ち込んで、また猫の喉をゴロゴロ鳴らせたらと、思うのだった。猫は、何日か姿を見ないと思ったら、昼間ずっと石を積んだダンプカーが曲がる角の、ゴミの収集場所に、捨てられてあった。特に傷は目に付かなかったが、よく見ないと違う猫に見えてしまう程に、腐り掛けていた。それまでも、何日も姿を見せない事が、ずっと続いていたが、それは、私が近所に引っ越して、幼い頃からずっと居着いていた、それまでの家と庭が丸ごとなくなって、そこで、ビル工事が始まったからだ。ヤツにはもう、居場所はなかったのだ。尤も、あの太い木の棒など、疾っくに何処かに行ってしまった。彼らの仲間に加わろうにも、私には、ガラクタ一つ、手元にないのだ。

　しかし、そんな事を考えている内に、私は、ガソリンスタンドの脇の地下通路への入り口に来ていて、そこの狭い階段を、もう何も考えずに、降りているのだった。そして、天井の低い、この狭い階段を、少しずつ折れ曲がって見通しの利かない地下通路を、自らの足音だけを聞きながら、気を張って進んで行った。誰と出会すか分からないし、誰と出会しても、逃げ場はない。

　地下通路は、海の下を通っていて、階段ではなくて、細かな砂でザラザラした、ボロボロのコンクリートの緩やかな坂を上り切ると、真っ白で真四角な、直ぐ目の前が海の、大きな建物の裏手に出る。その周りは、海と砂浜と防波堤だけだった。野良猫が屯していて、片目が潰れていたり、脚を引き摺っていたり、体中に汚物を擦り付けられていたりで、真面なのは一匹もいなくて、その建物の中に居る連中の、ひん曲がった性根が、よく見て取れた、結局、私は、三年と少し、せっせとそこへ通った訳だ。

　私は、一旦その建物に入ると、彼らは、陽が暮れるまで、デブ男四人組の、彼らだけの遊びに付き合わされた。彼らは、大抵パンツ一枚になって、二階の窓のない狭くて天井の低い丸い部屋の中の、白木の丸いテーブルを囲み、椅子に掛けてはいたが、しょっちゅう腰を浮かして、テーブルに両腕を突いて、四人でそのテーブルを、傾けたり、向きを変えさせたりするのだった。彼らは、ただそれで、笑ったり、呻いたり、吃驚した顔でとんでもない奇声を発したりするだけ

だったので、私には、何が彼らをそうさせるのか、最後まで分からなかった。いやもちろん、テーブルの動きと、そのガタガタと床を打つ音が、その彼らの反応を引き起こしているのだが、テーブルが、あっちこっち傾いたから、それがどうだと言うのか。

　食事は、脂っこい料理が、壁際の別のテーブルに、朝からたっぷり用意されてあって、彼らは、途中それを、床にボロボロとこぼしては、パクつきながら、食う間も惜しんで、そのテーブルごっこを続けた。私はそこで、独り、終始無言で、飲まず食わずで、照明と音響の調節をする係りだった。私を含めて五人だけで、他に人の出入りは一切なく、一日中その部屋に籠もりきりだった。

　それは、私の仕事である筈だが、なぜか私は、タダでやらされていた。やっとそこから解放されて、家に帰り着くまでの間、仕事帰りの通行人の肩に溜まった埃を落とすのが、稼ぎを得るただ一つの手段だった。へとへとになって、家のドアを開ければ、そのまま倒れ込んで、もう私は気絶していた。次の日、と言っても、まだ夜中だが、昨日の彼らの食べ残しを持って帰ったものを腹に入れ、照明と音響の器具の扱いを、より素早くこなせるようにと、自ら編み出した手の運動を一通りして、また暗い内から、出掛けて行くのだった。

　それでも、休みもない訳だし、出て行くのは家賃だけで、金は少しずつ貯まった。しかしなぜか、よく泥棒に入られて、有り金をそっくり盗られてしまう。

何処に隠せば一番見付からないか、色々考えて、置き場所を変えるのだが、何処に置いたか自分で忘れないために、それとなく目印を付けてしまって、それで、泥棒に見付けられてしまうのかも知れなかった。警察に届けても、何にもならない。彼らとその度に対応するのが面倒になって来たし、警察は、根ほり葉ほり私の部屋の事を聞き出そうとして、ひょっとして、警察の中に犯人が居るようにも思えて、直に届けるのはやめた。

　私が大人しく言い付けに従っているからか、その内に、デブ男四人組は、図に乗ってきて、私の仕事がちょっとでも気に食わないと、露骨に嫌な顔をするようになり、或る日、いきなり、代わりを見付けたので、もう来なくていいと言われた。来なくていいと言われれば、この建物は、ハナから彼らの持ち物であり、私は、ただの部外者なのだから、返す言葉はなかった。最後の仕事が終わって、その円い部屋の隅で、何時ものように、彼らの食べ残しを容器に詰めていると、何処から入れたのか、目の落ち窪んだ、白くて痩せた、裸同然な程に毛の短い、大きな犬をけしかけられた。犬は、人間の言葉を喋り、「仕事が済んだら、直ぐに帰るように」と、繰り返した。四人のデブは、横を向いたまま、黙って犬と私を見ていた。そこで、人間の言葉を聞くのは、それが最初で最後だった。それでも私は、何時もと同じく、やはり大人しくそこを立ち去った。

家に帰ると、中で、警察が、四、五人、テーブルを囲んで、お茶を啜りながら、静かに待ち構えていた。私は、デブ部屋の隅に立たされたまま、彼らの話を聞かされた。それによると、私は、デブ四人の部屋で、毎日盗みを働いていた事にされていて、その穴埋めに今すぐ有り金全てを出せと言う。私は、ここでもし警察の言う事を聞いて、素直に有り金を出せば、一生警察に食い物にされるように思えたので、一瞬の隙を突いて、部屋から飛び出した。

公園まで一気に走って、喉が渇いたので、蛇口から直に、水をグビグビ飲んだ。飲み終わると、直ぐ脇で、日に焼けた禿頭の老人が、求人雑誌を読んでいるのに気付いた。私は、その女のような細くて艶々した手の甲に向かって、必ず手で隠すのだった。老人は、咄嗟に手を引っ込めて、素早く唾を避けられた事を嬉しがるような笑顔を、私に向けて、意外に大きな太い声で言った。

「あんた、ここの水は、腹痛、起こすよ。」

「なんで？」

「まあ、飲んじゃったんなら、しようがないな。」

「この水は飲めません」と白い墨で書かれた小さな木の札が、蛇口の根元に、ひっそりとぶら下がっていた。私は、鷲のように、私の唾の掛かったその頁を、右手で上から掴み取って破り、それを握ったまま、何の当てもなく、ただ真っ

直ぐに闇に向かって走った。

　そこはもう、削り取られた乾いた山の斜面で、踏ん張る程、その硬い地面の上っ面の砂に、足が滑った。後ろから、老人と警察が言葉を交わしているのが、聞こえて来た。私は上るのを諦めて、くるりと向き直ってしゃがみ込み、出来るだけ、声のする方から逸れるように、そこをズルズルと滑り降りた。薄い青と少しだけ濁った白のペンキを綺麗に塗り分けた小屋があって、私は、そこの金網の中に逃げ込んだ。金網の中はまた、あちこち金網で、鶏と兎が、別々に飼われていた。私は、兎共を取り囲んでいる金網の奥で、紙を握る手を開いた。しかし、唾でインクが滲んでいて、何が書いてあるか、さっぱり読めなかった。

　ガラガラと戸が開けられる音がして、人が入って来た。四人。中年過ぎの男女と、若い二人の男だった。両親とその二人の息子だろうか。四人はのべつ幕なしに喋っていた。つまらない洒落を言い合っては、げらげら笑い、何かいい事でもあったのか、全員機嫌が良さそうだった。どうやら彼らは飼い主で、エサをやりに来たようだった。咄嗟に私は、手にしていた紙を、クシャクシャと、わざと音を立てて、食べた。顔付きも、出来るだけ、キョトンとしたような、家畜のような顔を作った。四人共、私に気付かなかった。彼らは出て行ったが、戸を閉め忘れた。外から、時々、風に運ばれるように、警察と老人の遠い声が入って来たが、それも直に已んで、風の冷たさだけが残った。

冬の一番寒い頃で、体を動かさないでいたら、凍え死んでしまいそうだった。そうは思うのだが、体は、そこに蹲ったまま動かなかった。金網に押し付けたままの左の頬も、ピクリとも動かせなかった。余りに腹が減っているからに違いない。それでも暫くして、何とか私は、首を右へと巡らして、頭の重さだけを頼りに、頭を少しずつ前に垂らして、足を踏ん張り、やっとの事で、体を前に伸ばしながら、ズルズルと床に倒れ込んで行った。凍るような床の冷たさが、直ぐに、胸や腹に来た。そこから腕を伸ばすと、目論見通り、鶏のエサに手が届いた。しかし、これも或る程度予想はしていたが、ただ鶏につつかれて、手の甲を血だらけにするだけだった。

　そこで私は、奴隷になる事を思い付いた。死ぬ事に比べれば、余程マシだ。奴隷になれば、監視役が私の側で、何時も鞭を振るって、私を脅してくれるのだ。体が動かないなどとは、言っていられないし、それでも動かなければ、鞭で打たれて、その痛みに飛び上がって、自ずと体は動き出すだろう。そう思うと、元気が出て、私は、冷たい床を転がって、小屋の外に出た。床の冷たさに体中の熱を奪われて、それでトドメを刺されて、愈愈、動きが取れなくなるようでもあったが、禿げ山を照らす月をじっと見上げている内に、起き上がれるような気になれて、それで起き上がって、最後までフラフラした足取りのままだったが、そこから二時間掛けて、私鉄の駅に辿り着いた。（二〇〇一年八月

二十三日）

種

改札口より少しだけ奥まった所の壁際に、窮屈そうに、長椅子が、コの字型に備え付けられているだけだった。風は殆ど吹き込まなかったので、ひっそりとはしていたが、身を切るように冷え込んでいた。二人、先客が居た。大柄な腹の大きな女が、改札口に背を向けて、腰掛けていて、小柄な男が、大小の鞄を幾つも、肩から提げたり手に持ったりして、その前に立っていた。それでも、女の頭の方が高かった。女は、縮れた長い髪をふさふさと背中まで垂らし、白く尖った大きな鼻をしていて、表情は虚ろだったが、切れ長の大きな目だけはキラキラと輝いて、細かくカタカタ揺れるガラス窓の向こうを見ていた。私も、つい窓越しにそちらを見た。

バス停の脇の小さな家に、大きな印刷屋の看板が掛かっていて、その屋根の天辺に、大きな鷲が留まっていた。鷲は、足元のボロボロの紙の束を、突っ突いていた。その紙の色から、私は、それが、老人の持っていた求人雑誌だと分かった。喉の奥がゴワゴワして来て、私は、紙の塊を吐いた。それは、手で拡

げるまでもなく、勝手に皺が伸びて、ひらりとした一枚の紙になった。胃液ですっかり汚れが落ちたかのように、そこに書かれた文字が、くっきりと浮かんだ。やはりそうだったか。そこには、奴隷募集の記事があった。それで私は、奴隷になる事を思い付いたのだ。そこには、住所と地図も載っていて、何年か奴隷奉公をすれば、その後に明るい未来が開けるような事が書いてあった。

　女の息遣いが荒くなって来た。男が、片手で彼女の腕を支え、もう片方の手で、彼女の背中をさすった。それでも鞄は、一つも体から放さなかった。女は、アーアーと呻き声を引き延ばして、ますます目を輝かせた。印刷屋の前のドブの中に、誰かが隠れているに違いない。一瞬、その影が、そこから頭を出して動くのが見えた。忽ち鷲が、拡げた黒い翼を傾けて、降りて来た。影が消えると、呻き声は収まった。私は、その影が気になって、駅の外に出て、ドブをずっと目で追った。何も見えなかったが、角の向こうで、女の甲高い笑い声が、響き渡っているのが、その声に、私はひどい疲れを覚えて、立っていられなくなった。何とか腰を捻って、駅の方を向いて倒れ込むと、鷲は、駅の小さな建物の、屋根の天辺に居て、遠くを見ていた。

　その目は、公園で会った老人に似ていないだろうか。駅の建物の窓の中に、真っ直ぐ私の方を向いている、女の姿が見えた。女の目もまた、鷲や老人の目と似ていた。切れ長なのに、点のような、静かだが鋭い目だった。しかし、女

の目からは、先程の輝きは、消えていた。その分、私は、自分の目が、キラキラ輝いているように思えて、もしそうなら、私の瞳の中に、女は鷺の姿を、鷺は女の姿を、見て取っているに違いなかった。私はもう、顔を少しも逸らせないのだ。女と鷺のために、女と鷺の姿が、私の目の中に、映るままにしておかなければならない。瞬きもしなくなって、私の両目は、二つの小さな円い鏡だった。女と鷺の姿が映っているのだけが分かって、私はもう、目が見えなくなっているのと同じだった。

直ぐ脇を、いきなり、女の甲高い笑い声が通った。その後を、ズルズルと足を引きずる音が続いた。それは、駅には向かわず、左に逸れるようだった。左を真っ直ぐ行けば、海に出る筈だ。それなら、その引きずっているのは、私の代わりにデブ四人に雇われた者だろうか。その姿を見られないのは少し残念だが、甲高い声で笑う女の姿を見ずに済んだのだから、それで良かったのだ。

しかし、時間が心配だった。私は四つん這いになって、顔を真っ直ぐ駅の方に向けて、手探りしながら、前に進んだ。その地面を掃く指の感触が、私に眠気を齎し、急に意識が遠のいた。私は、四つん這いになって進みながら、眠っていたようだ。

気が付くと、私は、駅の建物の入り口の直ぐ前に、四つん這いのままでいた。その直ぐ先の改札口にも、その隣のコの字の長椅子にも、人の姿はなかった。

私は、何でもいい、何か動くものを探した。明るくなり掛けた空の遠くに、鷲が飛び去って行くのを、やっと見付けた。それは直ぐ、濃紺の厚い雲に消えた。その消える時の、震える翼の地上を向いた鋭い角度を見て、女を孕ませたのは、あの鷲であるような気がして来た。それとも、あの鷲を遣わした、別の誰かだろうか。少なくとも、鞄を持った小柄な男ではなさそうだ。

鷲のその最後の身振りを真似る積もりになって、私は、立ち上がる事が出来た。切符を売る窓口を覗くと、その奥から、制服の男が、近付いて来た。彼は、そこの棚か机の何かを、探すか整理するかしていて、私に気付いて、それを中断したようだった。それとも、蠅でも追っ掛けていたのか。

「始発はもう出てしまいましたか？」と、私は聞いた。

「始発はまだです。」

「でも、電車はもう行ってしまったんでしょう？」

奴隷専用列車は、ダイヤに載っていないのか。それはそうだろう。

「ええ、あれはもう、出ました。」と言って、彼は顔を曇らせた。その、疑り深そうな目の泳ぐ先に、蠅が飛んでいた。彼は、黙って奥に引き返した。その奥にはドアがあって、彼はそこを出て、駅の建物をぐるっと廻って、私の側に来て、言った。

「替わりがあります。」

私達は、プラットホームの脇の線路を渡って、短い引き込み線に来た。線路は錆び付いて、真っ赤だった。いや、線路を渡ったのは、私だけだった。彼は、その線路のために盛り上げられた、ゴツゴツした茶色の石を、踏み越えられないのだ。そこに彼は、腰砕けのままでいて、私と目が合っても、やはり疑り深そうなままだった。彼は、線路の先の、高い草が茂った草叢を指差して、戻って行った。

草叢の中には、湿気をたっぷり吸った重い大きな板が、何枚も隠されていて、私は、それを独りで組み立てなければならなかった。その表面は黒くて、ヌルヌルしていて、それを持ち上げるには、力一杯に、その縁を握り締めなければならなかった。何処からかまた、ぐるっと廻って来たのだろう、彼と、後もう一人、同じ制服の男が、直ぐ横に来ていた。そのもう一人が、駅長だと言う事だった。二人は暫く、私が組み立てた大きな木の箱を、細い鉄の棒で軽く叩いて、点検するようだった。

「ボロ資材で、よくここまで拵えましたね。」と、駅長は言った。

「これなら始発になりますよ」と、駅員が、私から顔を背け、少しだけ弾む声で、駅長に向かってだけ言った。

それから三人掛かりで、でかい鉄の車輪を四枚、箱に取り付けた。私だけが中に入り、二人が箱を押したが、箱はビクともしなかった。

それで二人は、自分の目を刳り抜いて、それを車輪の中心に嵌め込んだ。車輪が、音もなく滑り出した。

私は、窓から顔を出した。みるみる遠ざかって行く二人は、手に手を取って、成功を喜び合っている。しかし、いきなり目が見えなくなって、駅の仕事は大丈夫なのか。彼らは、ポケットから、縁なしの眼鏡のようなものを取り出して嵌めた。それから、線路の盛り上がった石ころの上を、軽い足取りで踏み越えて、駅舎の方へ引き返して行った。豆粒のような背中は、まるで何事もなかったかのようだった。

箱の乗り心地は、そのガタゴト言う音や揺れ具合まで、普通の列車と変わらなかった。両側には、窓が大きく開いていた。左は、住宅地で、線路スレスレに、同じような二階建ての白い壁の建物が、斜めに迫って来る。後はその上で、薄っぺらな暗い空が、今にも後ろに倒れそうなだけだった。右側は、ずっと見晴らしが利いた。平坦な田園の風景が延びて行って、丸太を積み上げた広い材木置き場があって、堤防があって、その向こうが海だった。海の向こうにまた、のっぺりとした陸地があった。剃刀のような薄っぺらな巨大な刃物が、真横に差し込まれ来て、そこにぺったりと貼り付いてしまったかのようではないか。海は、湾になっていたが、海だけが、色がなかった。遠い陸地は、ぼんやり濁ったピンク色で、その直ぐ上に、橙色の暗い太陽が、雲にも霞にも遮られず、

剥き出しの円い姿を晒している。いや、それは本当に太陽だろうか。空は、冷たそうな青い雲ばかりだし、陸地はすっかり霞んでいて、その中にポツンと現れた姿は、どう見ても偽物ではないか。

相乗りの客が居た。始めそれは、小さな羽根をちぎれそうに風に靡かせながらも、死んだように動かない窓際の蠅だったが、暫くすると、制服姿の男子高校生だった。窓際に真横に光が射し込んで、若い顔を金色に浮かび上がらせた。太陽はやっと本物らしくなって、私の目を眩ませた。それでも疑いは晴れない。その光も偽物かも知れない。高校生が、その光に背を向けると、私は、真っ直ぐその光の方を向いていて、彼と向き合った。窓にはガラスが嵌っていて、中は少しだけ暖かくなっていて、静かだった。彼の息遣いまで聞こえて来た。ここに乗り込む前に、息を切らして、早足で暗い道を遣って来たに違いない。目は、涙で潤んでいたが、冷たい風を真面に受けていたからだろう。私は、彼の足元に目を落として、話し掛けた。

「これは、奴隷用の車両ですよ。」

私の声が届かないのか、彼は応えてくれなかった。私は続けた。

「実はもう、それは先に行ってしまったんですけどね。だからこれは、ひょっとして、通学用の列車かも知れない。それじゃ、困るんですけど。だけど、どうして君は、これに乗ってるの？　まさか、前のに乗り遅れたなんて、言う

んじゃないだろうね。そうでないなら、次のに、乗ればいいでしょう。他の学生も、みんなそれに乗るんじゃないか。」
相変わらず、彼は黙ったままだったが、聞こえた気がした。口も確かに、そのように動いた。「乗り遅れた。」と言う声が、
「前のに、乗り遅れた。」と言う声が、聞こえた気がした。口も確かに、そのように動いた。では、彼も奴隷志望か。
「でも、あれは奴隷専用ですよ。始発と間違えてるんじゃないのかな。始発は、あれの後だって、駅員が言ってましたよ。」
そう言いながら私は、待合室に居た、二人連れを思い浮かべていた。特に、女は、あんな大きな腹を抱えて、どうして奴隷になろうなどと思ったのか。臨月の女にしか出来ない、奴隷の仕事があるのだろうか。それとも、あの女も、腹を膨らませたまま、身動きが取れなくなってしまって、奴隷になって、鞭で打たれながらでなければ産めそうにないと、考えたのか。何しろ、種は、人間でないのかも知れないのだ。あの男もきっと、持て余しているのだろう。
車掌が、私と高校生の間を通り過ぎた。
「次は、競輪場前です。」
箱はもう、湾をぐるりと回り込んでいた。前を見ると、ちょっとした風でも吹っ飛びそうな、まるでプラスチックで出来ているような、幅の狭い薄っぺらなプラットフォームが見えて来た。下から、斜めの細い棒が支えているだけだ

った。高校生も、首を反らして、そちらを見た。箱が、そこでゆるゆると止まると、箱から身を乗り出していた車掌が、そこへそっと降りた。私達、中の二人は、また向き合ったまま、じっと動かなかった。車掌は、休めの姿勢のまま、今来た線路の方を向いて、何か呟いていた。

高校生は、膝に乗せた鞄から英語の参考書を取り出した。鞄から、紙が一枚、ひらりと床に落ちたが、彼はそのまま、参考書を読み出した。微かな風が往き来しているのか、紙は、床の上をスルスルと滑り続けた。私の足元に来たので、拾い上げようとしたが、紙は、私の指を素早く擦り抜けた。ただそれで、足元にもう一枚、別の紙を見付けた。こちらは、床に張り付くように、動かなかった。私は、それを上から掴み取った。また、あの求人雑誌の一頁だった。先ず、そこに載った地図に目は行くのだが、まるで読めなかった。その中の何処かにある筈の現在位置が、どうしても見付からないのだ。それさえ見付ければ、なぜ箱がここで止まったままなのかも、分かるかも知れないのに。

プラットフォームの側の、何処か低い辺りで、赤ん坊が泣いていないだろうか。或いは、別の生き物かも知れない。それは、とても弱々しくて直ぐに已んだが、その声を聞いたからなのか、高校生が、本から顔を上げて、私の頭より少し高い所を見た。彼が眉を顰めると、その目は、もう潤んではいなかったが、女の目だった。柔らかそうな頬も唇も、女だった。彼は、足元を流れる紙を、

指でそっと床を掃くようにするだけで取り上げて、本と一緒に鞄に仕舞って、立ち上がった。車掌の声に振り向いて、彼は、やはり女のような、歩幅の狭い柔らかな足取りで、箱から出て行った。私は、独りまた、私の紙に目を落とした。すると、地図がすっかり読めた。この線路の向かう先は、奴隷を雇ってくれる場所とは、違う方向を向いていた。（二〇〇一年八月二十五日）

腹拵え

高校生は、狭いプラットフォームの先端の、線路と離れた側の、一番隅っこに行って、制服を脱ぎ始めた。柵も何もなくて、半歩でも踏み間違えば、間違いなく、そこから向こうに落ちてしまう。しかし、彼は、その全く後がない角に、爪先立ちになって、まるで綱渡りでもしながらのように、体を右に左に傾けて、ズボンを脱いだ。そこだけ斜めに、定規で線を引いたかのように、陽の光が断ち切られていて、周りの橙色の中で、彼の素肌は沈んだ緑色に見えた。鞄から取り出した、薄い生地の白っぽい服を着重ねて行くと、肌の緑色は、彼の足元から流れ出て、プラットフォーム一面に薄く拡がって、橙色と溶け合って、マダラ模様の銀色になって行った。車掌は、高校生に背を向けたまま、そ

の少し手前の線路よりに立っていた。口は、微かに開いていたが、動いてはいなかった。目はもう、線路は見ていないようだった。

箱が前に動き出した。私は、その前を向いた大きな椅子に、腰を沈み込ませていた。恐らくこの先、奴隷にさえなれないで、私は何になるのか。奴隷でさえないなら、恐らく全く何ものでもないような、何かになるのだ。重い荷を降ろしたかのように、それで体の力が抜けたが、直ぐに息苦しくなった。箱は、四角ではなくて、三角で、窓もなくなっていた。誰も来ない掘っ建て小屋の天井裏に、閉じ込められているようだ。立ち上がろうとしたが、三角の二辺に、両肩を押さえられた。見上げると三角の頂点からロープが垂れていて、ひどく窮屈なまま、そのロープを引っ張る他に、出来る事はなさそうだった。ロープは、手繰れば手繰るだけ、繰り出され、私の体は、狭い三角の中で、ロープに埋まった。ロープの模様だと思っていたが、直ぐ目の前でそれを見ると、ロープの幅と同じくらいの漢字が、楷書体で、間を開けずに書かれてある。偏でも旁でも脚でもいい、私は、「鳥」を探した。そして私は、何度か、「鳥」の形を目にした筈だ。しかし、それらは、見付けた途端、忽ち水に溶けるように、流れ去るようだった。私は「鳥」を諦めて、先ずは、見て取れる漢字を追う事にした。漢字は次々に目に留まったが、どれも見た事のない漢字だった。いや、これらは、漢字ではなくて、何処か他の国の文字ではないか。私が、それに向かって、歯

を立てると、その文字が、一粒一粒に剥がれて、ロープから零れ落ちた。
外から、撫でるような高い声が聞こえて来た。咄嗟に、私の顔がそちらに向くと、箱のすっかり傾いた壁に、縦に細長い窓が切られていて、そこから、白い服の高校生と車掌の姿が、窓の幅ぴったりに見えた。それは、高校生の声だった。車掌も、軽く頷きながら受け答えしていたが、私まで、声は届かなかった。私は、立ち上がろうとした。意外にあっさり腰が浮いたので、勇気を得て、更に力を込めて、体を伸び上がらせようとした。一斉に、文字が突き刺さって来た。全身に、鋲を打たれたようだった。唇は、すっかり麻痺したようだったし、耳の穴も、すっかり塞がれているに違いなかった。顔中ひりひりして、鋲だらけの筈だが、なぜか、目だけは普通に見えた。
私は、その目をキョロキョロさせて、次に出来る事を見付けようとした。結局、ただ暴れるしかないようだった。私は、皮膚がズタズタになるのを覚悟で、とにかく出来る限り、体を振り立てた。しかし、体が、そこの狭い三角の壁に当たる事はなく、精々、撫でるくらいだった。替わりに、私を取り巻いているロープが、ズタズタになって行った。ロープは破れ目から、水を滴らせ、三角の箱の中に、水が満ちて行った。浮力で、私の体は、三角の頂点を割り裂いて、更に真上に向かって、突き上がった。
私は、線路の上にボトリと落ちた。体中、文字の鋲が刺さったままの筈なの

に、それらしい痛みはなく、左の肘を、線路に打ち付けたのが、ズキズキするだけだった。箱はまた、四角に戻っていて、無人のまま線路を走って、小さくなって行った。振り返ると、二人の姿はなかった。四つん這いで、手足を線路に乗せると、濡れた私の体はそのまま滑り出し、今来た線路を戻って、駅の、列車の停止位置まで来て、ぴたりと止まった。そこでちょうど体が乾いたので、止まったのかも知れなかった。私は、プラットフォームの縁に手を掛けて、そこをよじ登ろうとした。

その真ん前にだけ、小さな屋根が斜めに突き出していて、その下の艶々した緑色の長椅子に、大柄な女が、切れ長の潤んだ目を、真っ直ぐ私の方に向けて、腰掛けていた。揃えた膝の上で、両手首をそっと交差させ、背筋を伸ばして、誰に話し掛けているのか知らないが、平板な低い声で、途切れる事なく、言葉を発していた。その足元に、真っ白な坊主頭の、黒尽くめの丸っこい男が、腰をくねらせながら蹲っていて、両掌の中の火種に、息を吹き掛けていた。男はそれを、女の爪先に着けた。女の靴は紙で出来ていたようで、火はそこでパッと燃え立った。その明るさからして、まだまだ、辺りは暗いのだと、気付かされた。それを見ながら、私は、そこをよじ登って、プラットフォームの白線を踏んで立った。プラットフォームは、薄っぺら紙で出来ているに違いなかった。とても私の体の重みを支えきれるものではなく、私の立っている所は、パリパ

リと乾いた音を立てて、みるみる落ち窪んで行った。女の靴の火が、そのクシャクシャになりながら傾いて行くプラットフォームに、燃え移るのが、見えた。一瞬の内に、一面、橙色に燃え立った。黒尽くめの男が、首を窄めて、転がり落ちて来るのが見えた。駅の下には何もない。私は、その燃え盛る大きなＶ字の火を眺めながら、高い崖の下で尻餅を搗いて、そのまま更に、頭を下に向けて、濡れた草地の斜面をスルスルと滑り落ちていた。Ｖ字の尖った底で、男の体の黒い影が、グルグルと回っていた。火が収まると、駅の真下の切り立った崖が、所々煤を被って黒光りする他には、そこに何かが燃えた跡さえ見当たらなかった。プラットフォームも、それを支えていた棒も、丸っこい男も、綺麗に消えていた。

ただ、全てが燃えた訳ではない。斜めの屋根と、緑色の長椅子は、そのまま残って、陽の光を受けて微かに輝いて、どう見ても、崖の上の何もない所に、宙に浮いているようだった。女はどうなったのか。下から見上げても、その長椅子に誰かが腰掛けているかどうかは、分からない。

私は、両脚を振り上げ、後ろにくるりと一回転して、立ち上がった。右手の中に、火種があった。それは直ぐに、掌の肉の中に埋まって、消えてしまいそうだった。私は、左手で、胸の真ん中に突き刺さった一文字を抜き取って、それを右の掌に乗せて、息を吹き掛けた。火は勢いを取り戻した。

田園の景色の中の、ずっと先を、高校生と車掌が、少し離れて、疲れ知らずのような、サッサとした足取りで、並んで歩いて行くのが見えた。私は、体中の文字を順々に抜き取っては、火を守りながら、彼らを追った。私の足取りは、恐ろしくゆっくりだったが、彼らの背中は、面白いように私の方に迫って来た。その先の海の、その向こうの陸地が、回り込んで、ずっと繋がっていた。つまりそこは、湾ではなくて、湖だった。陽はまだ低いままで、湖面の三分の二は、深い青色に沈んでいて、三分の一が、横たわる半月のように、銀色に、静かに光っていた。小高い草原が、三六〇度ぐるりと、その円い湖を囲んでいた。その草原の一番高い所に、線路が敷かれていて、そこを、私達が乗って来た箱が、ゴトゴトと走っている。降りて正解だった。何時まで乗っていても、湖の周りを回るだけで、何処に行ける訳でもないのだ。

湖岸の、一番手前の辺りに、女の姿を見付けた。顔の輪郭も全く掴めない、まだずっと遠くなのに、どうして女と分かってしまうのか。女の着るような服を着ているのや、体付きや、身のこなしは、それとなく見分けられはするが、それで女とは決め付けられないだろう。私の目に、それが女として映らなければならないから、女なのかも知れない。その人の姿も、また、湖を巡ろうとしているようだった。白いスカートを捲り上げ、細い脚をすっかり見せて、裸足で踊るように駆けていた。それを見て、私が火を守っている訳が分かった。私

は、彼女の脚を、爪先から太腿へと、火で焼きたいのだ。彼女もまた、焼かれるのを待ち焦がれて、あんな風に、それを剥き出しにしているに違いない。しかし、女の足は濡れている。私のこんな小さな火を、燃え移らせる事が出来るだろうか。何かが足らないが、何なのか分からない。しかしそれより、私は、あそこまで火を運べるだろうか。突き刺さっている文字の数は、どんどん減って行く。私は、高校生と車掌を追い抜いた。

　近付く程、草の丈は短くなって、草の匂いより、草の下の泥の、水の腐ったような匂いが勝った。もう一つ、人の姿を見付けた。それは、対岸の一番遠い辺りに居て、やはり踊るように、そこを駆けていた。それこそ、本当に遠くで、どうして、それを人の姿と見分けられたのか。その手前には、水面しかなく、その後ろには、草の生えた斜面しかなくて、濃さは違うが、どちらも青一色で、他に何一つそこに動くものがなかったからか。一人目が女なら、その二人目も女に違いなかった。二人を分かつものは、距離だけだった。彼らは、時計方向に、同じような速さで進んだので、互いの姿を、何時まで経っても、一番遠い対岸に認め合うしかなさそうだった。

　高校生と車掌が、二人並んで、斜面の中腹に尻を着いてしゃがんで、水辺の二人を見下ろしていた。周りの草は、しゃがみ込んだ彼らの体の下半分を、隠す程の丈だった。その姿はもう、湖岸の手前の女と同じ程の大きさだった。私

に追い越されてから、彼らは、湖には向かわずに、草原を横に進んだのか。そうして遠くから見ると、高校生は、間違いなく女だった。しかしそれは、私の目に、女として映らなければならないものだろうか。寧ろ、男のままに見えていなければならないもののようにも、思えるのだが。

　湖に目を戻すと、私はまた、そこに幾らか近付いてはいたが、底に穴でも開いたのか、水面がすっかり低くなって、湖は大分小さくなっていた。それでも二人の女は、相変わらず湖面を挟んで、水際を駆けていた。二人の距離は、常に、円い湖の直径でなければならないようだ。もちろんそれも、相当に縮まっていて、彼らは、互いの足元から目を離せなくなっているようだった。絶えずそうして距離を測っていなければ、二人の位置は偏ってしまいそうなのだ。いや、それとも、ただ互いの足の動きに魅せられているだけか。それとも、その足の動きから生まれる、水しぶきや波紋の輝きに魅せられているのか。湖面全体が、陽を受けて銀色だった。もう月には見えなかったが、月面の一部を円く切り取って、そこに敷いたように見えた。いや、女の目は釣り上がって、血走っているではないか。女の足元には、何か鋭い歯を持った凶暴な水の生き物が隠れているのだ。それが、湖面を一気に飛び越えて、襲い掛かって来ないとも限らなくて、互いにそれを見張っているのだ。

　その彼らの頭の上で、薄い紫色の細い線が、螺旋を描いている。それは、私

の掌で燃えた文字の、煙の連なりに見えた。風はなかったが、空気は、湖の上で、ゆっくり回っているようだった。水の中の一匹の生き物が狙っているのは、その螺旋ではないだろうか。それなら、女の役回りは、何か。その生き物を踏み付けて、それをそこに押さえ込む事か。全く反対に、水を蹴って、その生き物の気を引き、そこをぐるぐる巡って、その空中の螺旋に、ヤツらの目を向けさせる事か。それとも、ヤツらはいきなり飛び上がるのではなくて、先ずは、女の体を平らげて、しっかり腹拵えしてから、螺旋に飛び付く算段か。

右手を見ると、火種は、掌の肉の奥に埋まり込んで、その深さからして、今にも手の甲まで貫きそうだった。もう文字が何処に残っているかは、見て取れなくて、ただ闇雲に左手で体中をまさぐっている内に、指の股に、それが引っ掛かって来るのだった。だからもう、何時、それが最後の文字になるかも知れない。しかし、まだ一つも、「鳥」の形を含む文字を、手にしていない。(二〇一年八月二十七日)

物音

私は足を止めた。なぜだか分からなかった。しかし、なぜ湖に向かって進ん

でいるのかも、分からなくなっていた。女の脚を焼きたいからだ、という考えは、色褪せていた。それで、私の足は止まるのか。
　そうして私の足は止まるとして、では、その私は、どちらを向けばいいのだろう。縮み続ける湖と、そこを巡る二人の女の姿は、私が見てはいけないもののように、見えて来る。そうでなかったにしても、それを目にしてしまっているのが、ひどく辛い事のように思える。しかし、目を逸らしても、その辛さを和らげてくれるような、目の行き場は、なさそうだった。全く色の変化も濃淡もない、うっすらと明るいだけのぼんやりした草原に囲まれていて、どちらを向いても、私はもう、すっかりその一つの風景の中に閉ざされて、そこで生き埋めになっているようだった。叫び声を張り上げようにも、細かで透明な砂粒を、びっしり天まで積み上げたような、重過ぎる空気が、私の声のためになど、決して震えてくれそうになかった。
　私は、右手を目の前に掲げた。掌の深い穴の中に、今にも火種は、すっかり埋まりそうだった。左手は、全身を虚しく這い回るだけで、文字の鋲も尽きたようだ。私は、足を揃え、腰を折って、首を突き出し、ピンと伸ばした腕を後ろに撥ねて、鳥の恰好を真似て空を見上げた。「鳥」は何処へ行ったのか。それとも、ただ見過ごしてしまっただけか。それなら、湖の上の煙になって、あの螺旋の細い線の何処かで、翼を拡げているのか。それとも、それは疾っくに、

三角の箱から、水に流されて、線路の下に染み通って行ったのか。私は、両腕を真横に拡げて、少し前屈みで、背中を反り返らせたまま、草の上を全力で走っていた。空気は、本当に砂粒のようで、吸い込むたびに、喉に詰まった。

　右手が、水に濡れてでもいるかのように、スースーと冷たくなっていた。見ると、薄い色の炎に覆われている。左手も見た。左手は、指が真っ黒だ。皮膚から文字をつまみ取るたびに、その墨が付いたに違いない。そして前には、少し先に、草叢にしゃがみ込んでいる二人の姿があって、私の足が草を蹴る音で気付いたのか、二人の首が、揃ってこちらを向いた。二人は笑った。炎を見て笑ったのか。指の真っ黒なのを笑ったのか。それとも、私の後ろの何かを見て笑ったのか。私は、尚も全力で彼らに近付きながら、両腕をデタラメにグルグルと回した。二人の目線は、何処からねっとりとしていて、ビクともしない。つまり、彼らが目を注いでいるのは、私の姿ではない。足を止める訳には行かなかった。もちろん「鳥」への思いからだ。何を彼らは笑っているのか、後ろを振り返るのは無理だった。

　二人は笑いながら、セカセカと立ち上がり、服を脱ぎ始めた。車掌の方が直ぐに裸になって、高校生は、何枚も着重ねていたので、時間が掛かった。車掌がちょっかいを出すと、高校生の笑い声は、愈愈甲高くなって、響き渡って、湖まで届きそうだった。全て脱ぐと、二人は手を繋いで、湖の方に走り出した。

女だとばかり見えた高校生だったが、その裸は、男か女か全く分からなかった。それは、ただすらりと細いだけで、色白でも色黒でもなく、性別を判断する材料を、何一つ見せてくれなかった。

　私は、進路を変えられなかった。変える必要もないのかも知れない。二人の居た所まで辿り着くと、密生した草が、腕を拡げられた二枚の翼のような形に倒れていて、私は、その真ん中の窪みに、腕を拡げたまま、勢いよく倒れ込んだ。草の表面はネバネバしていて、その二枚の草の翼は、吸い付くように私の両腕を掴んだ。腕は呆気なくもげて、体はそのまま丸太のようになって、草の中に突き進むようだった。いや、そうではなかった。腕は、翼を畳むように、硬く強張った背中の上で交差されていたし、草の根元を口一杯に銜え込んで、私は、草の匂いに目をチカチカさせて、俯せになってじっとしていた。では、何がもげたのか。何かがもげた筈だ。私は、草を吐いて、首を右に捻った。大柄な女が、草の上に大きな尻を着けて、揃えた両脚を、私の頭の方に投げ出して来ていた。スカートが捲れていて、白くて肉付きのいい、骨の太そうながっしりした脚は、太腿まで剥き出しだった。真っ直ぐ下ろされた細い両腕は、下腹の辺りで交差していた。長い髪の先と、草の尖端が、風もないのに独りでに絡み合っていた。いや、絡み合うだけでなくて、互いに何か粘液のようなものを出して、殆ど溶け合うようではないか。溶けた髪は、そのまま、草の中に吸い取ら

れて行って、それでも髪は幾らでも伸びて、仕舞いには、草原中の草を、黒く染めてしまうのかも知れない。そんなものは、見たくなかった。首を左に捻ると、小太りの男が、片膝付いて、私の左手を取り、その指を、一本一本、かわりばんこに、丁寧に舐めていた。禿頭の天辺がこちらを向いていて、私は、そのグリグリと動くのを見詰めるばかりだった。

　左手は、男のするに任せるとして、私は、右腕を伸ばし、掌を、女の左脚の脛に擦り付けた。それは、ザラザラしていて、冷たかった。女は、切れ長の大きな目を見開いて、私の方を見たまま、微かな頬笑みを浮かべるような表情を、ずっと変えなかった。炎はまだ、色が薄くて見難いが、うっすらと右手を包んでいる。しかし、それが、女の脚に伝わりそうな気配はなかった。私は、女の脚を擦るのをやめて、その右手を目の前に持って来て、掌の穴を覗いた。掌を一杯に拡げてやっと、肉の奥に微かに火種の色が見えた。左手が塞がっているので、その穴に、窄めた舌をねじ込んでみた。舌の先は肉の奥に突き当たったが、それでも火に届かないのか、少しも熱さは伝わって来なかった。しかし、穴から舌を出すと、その先に小さな火が乗っているようだった。舌を口の中に戻し、私は、その火を、舌の上で転がした。右手の微かな炎は、消えて行った。

　俯せのまま、腹を反り返らせるようにすると、私の体は、草の上を、女の方に滑り出した。私は、右手で、女の左足をそっと持ち上げて、その足の甲に、

舌の先の火の色を乗せようとした。産毛の一本くらいは、溶かしたかも知れない。女は、眉の動きだけで少しだけ吃驚したような顔を作って、ほんの少し上体を反らしたかも知れないが、殆ど姿勢を変えないまま、やはり草の上を滑って、後退った。右手の握力は全くなくなっていて、女の足は、私の手から滑り落ちたが、私もまた、微かに腹を反らせれば、草の上を滑って、またそれを追って行けるのだった。

　そうして、緩やかな弧を描きながら、私達は、少しだけ近付いたり離れたりを繰り返して、草の上をスルスルと滑って、少しだけ窪んだ所に来て、止まった。女はもう逃げられないだろう。しかし何時の間にか、男が、女の背中に抱き付いていて、女の長い首の脇から、小さな皺だらけの黒い顔を覗かせて、私を見て笑っていた。女の足は目の前にあったが、私は、そこに舌を乗せない方が賢明だと考えた。私の左手は、ブヨブヨしていて、眩しい程に真っ白だった。微かに開いた男の口の中は、真っ黒のようでもあったが、よくは見えなかった。私は、男が私の左手に何をしたか、聞いてやろうかと思った。しかし、私が口を開くより先に、男は、我慢し切れなくなったかのように、声を立てて笑い出した。やはり、口の中は真っ黒だった。声は、直ぐに、そこの静けさの中に、吸い取られた。男はまだ、口を開けて、さも笑い声を立てている風だったが、声はもうならなかった。それより私は、コロコロコロと水の流れる音を聞いた。女が尻

を着いている直ぐ脇の地面に、小さな穴が開いていて、そこに、尖った拳のような赤い水が、湧き立っていた。

　そこからの細い流れは、草の影の色を映すのか、多少青味掛かって紫色になって、草の間を、二、三メートル、見え隠れして、そこからすっかり草に埋もれた。その先をずっと、湖まで目で追うと、車掌と高校生が、やっと岸辺の少し手前に達したところだった。その足の先から、クルクル回る白い靴が、空中に跳ね上がった。靴だけは履いたままだったのだ。二人は、素足で銀色の湖面を蹴破って、水の深みへ進んで行った。もっこりとした暗い色の低い水しぶきは幾つも立ったが、どれも彼らの脚の方を向いていた。その内に、水にすっかり体が入って、水に背を向けたり斜めになったりしながら、泳ぎを楽しむようだった。それでも少しずつ、岸から離れて行くのは、はっきりと分かった。水しぶきは、相変わらずで、彼らの首の回りに纏わり付くようで、彼らをしっかり掴まえて離そうとしない、湖の意思のようなものを感じさせた。二人は、湖の真ん真ん中で、抱き合って沈んだ。また、磨かれた鏡のような銀色一色に戻った筈の湖面の、一番手前の辺りに、赤茶けた細い筋が浮いて、くねくねと揺れていた。女の尻の脇から湧き出た水に違いない。しかし、あの赤茶けた色には見覚えがある。線路の下に敷かれてあった石の色だ。それなら水は、先程、私の乗っていた箱から流れ出たものではないか。

水際を駆けていた二人の女は、立ち止まっていた。白いスカートは捲り上げたままだった。項垂れて、耳に手を当てて、湖面からの物音を聞き取ろうとしているようだった。湖面は全く静かに見えた。もうそれよりは、沈んでいないようだった。しかし二人はそこで、湖を挟んで、言葉を交わせるのではないか。それ程に湖は小さくなっていた。尤も、普通なら声の届かない距離だ。静か過ぎる水面を、滑るように、声が響き渡って行くように見えてしまうのだ。

草の匂いに馴染んで、呑気に寝ている場合ではない。私は、飛び起きて、緩やかに下る草原を、何度も足を滑らせそうになりながら、大股で駆けた。しかしそう直ぐに、岸辺に辿り着ける筈もない。二人は、向き合っていて、もう言葉を交わしているかも知れなかった。それを聞き漏らしてはいけない。しかし、私はまだ、透明な砂粒の空気の中に埋もれている。

二人は、必ず鳥について語り合うのだ。いや、ただ彼らの声が、湖の上で一つに混じり合うだけで、その声は、独りでに、鳥について、語り出すのではないか。そうなれば、赤茶けた水に混じって、湖に流れ込んだ「鳥」の形を含む文字は、その語られた中に、溶けて、蒸発するだろう。そして、あの二人の女は、二枚の翼の形に姿を変えて、湖ごと、飛び立とうとするのだ。水の中の生き物もまた、飛びたくて仕方がなくて、その力を、女達は巧みに利用するに違いない。私の目の前で、私抜きで、決してそんな事をさせてはならなかった。

二人は、湖面に向かって、裸足の細い脚を踏み出した。その足の裏の感触が、いきなり私の脳裏に焼き付けられた。遠くの女の動きを目にするだけで、私は、頭の中を、四つの女の足で、グジャグジャに踏み付けられた。頭の中はとても狭くて、次々に現れる足の裏の感触は、どれがどれか、殆ど分からない。それは、分厚いゴムの板の上を歩く感触だった。実際、二人は、水に沈む事なく、水の上を歩いているではないか。水の表面には、微かに白っぽい埃さえ浮いて、それが、風で回っていないだろうか。水面は、真っ黒で、何も映さなかった。二人の体は、磁石のように、みるみる近付いた。私の脚は、草で切られて傷だらけになっていたが、却って、それで逞しさを増し、足の裏から力がこみ上げて来て、足を滑らす不安も消えて、強く地面を蹴る事が出来た。それでも、岸辺までは、まだまだだった。（二〇〇一年八月二十九日）

石器

捲れていたスカートの裾が、何時の間にか、女達の膝の下まで降りていた。スカートは、風を受けた帆のように丸く脹れて、果物のような形になった。湖の上で、空気は真上に向かって流れている。風は、二人の服の上半身の中まで

入り込んで、胸も背中も、腕までも、プックラと脹らませた。
直ぐ側で、男の笑い声が聞こえた。私は、息を切らし、必死で駆けながら、その女達の姿を、男の笑い声が聞こえた。私は、見詰めていたのだろう。私のその変な顔を、笑ったのだろう。男は、私の斜め前に居た。小太りの彼は、暗い色のスーツを着て、私の方に脹れた腹を突き出して、突っ立っていた。それなのに、ずっと、走っている私の斜め前から、動かなかった。
いきなり、右足の爪先が、重く柔らかいものを蹴った。草は、腰が左に捩れて、私は、右腕だけを前に突き出して、そこに倒れ込んだ。草は、私の体を柔らかく受け止めてくれた。右手は、その勢いで草を掻き分けていて、草の間から、湖が見えた。その視界を遮ろうとするように、その直ぐ下に、指を拡げた右手の甲があった。手の甲には、穴が開いていて、その中に、濃い紫の空の色が見えた。火種は、右手を貫通していたのだ。私は、突っ張ったままの腕を引き寄せて、その穴に目を当てて、そこから、湖の上の二人の女を覗いた。そうして狙いを定め、今度は、そこに口を当てて、そこに息を吹き込んだ。掌から、小さな火が噴き上がって、それは棒のようになって、真っ直ぐ湖の方に伸びた。それが、二人の女まで届くと、白い服が、その白く脹れたまま、高い炎を纏った。
炎は、湖から外に緩やかに脹れながら、反り返って、翼の形を描き出した。
男の声が、後ろの斜め上から聞こえた。今度は、何か怒っているように聞こ

えた。私は俯せのまま、首を左にいっぱいに捻って、そちらを見た。男の足元に、シミと吹き出物だらけの、パンパンに脹れた白い腹が横たわっていた。下は何も着けていない。私が蹴ったのは、その大柄な孕み女の腹に違いなかった。子供でも産み落とすように、股の間から、白っぽい丸っこい塊がヌルリと出た。それは、カサコソと草を擦り、そこの、草に埋もれ掛けた赤茶けた水の流れに、滑り落ちて行った。腹も、その周りの草も、ただジッと動かなくなって、それ以上、もう何も出て来そうになかったので、私はまた、湖の方を向いた。炎は、先程より少し青味を増して、薄っぺらくなって、透き通るようだった。直ぐにも立ち上がるべきなのに、体が重くてどうにも出来ない。

暫くそうしていると、湖岸の一番手前に、白いものが頭を出して、直ぐまた沈んだ。真っ白なナマズのようだった。それを見て、私は、急に身軽な感じがして、立ち上がる事が出来た。男がまた、後ろで笑い出した。何を笑うのか。私の可笑しな顔なら、見えない筈だ。私は振り返って、男を睨み付けた。男の足元の女の体は、すっかり色が変わっていて、死骸だと直ぐに分かった。男は、笑うのを已め、私の顔を、目を真ん丸にして見詰めて、それから、急に咳き込んで止まらなくなった。そこに跪いて、男は、血の混じった墨を、トクトクとそこに吐いた。

私はまた、湖に向かって駆けていた。男の吐いた墨は、赤茶けた水に流れ込

んで、もう私より、大分先を行っているのではないか。それなら、それを、追い掛けなければならない。そんなものにまで、先を越されていたなら、どうしようもない。走っている内に、足元がヌルヌルしていて、少しも草を蹴る音がしないのに、気付いていた。足元を見ると、先程の女の死骸が、右と左に真っ二つになっていて、そこに私の脚が突き刺さって、脛から下は、女の腹に埋まっていた。

　また、斜め前に男が立っていた。男は近付いて来て、私に、掌大の、薄い石器を渡した。私は、足を止めないまま、腕をゴムのように延ばして、その石器で、女の肉を、少しずつ、削ぎ落として行った。始めの内は、まどろっこしい程に、石器を思う存分振り立てていられたが、次第に肉の量が減って、足の形に、肉を残さなければならないと思い始めると、石器を持った手が、宙をさまようが時間が長くなるのだった。まだまだ何時もの足に比べれば、肉はずっと厚かったが、もう已めるべきだった。しかし、肉片のこびり付いた石器は、どうしたらいいのか。無闇に投げ捨てたら、そこの地面を傷付けて、その傷口が腐って、それが草原の地面全体に及んで、草を全て枯らしてしまうように思えた。

　木の靴を見付けた。高校生が履いていたものだ。岸辺は直ぐそこだった。私は足を止めた。余裕を持って、肉を残しておいたと思ったが、やはり腐った肉

では、直ぐに磨り減ってしまうのだ、足は踵だけで、その先はなくなっていた。立っていられるのが不思議だ。

二人の女は、湖の真ん中で、向き合って立ち尽くしている。二人を包んでいる炎が邪魔で、それ以上、近付けないのだろうか。二人は、少し股を開いて、踏ん張るような姿勢で、体を左右に揺らし出した。それで炎を揺らす積もりなら、炎は大き過ぎて、殆ど効果はないようだ。ただ、二人の足元で、何も映さなかった黒い湖面が、少しずつ、溶けたゴムのように光り出し、白い二人の姿を逆さまに映した。その影の周りを何かが動いているように見えるのは、水の中に生き物が泳ぎ回っているからだろうか。二人の体が、少しずつ沈み始めた。

私は、傷付かないように、唇を思い切り拡げて、石器の刃の側を銜え、高校生の靴を拾い上げた。手にして見ると、その表面は、木というより、真っ白な石の表面のようだ。私はそれを、湖に向かって、思い切り投げた。それは、クルクル回りながら、ヒュルヒュルと間の抜けたような音を響かせて、女よりずっと手前に落ちて、そこを斜めに転がって裏返しになって止まった。その直ぐ手前の水面が、いかにもゴムのようにパックリ開いて、そこから白いナマズの頭が覗いて、その靴に向かって、口をぱくつかせた。私は、銜えていた石器を素早く掴んで、それに向かって投げた。石ならば、真っ直ぐそこに飛んで行くと思ったが、まるで、大きな花びらのように、フラフラと宙に舞い上がるの

だった。私は、今度は、車掌の黒い靴を見付け、それを拾い上げて、直ぐに投げた。投げた瞬間に、それは必ず命中するように思えた。クルクル回りながら、その通りに、それはナマズの頭を直撃した。その白い塊は、溶けたようになって震え出し、パックリ開いていた裂け目を歪ませ、それが波紋のように拡がって、湖全体を揺らした。それでも湖面はまだ、ゴムのようなのだろうか。女の足が止まっていては、それが私の頭の中を踏み付ける事も出来ず、その足の裏の感触も、伝わりようがない。しかし、女の体は、少しずつでも、明らかに沈んで行っていた。湖面がそこで幾ら傾いても、もう二人の腰から下は見えなかった。炎は、頭の天辺から真っ直ぐ上に、細々と伸び上がるだけで、翼の形は見る影もない。

湖の上は、何もなくなって、ポッカリと虚ろな感じに見えた。薄紫の螺旋の線も見当たらなかった。その何もない所で、鷲の喉に、花びらのような石器が、突き刺さった。もうそのずっと前に、鷲は、疾っくに死んでいて、そのまま空中に留まっていたのかも知れなかった。血は流れなかったし、翼を拡げたまま、剥製のように動かなかった。しかし、喉に刺さった石の重みが利いているのか、頭を下に向けて、まるで空中に吊された絵のように、ゆるゆると降りて来るようだった。

私は、もう一足の高校生の靴を見付けて、拾い上げた。やはりその表面も、

真っ白な石のようになった。鷲が、絵の中から飛び出したように、急降下していないだろうか。そしてそれは、一度旋回した後は、真っ直ぐ、私の手の中のものに、狙いを定めていないだろうか。鷲の姿は、みるみる近付いた。先に、翼が風を切る音が、真っ直ぐ落ちて来た。急いで、私は、靴を投げた。それは音もなく消えた。見ると、直ぐ湖面に乗っていたもう一足も見当たらない。湖は、大きく揺れてはいたが、すっかり元の銀色の水面に戻っていた。消えた靴を追うように、鷲の姿も、そこへ消えて行った。その瞬間、バチンという重く鈍い音が短く響いて、そこから何かが弾き出された。それは直ぐ、恐らくその響きを追い越して、私の頭の上を飛び去った。後ろを振り返って目で追って、やっとそれが、喉に刺さっていた石器だと分かった。それは、草原の一番高い所を越えて、空の中に消えて行った。

　両脚の踵が、ズキズキ痛み出した。踵だけで立っているにも、限界がありそうだ。私は、車掌が脱ぎ捨てた靴を探した。直ぐに見付かったが、それは、よれよれの革靴で、大きな穴が開いていて、そこを太い草の根元が突き抜けていた。触ると、表面だけは革のように見える薄い膜で、それが直ぐに破れて、中はもうすっかり泥のようだった。私は、垂直に脚の骨を突き上がってくる痛みに促されるように、前に進むしかなかった。

　湖面の揺れは、少しずつ収まって行くようだった。そこにまだ、二人の女の

姿が、見え隠れしていた。そこがすっかり水なら、どうして沈んでしまわないのか。それだけの深さしかないのか。愈愈私は、水際に踏み込んだ。しかし、私が足を出すと、その分だけ、水は後退るのだった。私は、水を追って、前に進んだ。私が止まっても、水はそのまま後退ってしまうかも知れず、取り残されないためにも、足を止める訳にはいかなかった。

水が引いて、剥き出しになって行く湖底は、何処も真っ白な泥で覆われていた。尖った脚は、そこに膝の直ぐ下辺りまで突き刺さったが、軽く抜く事が出来た。見渡すと、私が居るのは、高い草原にドーナツ状に取り囲まれた、真っ白な泥の地面の、擂り鉢型の巨大な窪みの中だった。それなら、それだけ、湖は水位を下げて、ちっぽけな姿になっていなければならない筈が、私がそこへ踏み込もうとする前と、少しも変わらない量の、水を湛えているようだった。しかし、それは錯覚かも知れない。揺れはすっかり収まって、その水面は、また鏡のように静まり返っていて、二人の女の姿も消えている。それは何処か、擂り鉢型の地形に収まらずに、宙に浮いているようではないか。

草原と白い泥の地面の境目に、男と女が、こちらを向いて、並んで立っているのが見えた。二人が、横にぴったり並んでいるのを見るのは、初めてだ。背の高さの違いが一目瞭然で、男の禿頭の天辺が、女の胸の下の辺りだった。女の方が、倍近く大柄なのだ。二人とも無表情で立ち尽くすままだったが、そこ

には風があって、女の長い豊かな髪も、男の少ししかない髪も、同じように、フワフワと持ち上がっていた。男は、何も持たず、気を付けの姿勢だったが、女は、胸の前で両掌を合わせて、そこに何かを乗せていた。それは、私が拾い上げた高校生の靴ではないだろうか。少なくとも、その表面の色や質感はそっくりだ。その掌に鷺が舞い降りて、しゃがみ込んだ。それならそれは、卵に違いない。私が、拾い上げて水に投げたのも、卵だったかも知れない。木の靴が、あんな色である筈がない。私は、靴を拾おうとして、その脇に隠れていた鷺の卵を拾い上げていたのか。二人は、くるりと背を向けて、草原の斜面を、ゆっくり上って行った。二人の立っていた所に、足跡が、四つ揃って並んでいたが、その脇に、石器が、斜めに地面に突き刺さっていた。男のポケットに穴が開いていて、落として行ったのか。直ぐにもそれを抜き取らなければ、地面はそこからズンズン裂けて、ここの擂り鉢型の地形が、ビリビリに破かれてしまうだろう。しかし、戻ろうにも、私は、脚が抜けなくなってた。後ろを振り返ると、湖の水は全て失われていて、擂り鉢の一番底で、半分泥に埋もれている、卵の形の大きな白い塊が、目に入った。まるで、それで栓がされているようで、もしそれを抜けば、そこから地下に全て流れ込んだ水が、そこからまた噴き出しそうだった。その色や質感は、女が産み落とした、ナマズのような白い塊に違いなかった。卵の形をしていたが、それは私の目を欺くためなのか、いかにも

作り物といった感じがした。

それとも、それは、私がそう感じるだけで、やはり卵なのかも知れない。もし卵なら、「鳥」の形を含んだ文字が、その中に、詰まっていて欲しいのだが。

（二〇〇一年九月一日）

*　　　*　　　*

形跡

細長く尖った三角の高い塔のある建物の中で、私は、生まれて直ぐ、親類縁者でもない者達に祝福されながら、真鍮で出来た、立方体の小さな箱に入れられた。そのまま成長して、二十年経てば、私は、斑模様の灰色の、砂利石のように硬い、見事な卵形の塊になる筈だった。二十年なんて、あっと言うまだ。四十年、或いは、中には、六十年、八十年と、その箱に留まって、全く惚れ惚れするような、卵形以外の、何ものでもない物になる者もいる。尤も、私の目には、四十年の人は、這い回るネズミのように見えたし、六十年の人は、巨大な雪の結晶のように見えたし、八十年の人は、ずんぐりした壺に見えた。しかし、私を箱詰めのした人達の目には、それらはどれも、全くただ賞賛するしか

ない程に、見事な卵形に見えるらしい。どうせ何かを賞賛するなら、安心して、ただ賞賛するしかないような物を、賞賛したいのだろう。

　しかし、私の場合、私の入った箱の出来が悪かったのか、私の出来が悪かったのか、それとも他に何か手違いがあったのか、私は、十年にも満たない内に、その箱の居心地に、説明しようのない違和感を覚えた。説明しようがないと言うより、違和感に見舞われる度に、それは、それまでと違う別の違和感で、それを捉えようとしても、その別であるという感じの記憶だけが強く頭に残って、その違和感自体は、直に私の頭の中から抜け落ちてしまうのだった。その結果、私は箱の中に隙間なくぴったり収まっているのだから、その箱の中が、中身がびっしり詰まっていて、その外が、空っぽであるように、思えていい筈が、びっしりそこに詰まった私が空っぽで、何もないその外が、何かでびっしり詰まっているように、思えてしまうのだった。

　私と同じ年に箱詰めにされた者達とは、大体何処へ行くのも一緒で、特に同じ日に箱詰めにされた何人かの姿は、私の頭の中に、焼き付けられて、私の脳みそを、その型に嵌めてしまうのではないかと思える程、何時も何時も、それを目の当たりにしていなければならなかった。まだ何人か居ただけ、マシだった。もしそれが一人だったら、私の脳みそは、本当に、寸分違わず、そいつの形になっていただろう。そして、何時見ても、その何人かは、二つの円らなマ

ナコを並べて、いかにも健気そうに、真っ直ぐ天上を見上げていた。箱は皆大体同じ造りだったが、そこに一つだけ、おのおの色も形も違う小さな星の形の窓が開いていて、そこからだけ、外が見られた。別に恐い監視が付いている訳でもない。私のように、その小窓に目玉を擦り付けて、キョロキョロ辺りを見回そうと思えば、幾らでも出来た筈だ。しかも、その奥まったままのマナコは、キラキラしていて、それが私には、彼らが嬉しがっているように見えて、私は、声も掛けられないのだった。彼らの間では、私には意味不明の掛け声にしか聞こえない言葉が、日によっては耳障りな程、頻繁に飛び交っていた。しかし、それもよくは分からない。箱詰めにされた者同士で、一体、言葉が交わせるものだろうか。或いは、その声は、彼ら一人一人の後見人のような者達によって、交わされていたのかも知れない。私の後見人だけが、ひどく無口だったのか。ただ、彼らはその箱の中で、時々、いかにも誇らしげに身震いする。彼らの体が変化して、少しずつ卵形に近付くのは、その瞬間だ。それは少しだけ、私をホッとさせる。脳みその嵌められた型が、その時だけ少し緩むのだから。

　そして、彼らは、その瞬間、明らかに、選ばれた者のようだった。それもただ選ばれたのではない。選ばれた事に誇りを持てる事によって、選ばれたに違いない。その中で、私だけは違った。一応、彼らと揃えて並べられているなら、箱詰めされるに関しては、確かに同じように選ばれはしただろう。しかし、そ

れに誇りを持つ事に関しては、私は、全く選ばれていない。私には、自ら誇るべき何ものもないので、その替わりに、彼らを観察出来てしまうのだ。それで、私は、私が箱に入っているのは、何かの間違いではないかと、考えるようになった。いや、私だけが彼らと違うなら、それで諦めもつく。それはそれだけの事だ（あれはあれ、これはこれ、違って当たり前、何処にでもある話だ）。しかし、私はそこで、私が選ばれていないなら、私と一緒に箱詰めにされている者達全てが、少しも選ばれていないのではないか、という考えに取り付かれてのだった。私達は、皆、選ばれ損なったので、こうして一緒くたにされて、箱詰めにされているのではないか。箱に入れられない事こそ、選ばれる事ではないか。選ばれた者が、いきなり箱に入れられたりする筈がない。箱詰めにされるようなものは、大体他に使い途がないから、邪魔にならないように箱詰めにされるのだ。

　しかし、箱詰めされる者が、そうでない者よりずっと数が少なくて、しかもそこにそうしていれば、将来が約束されているとなれば、箱詰めされた者の方が、選ばれたと考えるのが自然ではないか。いや、それは、箱の中と箱の外しか見ない者の理屈だ。この世界には、箱の他に、もっとずっと沢山の事があって、そのあれやこれやに、様々なものが詰め込まれているのではないか。そして、誰であろうと、生まれてしまったからには、何かに詰め込まれるしかない

のだ。箱詰めされた者が、選ばれた者なら、他のものも、皆それぞれに選ばれているのだ。

　ただ、そのような世界にあってさえ、そのあれやこれやから見放されて、その外に投げ出されてしまうしかないとしたら、それこそ稀な事であって、そのような者こそ、その数の少なさからして、選ばれた者ではないか。それで、彼らが、どれ程自らの運命を呪ったとしても、実は、彼らこそ、大変な運に恵まれた者達ではないか。それでも彼らは、私達が灰色の斑模様の卵形の塊となるように、いずれは、おのおの彼ら独自の形を、身に着けるに違いない。そして、それは、世界と同じ大きさか、そうでなければ、世界と同じ重さを持つのではないか。つまり彼らは、世界全体の中に、詰め込まれたのだ。

　いや、生まれて来たからと言って、それが、何かに詰め込まれなければならないと、決まっている訳でもないだろう。何でもかんでも、何処かに詰め込まれる筈だと考えるのは、私のような、いきなり詰め込まれてしまった者の理屈でしかない。詰め込まれる事など、始めから少しも期待されずに、生まれっぱなしにされる者達も、沢山居るに違いない。彼らを何処にどう詰め込んだところで、或る形に収まって行くような事はない。彼らは、始めから真っ白で、始めから真っ白なものは、真っ白なままだ。生まれた時は、皆、真っ白なようだが、実は、そうではなくて、その白の中にどのようにか陰が差しているものと、

そうでないものがあり、その陰が差しているものを見分けて、それを所定の何処かに詰め込めば、色々な色や形のものになって行く。一方、陰を含まない白だけのものは、何もない所に放り出される。いや、始めからそこが彼らの行く先なのだから、放り出されるという言い方はおかしい。ただ、その定め通りにそこに赴くだけだ。具体的には、彼らは空中高く運び上げられて、そこから、ばら撒かれる。それは別に彼らが蔑ろにされているのではなく、彼らにとっては、それが最良の事なのだ。もちろん、幾ら箱の中に違和感を覚えるからと言って、私としては、そんな風にされるのは、死んでも願い下げだ。

さて、その空中に飛び出した彼らは、陽の光を求めて、南に向かって少しずつ降りて行く。いや、必ずしもそうではない。彼らは風任せに何処へでも行く。陽の光に拘っているのは私で、私は、南に向かって飛んで行く者達の姿を、箱の中からずっと目で追っていた。尤もその時には、それが南だとは知らなかった。なぜか私達は、何処に行っても、大抵、陽の光が差して来る方を向かされた。そして、私は、彼らが、その南の空に消えて行くのを、何時もぼんやりと見送っていた。

私は、日を追うごとに、どうにも我慢が出来なくなって行った。箱から出たかった。それで私は、「とにかく、ここから出たい、どうしたら、ここから出られるのか」と言う意味の事を、声に出して、それを、意味不明の声が飛び交

っている中に、放り込んだ。すると、声が返って来た。それは誰の声だったろう。私の声とは違うようだったが、私の声であるしかなさそうだった。私の放り込んだ声が、誰かに加工されて、戻されたようだった。

「何時でも、どのようにでも、お前が出たいと思えば出られる筈だ。始めから、ずっとそうだったろう。そんな事、知らない方がおかしいんじゃないか。」

　声は、そのような事を、私に伝えようとしているように、私には聞こえた。それとも、私が勝手に、そう聞き取っただけか。実際、箱から出ようとしてみれば、直ぐにはっきりする。私は、箱から外に出た。意味不明の声が、私の周りの至る所で、ナマで飛び交っていた。声はどれも、溶け掛けの飴玉のような、ドロリとした表面の大きな丸い塊のようだった。私は、全く声を失った。いや、声を出そうとすれば、出たかも知れない。しかしそれは、恐らくは、薄い紙っぺらのようでしかなくて、忽ちドロドロの飴玉によって、揉みくちゃにされて、消されてしまうに違いなかった。いや、それだけでは、済まなくて、それらの声が私を見付け、私に襲い掛かって、私もまた揉みくちゃにされるに違いないのだ。こんな所で、先程の私の声が、加工されたり出来る筈がない。戻って来たのは、私の声ではなかったのだ。では、誰の声だったのか。巨大な飴玉のような声とも、似ても似つかない。それなら、空耳であったと考えるしかない。私はまた、箱に戻った。

暗く冷たい空が見上げられた。南の空ではなかった。周りを見回しても、何時も一緒に並んでいた箱が、見当たらない。そのせいかどうか、私は、私の姿も、私が入っている筈の箱も、見る事が出来なかった。果たして、私が箱の中に収まっているかどうか、分からないし、そもそもその前に、一度、箱から出られたかどうかさえ、怪しくなって来た。ただ、私は、何処へでも行けた。と言うより、私は、何処だか分からない所を、何の障害にも当たらずに、水に流されて行くように、ズンズンと運ばれて行っていた。別に行きたい所がある訳ではないので、それで、何処へでも行けている気分になれるのだ。そして、私は、そこで目にするものの形の中に、一々、私自らの形を、見て取る事が出来た。

見えないだけで、私は、箱の中に居るのかも知れない。そう思えて来た。箱の中に居ながら、私の形だけは、箱の外なのだ。箱の中には居ても、もう卵形にはなって行かず、箱はただ、私を守るだけだ。それなら、私は、自由と安全を、同時に手に入れたようなものではないか。私は有頂天になって、クルクル回る形になった。同期の箱詰めにされた者達が、遠くで並んでいるのが目に入った。そこは、禿げ山の硬い岩の斜面のような所だった。すると、遠回りながらも、私は、その彼らの居る所に、向かわされているのが分かった。私は、そこへは行きたくなかったが、どうにも出来ず、ただ流されて行くだけだった。

目に入るものもなく、私は、私の形を探り倦ねた。いざ、そこに辿り着いて見ると、まるで禿げ山全体を圧し潰すように、巨大な多面体の建物が、そこに乗っかっていた。私が近付くと、それはその場でグルグル回り出し、私は、その下敷きになって、その中に導かれた。中では、私と同じ位の大きさに思える多面体の連中が、忙しく動き回っていた。そこでやっと私は、自らの姿を顧みる事が出来た。私もまた、多面体だった。箱はなくなっていた。それとも、ただ周りに合わせて、多面体になった積もりでいるだけか。そうしてただ立ち尽くして、自らの体を眺め回す内に、私の多面体は、その面を増やし、形を整え、そのまま行けば、全くの球体になってしまいそうだった。他の多面体は、建物の中をグルグル回って、互いにぶつかり合っていた。恐らくそれで、多面体を保っているのだ。彼らも、私のようにジッとしていたら、球体になってしまうのではないか。私もまた、彼らに混じって、動き回る事にした。

南の陽の光の匂いのする、真っ白な多面体が、私にぶつかって来た。私は直ぐに話し掛けた。

「やっぱり、私達は、グルグル回ってなくちゃいけないんですよね。」

相手はただ、微笑むだけだった。私は自らを顧みた。自分では、少しはまた、ゴツゴツした多面体に戻っているように思えたが、ハタ目からは、殆ど球体の

ように見られたとしても、仕方がないようでもあった。私は、その真っ白な多面体に付いて回り、それを見倣って、少しでも多く動き回ろうとしたところが、どうやらそれは、私が多面体でないのを、他の多面体に晒すだけのようだった。他の多面体は、もう遠くから、私を避けて、私に当たらないように気を付けているようだった。しかし、私の姿は、始めから彼らの目に晒されていた筈ではないか。どうしてそれが、私を避けるようになったのか。私はそれを、白い多面体に尋ねようと思い、そちらに近付いた。白い多面体は、私の先に立って、私が多面体でないのを言い触らしていた。

　私は思い切って、その先に立った。するとそこには、全く見た事もない形をしたものがいた。濃い灰色で、斑に、うっすらと赤が混じっていた。そこに真っ白なだけの白が、絡み付いていた。白には形はなかった。それが多面体であったような形跡も、全くなかった。しかし、それが、私が付いて回った白い多面体であったのは、その匂いからして明らかだった。二つは、その捉え所のない姿を、勝ち誇ったように私に見せ付けた。多面体になる事など、私にとって、全く無意味だったのだ。と言って、このままツルツルの球体になってしまったら、私は、何処で何をしようと、ただツルリと滑るだけで、他の何かと係わりを持てなくなってしまうだろう。それならせめて、振り出しに戻って、卵形になるべきではないか。しかしそれは、箱を失っていては、無理だ。いや、周り

の多面体からすれば、私は、ずっと卵形に見えていたに違いない。少なくとも、卵形になろうとしているものには、見えていただろう。彼らが多面体を保つためには、そんな形をしたものは、有害であるしかない。私は、そこから追い出された。(二〇〇二年九月三日)

＊　＊　＊

新居

私達は、蝋で出来た、ピラミッドの形の建物の中で、体をぴったり寄せ合って、お祈りをしていた。

私は、その女性に家を建てて貰わなければならなかった。彼女は、そこそこ売れっ子の建築家で、一方、私は、一文無しだった。或る日、私が、傷を負って首を激しく捩らせている巨大な灰色の斑の馬の背中に、傾いた豪華客船を乗っけたような建物の前を、フラフラと通り掛かった時、その建物の所有者が、周りの住民達から袋叩きに遭っていて、側に植わっていた椎の木の匂いに頭がクラクラしてよく憶えていないのだが、そこで私は、何事かボソボソ呟いたらしい。住民達の言い分は、その建物が、周りの景観を破壊し、それを見ただけ

で吐き気を催すし、馬の脚によじ登ろうとした自分らの子供達が、何人も骨を折っている、だから、速やかに取り壊せ、と言うものだった。私は、それに、反論したらしい。すると、彼らは、一斉に、驚きの表情を私に向け、その場をコソコソと立ち去ったのだった。

その建物を設計したのが彼女で、その時の事を、その建物の所有者から聞かされたらしい。それで、私がベンチで日向ぼっこしているところに、彼女がやって来て、私にお礼を言った。ついでに彼女は、私が何と言ったか聞きたがったが、私は忘れてしまっていて、椎の木の匂いを嗅げば思い出すかも知れないと思い、二人で、その建物の前まで行って、そこで、思い出した事を、彼女の耳にボソボソと呟いた。それもまた、私は忘れてしまったのだが、彼女は、私の言葉に痛く感激し、私は、タダで彼女に家を建てて貰える事になったのだった。

生来病弱でもあり、歳も歳だし、これ以上、道端の残飯を巡って、烏と野良犬相手に、生存競争に憂き身をやつすような境遇には、身を置きたくなかった。何としても、彼女の好意に縋り付いて、一戸建ての主になりたいものだ。

だから、私は、それ以来、彼女の言いなりだった。例えば、冬の寒い日に、湖が幾つもある大きな公園に呼び出されて、その冷たい湖で裸になって沐浴する彼女を、彼女の服を抱えて、寒風吹き荒ぶ中、ずっと待っていなければなら

なかった。公園の管理者に見付かれば、公衆の面前で裸になったという事で、必ず警察に通報される。その見張り役のようなものだった。彼女は、全く、冷水フェチで、冬は殆ど仕事そっちのけで、冷たい水を求めて、あちこち飛び回っていた。雪一色の北の地方に出掛けて行って、氷の張った川に穴を開け、やはり素っ裸になって、そこから水に潜って、魚を素手で獲ったりする。私はまた、彼女の服を抱えて、その穴の前で、長い時間、立ち尽くすのだった。私は、元々寒がりだし、脚はすっかり感覚がなくなって動かなくなるし、恐らく、彼女より私の方が、ずっと寒い思いをしたに違いない。彼女はと言えば、独りで、顔を上気させ、嬉しさいっぱいで目をキラキラさせて、水の中から、飛び出て来るのだった。

　さて、その黄金のシーズンが終わると、彼女は、私に、私の家のイメージを得たいので、今は使われていない古井戸の底で、四週間、ジッとしていてくれないかと、言う。

「井戸の底でじっとしていられる男でなければ住めないような家をイメージしたいの。それで、あなたはにそこで、海の底に沈んでいる自分をずっと想像していて欲しいの。でもその海は、実は干上がっているのね。あなたはだから、喉がカラカラで、それを忘れるために、冷たい井戸の底に居る自分を想像しているの。で、その井戸は、もう千年も前に干上がった海の底に掘られていて、

そこは嘗てほんの何十年かの短い間だけど、都市が出来て栄えたんだけど、今はもう廃墟さえなくて、あなたは、フラフラとその都市に迷い込んで来て、そこでたまたま見掛けた若い女の事を忘れられなくて、都市が滅んでも、その女の事さえ考えていれば、あなたは何時までも、その井戸の底で、生き延びていられるのね。でも、実は、都市は滅んでなんかいなくて、女もまだ若いままで、それなのにあなたは、誰にも知られずに井戸の底に突き落とされてしまったの。で、誰に突き落とされたと思う？　でも、井戸の底のあなたは、とても、そんなところまで、考えが及ばなくて、一体何を考えていいのかも浮かばなくて、ブルブル震えるしかないのね。でもただ震えてても仕方ないと思って、あなたはそこで、ずっと逆立ちばかりしているの。で、時々、天と地が逆さまになったような気分になって、井戸の底から空に向かって落ちて行く感じがするのね。で、あなたは頭が凄くスッキリして来て、もう自分は疾っくに死んでるんだって思えて来るの。きっとそれは正しいんだけど、でもまだ、死ぬ訳にはいかなくて、だからあなたは井戸の底に居るの。だって、あなたはひどい殺され方をしたんだもん。」

……だそうだ。

朝と夕、彼女は、日替わりで何種類かの生野菜と、袋詰めにされた、何だか教えてくれない動物の血を、黙って、井戸に投げ込む。私は、袋の端を歯で噛

み切って、小さな穴を開け、そこから血をチューチュー一気に吸うしかない。生野菜も、お腹の調子が悪くても、出来るだけ早く、残さず食べなければならない。残したままにしたり、血を飛び散らせたりして、それが腐って異臭を放ったりしたら、かなわない。

途中で数えるのをやめたので、私には分からないが、どうやら四週間経ったようで、太いロープが下りて来て、私は、それを腰に結んで、引き上げられた。私の背丈は、半分くらいに縮んでいて、プックリ肉を付けて、肌は抜けるように真っ白で、体毛も全て抜け落ちて、スベスベだった。その自らの姿を見回して、それから、彼女の方を向くと、急に、視力が落ちて、５センチくらい先までしか見えなくなった。それでも、私は、別に何とも思わなかったし、別に何も言わなかった。逆に彼女の方から、「実は、白状するんだけど…」と、すまなそうでありながら、ウキウキした調子で、言い出された。私は、何とか言う特殊な液体を、前もって、井戸の中に入れておいたのだそうだ。私は、背丈以上に手足が恐ろしく短くなっていて、独りでは、コロコロ転がる事しか出来ず、彼女に抱き抱えられて、彼女の仕事先からプライベートまで、あちこち引き回された。身体はほんの少しずつしか戻らなかったが、視力だけはグングン回復して、前よりずっと、遠くの細かい所まで、見えるようになった。しかし、私には明らかに見え過ぎで、見たくもないものばかり見えて来る。大体それは、泥沼に

足を取られている人間と、それに手を差し伸べる振りをして、黙ってそれを見ているだけの人間だった。実際、直ぐ側なのだから、手は届くし、足を取られている人間が、羽根のように軽いのも分かっている。それなのに、わざわざ間近で、ただ助ける振りをするのは、その苦しむ姿をじっくり観察したいからだ。私に、始めからちゃんと見たいものがあれば、もっとマシなものが見られただろうか。

さてそうして、例の傾いた豪華客船の中の一室で、工場から寮に帰って行く女工さん達を見下ろしながら、彼女は、やっと私の家の形が決まった事を、私に告げた。スケッチも何枚か見せて貰った。それは自転車の形で、私はそれ以来、五月の爽やかな風を切って、輝くような真っ白な服を着て、自転車で草原の緩い坂を降りて行く、色の着いた白日夢に取り憑かれた。

彼女は、複雑そうな大きな仕事を抱えていて、とても忙しかった。当然そちらが優先されて、私の自転車の家は、なかなか先に進まなかった。それでも贅沢は言うまい。順番が回って来るのを待てば、済む事だ。しかし、彼女はどうも、私の様子を、そうは取らなかった。私が、白日夢に耽っているのが、待ち切れずに駄々をこねているように、映ったらしい。

それで私は、この、蝋で出来たピラミッドの建物に連れて来られたのだ。彼女によると、ここは彼女が最初に設計したもので、しかも殆どタダで請け負っ

たのだと言う。何でも、彼女が若い頃、重い病に罹って入院していた時に、今はこのピラミッドの所有者が、病棟の隣のビルの屋上で、毎日のように、合唱団の練習の指揮をしていて、その合唱の声は聞こえて来なかったが、その指揮する姿を、彼女がずっと眺めている内に、病気が治ってしまったのだそうだ。それで、まだ彼女は駆け出しの建築家で、今のように余裕などなかったのだが、その合唱団のために、ただ同然で、建物を設計したのだそうだ。

　私は、その合唱団に入れられた。とても規律が厳しくて、入ったその日からもう、常に音楽の事を考えていなければならないのだった。それも、ただ音楽に関係のある事を考えていればいいのではなくて、例えば、ヴァイオリンについてなら、ヴァイオリンのあの形を思い浮かべながら、その音を心の中で鳴らしてみる、などと言う事は、団員としては、全くあるまじき行為なのだ。なぜなら、ヴァイオリンの形は、音楽ではないのだから。ただ幾ら気を付けていても、どんなベテランでも、一日一度は、必ず誤りを犯す事が知られていて、彼らは、練習の終わりに、それを自己申告して、その日の誤りを償わなければならなかった。償いのための歌が、音楽以外の何を考えてしまったかに応じて、細かく決められていて、それを所定の回数だけ歌わなければならなかった。

　私は、当然の事ながら、自転車の事ばかりが頭に浮かんでしまう。たまに音楽が頭の中で鳴っても、それは自転車の車輪が回る音に音程が付いたようなも

のだった。それでも私は、自己申告せずにいた。他の団員達は、必ずと言っていい程、音楽そのものでないにしろ、何か音楽に纏わる事を考えてしまって、それを、さも、少なくとも私の目には誇らしげに、大仰な身振りで、皆の前で、打ち明けるのだったし、それを聞かされる者達も、それに同情の眼差しを送るのだった。そんな雰囲気の中で、自転車などという、楽器でも何でもない、音楽とまるで関係のない事を思い浮かべてしまうような、おぞましい行為を、申告する勇気はなかった。

　或る日、海の向こうの、高名な歌手の死が知らされた。その人は、世界に合唱を広め、人々の尊敬を集めていた。一日が終わり、土手の上から、河原を見下ろしていた時、突然その人の耳の上にトンボが留まり、羽音を鳴らした。その人は、その音に驚いて死んだのだった。その羽音をその人の耳から取り除き、その人の耳を浄めるために、私達は、三日三晩その人の死んだ耳に向かって、お祈りの歌を歌い続けた。三日三晩は、私達の体力の限界に過ぎず、その人の耳から、トンボの羽音を取り除くには、その何十倍ものお祈りの合唱が必要で、一日休みを置いては、私達は歌い続けた。もちろん私達だけでなく、世界中でそれは行われた。トンボの羽音による死に対して、それを救うには、どれだけ歌われなければならないかも、予め定められていた。それを世界中の合唱団が、忠実に行っているだけだった。

　私は、恐ろしくなった。毎日、心の中で、自転車の車輪の音を鳴らしている私は、どれ程、自分の耳が穢れているか分からない。私は、合唱団を抜けたかったが、彼女の手前、それは、とても出来ない。いや、私は寧ろ、その音によって、このピラミッドから出られなくなっているのではないか。私は、口をパクパクさせているだけだった。もし声を出せば、忽ち音程の狂いを聞き咎められ、私の悪癖がバレてしまうに違いないからだ。ただしかし、そうしてビクビクしていられるからこそ、何とか私は、その音の脅威から身を避けていられるのだ。もし、ここを出たら、私に、その音から自らを守るどんな術があるだろう。私は、自転車の車輪の回る音に、脳みそをズタズタに切り裂かれるのではないか。ここに居てさえ、その音は、衰えるどころか、私の頭の中で、勢いを増しているのだ。それなら私は、悪癖がバレる事と、ここに居られなくなる事の両方にビクビクしながら、ずっとここに居るしかないのだ。もう新居を見る事もないだろう。それとも、その新居に移り住めば、自転車の車輪の音は、頭から消えてくれるだろうか。いや、たとえそうなっても、その新居が立てる、自転車の車輪のような音そのものを、聞かなければならなくなって、耳は穢れて、忽ち、私は、命を落とすだろう。（二〇〇一年九月五日）

*

*

*

（銀行→ナビゲーター→路地→若さ→棒→腹→8の字→卵）

仲間と約束していて、桑畑の拡がる盆地を見下ろす草原に行く筈が、そこは、見渡す限り陸地の見えて来ない、一面の海で、しかも私は、その海の底を歩いていた。そこには、真っ赤な口を拡げる貝がびっしり群棲し、私は、それらを踏み付けて進むしかない。しかしヤツらも、私に大人しく踏み付けられるばかりではなかったので、ヤツらに噛まれた私の足の裏は、皮がすっかり剥がれて、肉と骨が剥き出しになっているに違いない。

銀行

その、硬いのと柔らかいのが入り交じって犇めく、赤い絨毯が、いきなり終わると、その先は落ち窪んでいて、私は、前のめりになった。そこには、川が流れていた。幅が、四、五メートルもあって、水は底まで澄んで見えて、深さは多分、私の膝小僧くらいまでか。川底は白い砂で、水音は全くせず、静まり返っていた。ゆっくり右に曲がって、暗く低い方に向かっていた。川の水に足を漬けると、そこから太い血の筋が、揺れながら引かれて、下流に向かって延びた。しかし、それは直に収まって、水の中に手を突っ込んで、裏返した足の裏を持ち上げて見ると、両足とも、傷はすっかり癒えていて、表面は真っ白だ

った。私は、水に足を漬けたまま、暗い下流の方に向かった。その先がまた急に落ち窪んでいて、但し今度は半端ではなく、遙か下の暗い中に揺らめく海藻の尖端が、微かに見下ろされるだけだった。川はそこから、絶壁を落ち下る滝になっているに違いない。海の底にも、滝があったとは。

　その川の流れの終わる直ぐ手前の、川面から細長く突き出た赤茶けた岩に、先程の貝が、一つだけ、こびり付いている。それは、先程の群棲していたヤツらより、何倍も大きくて、口は閉じ掛けていた。恐らく、ヤツらの親に違いない。もう用済みなのに、死ぬのもままならず、行く川の流れを見詰めながら、侘びしい隠遁生活でもしているのか。いや、そんなのは、見掛けだけだ。絨毯になってパクパクしてたヤツらより、余程獰猛に違いない。その先で、私が、滝壺に向かって落ちて行くにしても、背を向けた瞬間に、こいつは、私の背中をガブリとやりそうだった。私は、こいつを、無理矢理、岩から剥がそうとした。しかし、長い年月、そこにこびり付いたままに違いなく、びくともしない。その替わり、そいつは、口を僅かずつ開け閉めしながら、一口、泥を吐いた。私は、咄嗟にそれを両手で受けた。覗き込むと、それもまた真っ赤だった。

　すると私は、真っ赤な泥が拡がるたけの、平坦な陸地に居た。手の中には、何もなかった。空には、鴫が一羽、ゆっくり旋回していた。私の、合わせて拡げた二枚の掌が、貝が口を開けたようにでも見えるのだろうか。鴫を見上げる

と、私は、ヤツの旋回する姿によって、催眠術に掛けられてしまいそうな気分になって来た。それを逃れる積もりだったか、たまたま襲って来た強い眠気に、私は、進んで身を委ねようとした。泥の中へ突っ伏して、私は、そこで息が出来なくなって、泥を飲んで死ぬのだ。しかし、それを事前に察した、泥の表面に映る私の影が、そこで泥の表面を伸ばして、少しばかりの窪みを作り、そのお陰で、私は突っ伏しても、顔を泥に着けずに済んだようだった。

　突っ伏した瞬間に、もう眠気はすっかり去っていた。私は、そこで、盛んに目をキョロキョロさせた。そこに何かが居るように思えたからだろうか。私のために、泥の表面に窪みを作ったのは、私の影ではなくて、そこに潜んでいた誰かだったのではないか。直ぐ目の前に、色の違う三層の泥が浮かび上がった。しかしそれは、空の色が映ったものに違いない。私は、殆ど泥の表面に触れないまま、串刺しにでもされたように、くるりと仰向けになって、空の何処かにある筈の、その三層の色を探した。私の影の中に潜んでいた者が、その彼方の三層を駆け上るようにして、空の中に消えて行くのが見えなかっただろうか。

　私の体は、そのまま泥の表面を滑って行った。私のオデコには、多分宛先が書いてあって、私は、郵便物のように、そこを運ばれて行く。始めの内は、のんびり横になっていれば良かったが、その内、傾斜がきつくなって、滑る速さがどんどん増して、恐くなって、足元の方を見た。私の足は、すっかり短くな

っていて、毛むくじゃらで、どう見ても猿の脚だ。私は慌てて飛び起きた。滑るままの勢いで、私の体は、その先の草叢に投げ出された。着地と同時に、短い脚で、素早く前に駆け出していたので、何とか倒れ込まずには済んだ。幸い、周りの草の丈は高く、猿の脚を隠せた。

私は、歩きながら、真っ青な海の絵葉書と、真っ白な雪景色の絵葉書を受け取った。すると、そこにピクニックに来ていた連中が、一斉に笑った。私が手にしたのが、ただの青い紙と白い紙だったからだ。草は、すっかり短くなって、私の下半身は、彼らの目に晒されている筈だったが、私の猿の脚など、彼らは先刻承知の風だった。

さて、その青と白の紙を受け取ってしまった者は、皆から、独り離れた所に行って、そこで皆に監視されなければならないのだった。それが、私達、仲間内のルールだった。私は、黄色い布を張った、小さな正方形の低い壇のような所に乗せられて、青と白の紙を、一枚ずつ、右手と左手で持って、そこに立ちん坊でいるしかなかった。他の者達は皆、毛皮を着ていたが、私だけは裸だった。尤も少しも寒くなくて、毛皮を着てさえ寒がる彼らが、哀れにさえ見えた。

彼らは車座になって、大きな紙を拡げていた。そこには、或る種の知識がなければ読み取れないような、何かの図表が載っていた。私の事はすっかり忘れられたのか、誰も私を監視していないようで、私は、自分で自分を監視する羽

目になった。そこに立ちん坊でいるのと、それを自分で監視するのと、二つも仕事を抱え込まされて、私はもう、一杯一杯で、動きが取れなかった。それでも辛うじて、カサコソ音のする上の方を見上げると、ギザギザした濃い緑の厚い葉の茂る枝にぶら下がった、尾っぽの長い艶々した毛並みの黒い猿が、彼らの図表を見下ろしていた。そして、猿は猿同士だからか、私には、その猿の瞳に映る図表を、読み取る事が出来るのだった。

図表は、この地域一円の、銀行の位置を示すものだった。ただ、図表は何枚かあって、図表ごとに、なぜか、銀行の位置が、まるで違うのだった。しかし他に、その位置を知る手掛かりはなく、その何枚かの図表を見比べて、そこから正しい銀行の位置を割り出さなければならないようだった。彼らの内の一人が、途方に暮れたように天を見上げた。彼らを見下ろしている猿と、目が合ったようだ。

「あれですよ、あの通りですよ。」と、そいつは言って、いきなり立ち上がった。

他の連中も一斉に、猿を見上げた。猿は、逃げようとしたが、長い尾っぽに、枝葉がこんがらがって、動きは鈍い。その内、彼らは棒を拾って来て、猿はその棒で散々突つかれて、木から落ちた。猿は逆さまにされ、その下に図表がずらりと並べられて、彼らは、猿の瞳に図表を映した。その猿の目に映った図表

からでなければ、読み取れないものが色々あるのだ。順々に猿の瞳を覗き込んで、尚議論を交わした上で、彼らは、銀行の位置を割り出した。西風が吹き込んで、図表の紙が、舞い上がった。彼らは皆、もう、その割り出した方を向いていた。私だけが、まるでその図表に鎖で繋がれたかのように、その後を追わなければならなかった。もっと強い風が、他の方向からも吹き込んで来て、私は、草原を出たり入ったりした。草原の外は、巨大な硬い岩盤が剥き出しになった黒く濡れた岩場で、迫るように傾いていて、その向こうには、高い空があるだけだった。草原に戻るたびに、草は、草である事に疲れたかのように、萎れて見えた。その辺りはもう、草原の端っこで、土地も痩せているのだろうか。

その見窄らしい草原から、風はまた、岩場に向いた。紙は、一団となって、草原と岩場の境目辺りの、小さな木の家の脇を、擦り抜けて行った。その家を目にして、今更のように気付いたのだが、私は、ただ草原と岩場の間ばかりを、行ったり来たりしていたのではなかった。小便や汗の匂いのする狭い路地裏や、新建材の匂いのする新装なった商店街や、蹴飛ばして仕舞いそうな程、よちよち歩きの子供で溢れた、妙に乾いたザラザラした砂地の狭い公園を、通り抜けて来たではないか。しかし、それらは皆、別の日の記憶のようでしかなくて、この、屋根など半分しかなくて、造り掛けのまま放置されたような、ちっぽけな木の家が、草と岩と空以外で、初めて目にするもののようもあるのだった。

中から、笑い声が聞こえて来て、私と図表を繋いでいた鎖を、断ち切った。私は、その扉だか壁だか分からない所にぶち当たるようにして、中に入った。造り掛けの見掛けにしては、中は、密閉された感じの小さな部屋だった。壁は、左右も奥も赤かった。女が一人、男四人に取り囲まれて、グルグル体を回されていた。全員部屋の真ん中に固まって、突っ立っていて、男達の体は皆頑強そうで、その隙間から見える女の体は、ほっそりしていた。女は、順々に、男の顔を見ては、笑うのだった。眉が八の字に下がり、目が細く釣り上がり、口が大きく裂けて、厚めの唇は、延びてゴムで出来ているようだった。女のために、男達は次々に面白い顔を繰り出さなければならず、直に四人とも、顔の筋肉がズタズタに引き裂かれ、骨まで見えたが、それでも、女を回す速度を緩める事は許されないようだった。その骨と肉が蠢いている顔を、また女は笑った。私は、図表を映した猿の瞳の輝きを憶えていた。ここの赤い壁の輝きと同じだった。ここは銀行に違いない。確か、預けて置いた金があった筈だ。

「金を下ろしたい。」と、私は、全員に聞こえるように、女の笑い声に負けない強い声で言った。

「えー、ダメだよ、口に出した人には、お金、渡せないでしょ。」

女が笑うのをやめて、そう言うと、男達は、腰を屈めて、小さな箒で床を掃き始めた。私には、それは、彼らが、帰り支度を始めたように見えた。

後ろの扉をガラガラ鳴らして現れたピクニックの連中が、ズルズルと床に脚を引きずる音を、けたたましく立てた。それから彼らは、部屋の隅に向かい、四人の男達が雑巾掛けしたばかりの長椅子に、掛けられる者は掛け、残りはその直ぐ前に、こちらを向いてしゃがみ込んだ。その間彼らは、一言も口を利かなかった。暫くそうしていると、女の方から、彼らに近付いて来て、一人ずつに、薄い札束を手渡して行った。彼らは、眠そうな目をして、今度は、床に脚を引きずる音は少しも立てずに、大人しく出て行った。彼らは、長椅子の上に、猿の革を残していった。女は、それを手に取って、いかにもつまらなさそうな顔をして、ぞんざいな手付きで、私にそれを着せた。四人の男達に促されて、私と女は、先に外に出された。

あちこち草の生え掛けた錆びた線路を渡ると、そこは大きな港で、私と女は、並んで、広いコンクリートの地面を、根気よくテクテクと埠頭に向かって歩いた。時代掛かった装飾の大きな客船が入って来ると、早速、女は、私の手を引いて、それに乗り込んだ。これから、世界中の、蟹の旨い所を巡るのだと言う。しかし相変わらず、顔はつまらなさそうだった。船は港を出たが、そこから直ぐ目と鼻の先の港に、また入ってしまった。私達は、降ろされた。船は故障していて、修理に何ヶ月も掛かるのだそうだ。身分の高い大事な客が乗る筈だったが、そいつが、何か訳ありで、結局乗らなかったので、船を直す事にしたら

しい。もしそいつが乗っていたら、故障などなかった事にされて、私達の楽しい船旅は、順調に滑り出したのに。（二〇〇一年九月七日）

ナビゲーター

女は、金を持っていなかったので、私達は、宿賃を払わずにトンズラ出来そうな造りの安宿を、品定めして回った。そして、或る宿の帳場の木の長椅子に掛け、腹を空かしたまま待たされていた。私達は、手垢で真っ黒な勘定台に当たる程、そこは狭くて、人が通る度に、女の膝が、忙しく立ったり座ったりを繰り返した。女は、さも自分が、周囲に気を遣う真っ当な人間であるのを示す事が出来て、嬉しそうだった。その点、私は、猿の脚を、長椅子の下に丸め込むようにしていれば済んだが、勘定台を挟んで、宿屋の女と向き合うまで、疑り深そうな彼女の目を、私独りで受け止めなければならない。その女は、ひどく太っていて、勘定台の奥は、ひどく狭くて、そこから出られなくなっているようにさえ見えたが、そう思って見直すと、女は、ガリガリに痩せていて、首を前後左右に、フラフラと軽く揺らめかせていた。天井から、小さなアブラ虫がボトボトと落ちて来て、多分一度落ちたものがまた壁を伝って天井

まで上っているに違いなく、已む事はなかったが、一つも、彼女の頭に命中しなかった。頭と肩幅が同じくらいなので、アブラ虫が、彼女の体に留まる事もなかった。

ピクニックのメンバーの一人が、私達の直ぐ脇の、開けっ放しの出入り口から顔を覗かせた。彼は、私の隣の女にだけ、笑顔を差し向けて、船の修理代は、ピクニックのメンバーが、全員で出し合った事を告げた。それはもちろん、直ぐそこに居る、宿屋の女の耳にも入る。私達が一文無しだと、教えているようなものではないか。二人の女が、勘定台を挟んで、顔を向き合わせた。相手の表情から、互いの腹の中を、読み取ろうとしているようだった。私は、その隙を見て、ピクニックのメンバーの男の股の下を潜り、外に出て、体が向いた方に、真っ直ぐ走って逃げた。その瞬間、後ろから、男と女の話が聞こえて来た。

「船の色ですけど、ついでだから、塗り直すって言ってましたよ。何色がいいですかね。」

耳で聞き取れたのは、その男の声だけで、それに、女は、赤と青の二色だけにするようにと、答えたようだった。それから二人は、色を巡って、私には到底分からない専門用語を積み上げて行く。話はどんどん厚みを増し、複雑で微妙なものになって行くようだ。私は、風を切って走っていて、二人はもう、そ

の風の奥のずっと後ろなのだ。それなのに、彼らが、熱しながらも表向き冷静沈着に、だらだらと話し続けているのを、そこにパックリと口を開けたもののように、活き活きと感じ取れてしまうのだった。遠ざかっている筈なのに、それだけが、少しも遠ざかっているようではなかった。

　走りながら私は、それをどうしたらいいか、通行人に聞いた。通行人は、私の問題を、一瞬で理解し、直ぐに答えた。

「あなたが、他の誰かと話せばいいんですよ。でも、自分の言葉を使わないといけない。二人の話に聞き耳を立てて、それを、ただ繰り返すようではダメですね。」

　しかし、私には、話す事がない。それをまた直ぐ、通行人は理解した。ただ、同じ通行人かどうかは分からない。似たような声が聞こえて来た。

「そうですか。それならもう、走るのを已めるしかないですね。」

　私は、足を止めた。もう遅い時間なのか、通行人は見当たらなかった。そうして独りになると、私は、両手に一枚ずつ、紙を持ったままだったのに気付いた。もし、その紙を持っていなかったら、或いは、それに気付かないままだったらと思うと、ぞっとする。私は、周りを見渡すしかないだろう。それとも、自分の体を、眺め回す事も出来るだろうか。どちらも決して、したくない。私は、両方の紙だけを、二枚並べるように掲げて、ジッと見た。どちらかが青で、

どちらかが白だ。色などどうでもいい。私は、目を離せなくなった。そこには、文字が書かれてあったのではないか。目を離せば、それは何処へ行ったのか。ただ見ていても、仕方ないのかも知れないが、目を離せばますます分からなくなるのは分かり切っている。目を離そうにも、離せなくなった。ピクニックに来ていた連中の笑い顔が、思い浮かんだ。彼らの歯は、汚れていた。紙から滑り落ちた文字を、連中は、口に入れたに違いない。そして、そのまま呑み込んだのか。私は、二枚を重ねてみた。何か透けて見えるかも知れない。髭や唇の形が朧に浮かんだ。それなら彼らは、滑り落ちた文字を啜ったのではなく、紙に口を付けて、文字を吸い取ったのか。また、通行人が現れて、私の脇へ来て、肩を寄せ、紙を覗くようにして言った。

「私が、替わりに、読んであげましょうか。」

「結構です。」

「でも、読めないんでしょう。」

「何を？」

私が、そう言って、通行人の横顔を見ると、彼は、舌打ちをして、いなくなった。と思ったら、後ろに回って、反対側から顔を出し、女のような息を、ハーハーと吐いた。そのネットリとした臭みのある、水気を含んで濃くて重そうな息を掛けられて、紙はすっかり湿って、二枚がぴったり重なって、剥がそう

としても剥がせなくなった。通行人は、私の胴体に巻き付くようにして、寄り掛かって来た。そうして、私の首の下から頭を突き出し、紙に唾を垂らし、それを指で拡げるようだった。鼻の頭が触れるくらい、ほんの目の前の、通行人の後頭部は、小さくて細くて、どう見ても女のものだった。私は、紙から手を放した。紙はそのままだった。替わりに女が、それを持つのだ。それなら、もう少しこうしていれば、この女が、紙を持って、何処かへ立ち去ってくれるだろうか。女は、水のように溶けて、私の乾いた下半身に吸い取られるようにして、消えた。しかし、紙はそのままだった。私は、女の手をして、それを持っていた。

確かに女の手だった。しかし、ちょっと目を離した隙に、それは女の手でなくなってしまいそうで、油断は出来ないのだ。その女の手にも常に目を配りながら、慎重に、また、紙の真ん中に目を落とした。紙は透けて、地面が見えた。思いの外、地面は赤くて明るかった。それを通してなら、周りにも目を向けたかった。私は、紙を目の前に翳した。すると、独りでに足が前に伸びて、私は、早足で歩き出していた。行く先は、紙が知っているだろうか。紙も体も、グラグラ揺れて見難かったが、紙を通して見る世界は、紙と同じで、すっかり透き通っているようだった。

その中にやっと、ちゃんと影のある動くものが見えて来た。ピクニックのメ

ンバーが全員揃って、銀行の女を、輪になって取り囲み、四つん這いにさせて、その尻を鞭で打っていた。鉄板を打ち抜くような音が、立て続けにけたたましく響いて、已まなかった。私は、取り囲んでいる者達の間から、そっと、女の様子を覗き込んだ。鞭は一つも、女の尻に当たっていなかった。多分、連中は皆目が回っていて、女の尻は、そんな状態で狙い定めるには、余りに小さ過ぎたのだろう。替わりに鞭は、互いに連中の脚を打ち合っていて、鉄のような音は、彼らが、その痛みに我慢して、歯を食いしばる音のようだった。いや、食いしばるのではなくて、痛みに呻いた後に、上の歯と下の歯を、思い切り、立て続けに、かち合わせているのだ。そうでなければ、こんな音はしない。

ただ、このままでは、何も始まらない。何かをしなければならない。しかも、それが出来るのは、私しかない。私は、地面を蹴っただろうか。私の体は連中の頭を越えて、輪の中に入り、そのまま女の背中に、馬乗りになった。女の首に手を掛けると、それはハンドルのようになって、私は、女の体を操る事が出来た。女がナビゲーターになって、早口に高い声を張り上げて、忙しく私に指図した。私は、その場で、右に左にハンドルを切った。それに合わせて女の尻が、右に左に揺れる。その尻に鞭が当たる、鈍く沈み込むような音が、規則正しくするようになった。その音に気を取られて、私はハンドルを切り損ねた。女の体が大きく傾き、私は、コンクリートの地面に投げ出され、そのまま滑っ

て、肘を、派手に擦り剥いた。私は、尻餅を搗いたまま、その肘の傷に、唾を垂らしては、治療に専念した。女の事も、忘れていたかも知れない。垂れて行く唾を眺めるのは、なかなかの醍醐味だ。

　根気よく唾を垂らしたお陰で、傷全体に、何とか、うすーく膜が張って、血は止まった。しかし、そうなるまでには、かなり時間も掛かった筈だ。私はまた、連中の方に目を向けた。しまったと思っても遅い。私は、紙を通して見るべきなのだ。しかし、紙を探すより、先ずは、目の前の出来事に身構えてしまう。やはり、一人の女が多数に取り巻かれていて、尻ばかりか全身を、鞭で打たれていた。しかし、女が、そうして鞭で打たれているのは、船の修理がされているのだ。女を打ち続けた甲斐あって、船は、予定よりずっと早く直った。ピクニックのメンバーは、新装なったその船に乗って、世界中の蟹料理を巡る旅に出掛けて行った。

　私は、倒れ込んでいる女に近寄って、先ずは、傷に食い込んだズタズタの服を剥がした。本当はもっと、丁寧に剥がした方が良かったのかも知れないが、それがどのような痛みか見当が付きかねて、手付きはつい、ぞんざいになった。呻き声でも上げてくれれば良かったが、女は、死んだように無言だったから、仕方ない。そうして、裸にした女の肌から、今度は、順々に傷を剥がして、自分の体に貼り付けて行った。私は、その傷の痛みに熱を出して、譫言のように

言った。
「何でだ。ヤツらは行ってしまった。蟹が、食いたい。ヤツらだけが、蟹を食いに、先に行ってしまうなんて。」
「蟹に食われるんじゃ、ダメ？」と、体の何処にも傷のない、スベスベの肌をした女が、低く囁き掛けるように言った。
「蟹に食われる？　じゃあ私は、魚だったのか。猿じゃなかったのか。どうせ食われるなら、猿に食われたい。」
「猿はもう、食われちゃったわよ。」
私は身の毛がよだった。思わず自分の胴体に目をやった。女の傷が、賑やかに溢れ返っていて、体はまだ、消えてなくなってはいないようだ。そして、爪先まで、猿ではなくヒトの形だった。私は、女の言葉の意味を、よく分からないままに、納得出来た事にした。
また女に目を向けると、彼女は、長くすらりとした脚を見せて、立ち上がっていて、例の紙を手にして掲げ、そこに透けて見えるものを、額に皺を作って、上目遣いに覗いていた。
「それは、私のじゃありませんか。返して下さいよ。」
しかし、そう口に出してみると、それは少しも私のもののようでなく、返して欲しくもないのだった。寧ろもう、触れたくもなかった。女は、二、三歩、

大股に歩んで、しゃがみ込んでいる私の直ぐ側に来て、私を冷たく見下ろして、紙を差し出した。そうも行かない。それでも見ない事にして、無理にも目を逸らそうとすると、その紙を中心に、私を取り囲む世界が、グルグルと回り出した。そこに何が見える訳でもなかったが、私を取り囲む世界が、グルグルと回り出した。

大股に歩んで、しゃがみ込んでいる私の直ぐ側に来て、私を冷たく見下ろして、紙を差し出した。私は、見ない事にした。そうも行かない。それでも見ない事にして、無理にも目を逸らそうとすると、その紙を中心に、私を取り囲む世界が、グルグルと回り出した。そこに何が見える訳でもなかったが、垂直に伸びる細い影が、次々に現れては去って行くのは分かる。それなら私達は、枯れ木ばかりの林の中に居るのだ。私は、その林のイメージにホッとして、心行くまで目を回す事が出来た。私は、その紙を受け取ろうとした。もう十分目が回っていて、その紙を取り落とす自信があったからだ。目論見通り、紙の端が、指の間を滑り抜け、紙は、やはり一枚重なったまま、林を抜けて来た風に舞って、ドブに落ちて、何処かに流れて行った。

しかし、ドブに流してしまうのは、遣り過ぎだ。枯れ木の枝に絡まって、そのままそこで朽ちて行く位にしておきたかったのだ。そう思うと、私の体は、急に冷えた。傷の痛みも引いて行ったが、体が冷えるのは、止まらなかった。

船が、港に戻って来た。ピクニックのメンバーが、打ち揃って、横一列に並んで、遣って来た。そうして見ると、大きいのや、小さいのや、太めや細めや色々で、こうも見掛けの違う者達が、何時も仲間でいるのは、何処か妙でもあった。どれもウキウキした顔付きだった。真ん中の一人が言った。

「いやぁ、肝腎の紙を忘れるところだったよ。」（二〇〇一年九月九日）

路地

その言葉を、無理にも聞かない事にすると、その言葉を中心に、また世界が回り出した。一人が、小躍りしながらヴァイオリンを弾き始めると、彼らは、腕を組んで、脚を大きく上げて、踊り出した。ただ独り、踊らない男が居て、彼は、私に手を差し出した。その白い掌を覗き込むと、皺くちゃの小さな銀紙が、汗ばんだ掌にくっついている。

「これを、あの女に渡してくれませんか。出来ますよね。やってくれなきゃ困るんだが」と、男は、人を見下すような低い口調で言った。

私は、言う事を聞こうと思い、男の掌から銀紙を剥がして、立ち上がった。十分、目が回っていて、自分に出来る事など知れていると、思えたからだ。立ち上がると、私は、しゃがみ込んでいる者達に、ぐるりと取り囲まれていた。全員が、私の顔を、上目遣いで見ていた。その人の輪から、何とか外に出なければならない。目を回している場合ではない。しかし、どこから外に出るにしても、必ず、その内の誰かを、蹴飛ばして行かなければならない。私は、順に一人一人に、年齢と性別を、聞き出していった。年齢は必ず、若いのと年寄り

とが、交互に来た。性別も、必ず、男と女が、一人ずつ交互に来た。それなら、若い女と年取った男、または、年取った女と若い男、そのどちらかでしかない筈だ。しかし、実際にはその四種類の人間が、順々に、並んで居るようだった。それなら、男同士とか、女同士とか、或いは、若いの同士、年寄り同士が、必ず隣り合っていなければならないだろう。そこが狙い目だ。私はそこを探した。しかし幾ら順に見ていっても、それが見付からないのだ。私はもう、二周目か三周目に掛かっていて、一人一人の顔を、憶えてしまいそうだった。その内、彼らは、手拍子を始めた。何事か、囃し立てているようだったが、聞き取れなかった。それを聞き取れないのは、私がまた、目を回してしまったからに違いない。

　私は、却ってそれで勇気を得た。目を回した私に出来る事など、知れている。私は目を閉じ、倒れない事だけ気を付けて、足の向くままに進んで行った。直に、体が宙に浮くようで、もう倒れずにいる事は出来そうになくなって、私は、足を止め、目を開けた。相変わらず私は、取り囲まれていた。ただ彼らは、膝を抱えて、黙り込んでいた。中の一人が言った。

「あの女は、何処へ行ったんでしょう。これを持って、探して来て下さいよ。」

　小さな把手を渡された。私はそれを、引っ張り上げるようにして掴んだ。

「ほら、落とし物だ。これを忘れちゃ、いけないだろう。」と、別の誰かが

言った。

皺くちゃの銀紙を渡された。それを渡したのは、女のようで、腐った肉の匂いがした。そんな匂いは、嗅がなかった事にしたい。無理にもそうすると、その匂いを中心に、世界が回り出した。いや、世界は止まっていて、その臭い匂いにすっかり覆われていて、そこを私だけが、グルグル回っているのではないか。

そうしている内に、しゃがみ込んでいる女の細い背中を見付けた。ぴったりそちらを向いた時だけ、嫌な匂いを嗅がずに済んだ。私は、腋の下に挟んでおいた銀紙を取り出した。ただ、渡す前に、一度それを、調べておきたくなった。何か書かれているかも知れない。しかし、足は動いたままで、そのどちらか片方の足が、宙に踏み出したようだ。体がふわりと傾いて、私はそこから落ちた。

水の流れる音がした。上で誰かが、私に指図している。把手は、バケツの把手だった。私は、バケツを両手で高く掲げ持った。バケツの底を打つ水の音だけが頼りだった。後は真っ白で、何も見えなかった。音が已むと、バケツは、上に居る誰かに取り上げられた。そちらを見上げると、しゃがみ込んでいる女と目が合った。女は直ぐに立ち上がったが、私は、女がそこでオシッコをしていたに違いないと思った。周りが見えて来た。バケツを取り上げたのは、女の直ぐ後ろの、背の高い手足の長い痩せた男だった。

私はドブの中に居て、直ぐに、ゴツゴツした溝の側壁を上り出した。上から男の声が聞こえて来た。
「オシッコに免じて、明日の昼まで待ってやる。明日の昼は、ホテルで演奏会だ。」
「裸で行ける訳ないでしょ。分かってるくせに。そんな事言うなら、服を直してよ。」
私が、ドブから這い上がると、ピクニックのメンバーが揃っていた。
「そうか、じゃ、仕方ないな。」
女の傷跡で、全身瘡蓋だらけの私の体は、冷え切っていて、私は、その場にへたり込むしかなかった。その私の姿を、怯えるような目で見ていたピクニックの連中は、競うようにバケツに群がって、そこから女のオシッコを手に着けては、それを盛んに自分の体に擦り込んだ。そうして彼らは奇声を上げると、体中の皮が剥けて、その下から、ツルツルの若返ったピンク色の肌が現れた。
その内の一人が、女の指が、微かに青と白に染まっているのに、目を付けた。女は、手を引っ込めたが手遅れだ。その女の手首を、手足の長い男が、肉切り鋏で切り取った。その二枚の手を持って、彼らは、お喋りしながら、何処かへ引き揚げて行った。手足の長い男だけが、独り別の方向に消えた。
女の右の手首からは、赤い血が、左の手首からは、青い血が噴き出して、止

まらなくなった。私の体は、急にカッカして来て、手足の長い男の後を追った。私は、金物屋まで、一気に走った。誰も居なかった。そこで蛇口を二つ、ひっ掴んで、直ぐにまた引き返した。途中、手足の長い男と擦れ違ったが、ヤツは、青白い顔をして、肩を窄め、寒そうで、少しも動かない濁った目は、何も見ていないようだった。

「肉切り鋏はどうしました？」と、私は、軽口を叩いた。男は、股を拡げて、その場に倒れ込んだ。後ろから見ると、開いた股の内側は、鋏の刃のようで、私は、軽口を叩いた成果を直ぐに見られたようで、笑いが込み上げて来た。

戻ると、女は、立ち尽くして、血が噴き出すままの腕を斜め前に差し出して、それに、ただ交互に目を遣っていた。私は、蛇口を、女の両方の手首に取り付けた。蛇口を捻ると、二色の血が、何時でも出て来るという仕掛けだ。そこは広場で、私達は商売を始めた。私が口上を述べる係りで、小さな瓶を持って来た客に、二色の血をばら売りした。どういう訳か、重宝がられて、いきなり行列が出来た。買いに来るのは、中年に差し掛かる位の女ばかりで、彼女達は、口々に、オシッコも売って欲しいと言って、飲み水をただで置いていった。私は、意味が分からずに、ただ笑って聞き流した。女は、意味が分かっているのか、そう言われる度に、表情が硬くなった。

行列の最後尾は、見覚えのある顔だった。顔だけではなく、姿形も、手足の

長い、鋏の内股を持った男のものだった。しかし、女だった。それとも女装しているだけか。いや、剥き出しの下半身は、鋏の刃が二枚、ニョキニョキと出ているるだけだ。それに、息が臭かった。あの腐った肉の匂いだ。彼女は瓶を持っていなかった。

「あの銀紙を貸してくれませんか。あれを折って、器にしたい。」と、その女は、男のような低い声で言った。

腋の下をまさぐったが、銀紙はなかった。この客を怒らせたら、恐らく私達は、巨大な肉切り鋏で、胴体を真っ二つにされてしまうだろう。彼女に待って貰う事にして、私は、慌てて銀紙を探しに出掛けた。やはり先ず、金物屋に行きたかった。誰も居なかったので、蛇口を拝借した替わりに、銀紙を置いて行ったような気がして来たからだ。私は、狭い路地に入り込んだ。左右から石造りの建物が迫って、道は、狭くなるばかりで、遂には、体を横に向けて、蟹のように進まなければならなかった。頭の上で、子供達の声がする。見上げると、建物に挟まれて、夜空が見えた。子供達は皆、そこに見える、銀色に輝く星を指差している。星はそれ一つ切りだった。私は叫んだ。

「やめろ。星を指差すなんて、どういう積もりなんだ。何が起こっても知らないからな。」

子供達は、一斉に私を見下ろした。しかし、手遅れだった。指差していた方

の腕がもげて、矢印のようになって、星目掛けて飛んで行った。子供達は、片腕をなくした替わりに、矢印のような、腕と同じ長さの尻尾を生やし、バランスを崩し、窓からポトポトと落ちた。路地は本当に狭くて、私は、子供達を踏み付けて行くしかなかった。飛んで行った腕は、きっと星まで達して、星は愈愈銀色に輝くに違いない。それは、クシャクシャに丸めた銀紙が、空に浮かんでいるように見えるだろう。私には、それを見上げる勇気はなかった。路地を抜けると、また広場だった。客にどう言い訳するか、考えなければならず、足取りは重くなった。

人集りが出来ていて、中に女が倒れていた。最後の客は、ぃなくなってぃた。私は先ず、蛇口を調べた。開けっ放しになっていたが、血はもう出なかった。それから、女を抱き起こした。全身紫色で、もうすっかり硬くて冷たかった。私は、そこに居た連中に、股が鋏の女について、何か知らないか尋ねた。「もう、全部あいつのせいだ。」と、一人が言うと、周りは、皆、大きく頷いた。

彼女が死んだのは、手首の蛇口から細菌が感染し、腕が腐って、その毒が全身に回ったからで、その細菌を運んで来たのが、股が鋏の女なのだそうだ。私には、もう一つそれは、ピンと来なくて、その先、何も考えられなくなって、ただ、女の干涸らびた黒い唇を眺めていた。

集まっていた連中が、何時の間にか、ばらけていて、それでも広場の何処かには居て、皆、盛んに歩き回っていた。直に戻って来ると、彼らは、ピクニックの連中が剥がして行った体の皮を、手にしていた。私は、それを受け取っては、撚って、細い縄にした。それから、向き合って抱き合うように、女の体を、私の体に縛り付けた。私を取り囲んでいるのは、全員、ピクニックの連中だった。

「お前は、この女の体なしにはいられないんだ。」と、連中は、口々に言った。

しかし、その口調は、まちまちで、それが、誹謗中傷なのか、励ましなのか、皮肉の積もりなのか、私には、さっぱり見当が付かなかった。それから私は、広場の中心に連れて行かれた。そこは緩やかに窪んでいたが、その真ん中だけは、逆にこんもりと盛り上がっていた。私は、その真ん中に立たされ、真っ青と真っ白な、女の二枚の掌を渡され、そこでまた、彼らに監視される事になった。（二〇〇一年九月十一日）

　大粒の雨が、音もなくフラフラと落ちて来た。風がゆっくりと、下から上に流れているらしく、雨粒の中には、暫く空中に留まって、そこでブヨブヨと揺れたり、それらが幾つか集まって、横に流れたりした。ピクニックの連中は、その雨粒を、蟹のように甘い味がすると言い合っては、天に向かって開けた大きな口で、それを受けた。腰を落とし、バランスを取るためか、両腕をＶ字に持ち上げて横歩きする姿こそ、蟹のようだ。彼らの肉もまた、蟹の味がするのではないか。それならいっそ、互いの肉を、骨の間からほじくり出して、食い合ってはどうか。

　雨が、広場の石畳に染み込むと、地盤が緩んで、広場の端から、石が滑り始めた。そこから石は、順々に浮き上がるように剥がれて、低い方にゆっくりと流れ、そこに真っ黒な地面が現れた。その黒がどんどん私の方に迫って来る。それは、近付く程、速さを増すように見えて、今に私は、足をすくわれ、石と一緒に流されて行くだろう。ピクニックの連中の姿が、一つも見当たらないのは、全員、流されたのか、それとも、私の後ろに避難したのか。

　頭の上から、明日の出発が楽しみですなあ、蟹は何よりの好物で、などと、囁くような声が、聞こえて来た。見上げると、大きな網が吊り下がっていて、中に、黒々と人が犇めいていた。顔は見えないが、多分ピクニックの連中だろう。そこから、ポタポタと、黒っぽい水が滴って来る。それは、雨ではなく、

彼らの汗か、涎か、或いは、オシッコも混じっているに違いない。それらは、風に揺れたりせず、石粒のように真っ直ぐ真下に落ちた。
　足元の盛り上げられた石が崩れ出し、そのまま流されるか、後退るか、もう、どちらかに決めなければならない。死んだ女を縛り付けたままでは、どちらも気乗りしないので、私は、咄嗟に、腕を振り上げながら飛び上がった。網の底に、手が掛かった。網の目から、白い腕が、一本、伸びて出た。それはナイフを持っていて、私の手首を狙っているのは明らかだった。
　私は、女の二枚の掌を、手放してしまった事に気付いた。それらが、石と一緒に流れて行くのが見えた。今ならまだ、追い付けない距離ではない。私は、網から手を放し、そちらに向かって飛び降りた。頭の上から、悲鳴が幾つか立て続けに聞こえた。
　追い始めると、雨はやんで、前から、強い風が真っ直ぐ吹き付けて来た。風に煽られて、泥の上の石は、簡単に浮き上がり、次々に、こちらに向かって、飛んで来る。しかし、石の方が私を避けるのか、当たるような気がしない。たとえ当たっても、女の死体を、鎧のように纏っているようなものだ。耳の脇を、石がヒュンヒュンと飛び過ぎても、何とも思わなかった。石に混じって、二枚の女の手も、私の方に飛んで来るのが見えた。手を伸ばしたが、届かずに、それは後ろに飛び去った。私は、くるりと向きを変え、直ぐにそれを追った。網

の底が破れて、そこから、何本も腕や脚が突き出ていた。私はまた、その真下を通らなければならなかった。その直ぐ先を、女の手が、転がっていたからだ。私は、冷や冷やしながらも、何とかその下を通り過ぎた。振り向くと、網の底は大きく破れ、その穴から、人が、ボトボトと、巨大な水滴のように、丸い塊になって、次々に落ちて出た。そして、それらは直ぐに立ち上がって、私の方に向かって、走り出すのだった。

ぐずぐずしてはいられない。一刻も早く、私は、女の掌を拾って、連中から逃げ切らなければならない。しかし、縛り付けてある女の死体は、縄が緩んでグラグラするし、浮き上がる石とその隙間の泥にも足を取られて、なかなか思うように前に進めない。横を見ると、連中の一人が、今にも私を追い越しそうな勢いで、私の方を向いて、にやりと笑う余裕さえ見せた。何処を切ったか知らないが、血がポタポタと足元に滴っている。振り返ると、もう連中の殆どは、私の直ぐ後ろにいて、ただ、私の足ののろさに、付き合っているかのようだった。私が彼らに気付いた事が、嬉しくてしようがないように、ほぼ全員が、私に笑い掛けた。前を見ると女の掌が見失われていた。私はただ、この連中から逃げるためにだけ走っているのだ。しかし、彼らは、何時でも私を追い抜いて、私を取り囲む事も出来るだろう。それなら、私はもう、捕らえられたと同じではないか。それでもまだ、逃げられると思い込んで、走っている自分は、随分

と滑稽ではないだろうか。
　ずっと私の横を走っているヤツが、私の手を指差した。私は、何時の間にか、女の二枚の掌を、手にしていた。それからまた前を見ると、見覚えのある景色だった。ここは、女が、取り囲まれて、四つん這いにさせられて、鞭で打たれていた所だ。私は、ボロ切れに足を取られて、倒れた。彼らが、私の上に迫っていた。私は、女の掌を放り投げた。それは、濡れた地面を回転しながらスルスルと滑って、ドブに落ちた。ピクニックのメンバーは、その後を追って、次々にドブに身を投げた。
　私は、息を整えてから、もう一度しっかりと、女の体を結わえ直そうと、縄を解いて、ひとまず女の体をそこに横たえた。それから、足に纏わり付いたボロ切れを剥がした。見ると、それは、私が剥ぎ取った、女の着ていた服だった。それを着ていた女の姿を見ていない者には、それは、全くのボロ切れだろう。私は、それを、女の体に着せたくなった。そして、そうすればもう、死体を抱いて歩かずに済みそうだった。着せると言っても、実際は、鞭打たれる前の女の姿を思い浮かべながら、布切れを、女の肌に貼り付けて行くような作業だった。しかし、風が吹けば、直ぐにそれは、また剥がれてしまう。それでまた、人の皮で出来た縄で、女の体を縛り上げるような事になってしまった。
　周りに人が集まって来た。なぜか女ばかりで、肌が、石を磨いたように艶々

していた。皆、微笑みを浮かべて、優しそうな目で、輪になって、私のやる事を見ていた。何となく見覚えのある顔ばかりだと思ったら、血を買って行った中年女達だった。彼女達は、通り掛かりの他の者が、私の姿を覗き込もうとすると、それとなくその前に立ち塞がった。明らかに、私が他の者の目に触れるのを、盾になって遮ろうとしているのだ。私は、縄の搦め方などをよく考えながら、ゆっくりと作業が出来た。

ただ、一組のカップルが覗き込んだ時だけは、彼女達は、為す術がなかった。カップルと言っても、男の方は、女達の輪の外で、口をへの字にして、眠そうな目で黙って立ち尽くしているだけだった。女だけが、輪の中にするりと入り込んで、私のする事を、やはり微笑みを浮かべて、間近で見下ろすのだった。しかし一方で、他の女達の顔から、微笑みが消えていた。見比べると、そのカップルの女だけが、他の女のようには肌に艶はなかったが、そのほっそりした体付きから、若さが際立っていた。彼女は、私に、何か話し掛けたがっているようだった。私が、手を止めて、彼女の目を覗き込むと、彼女は言った。

「何してるの？　私にも手伝わせて」と、彼女は、高い声を上げた。

私をきっちり守っていた周りの女達の輪が、綻ぶように、少しだけ拡がった。女達の目付きは、鋭くなっていた。

「手伝うって言っても、何をしてるか、分からないのに、どうやって手伝う

の？」
「何してるか、教えて。」
私は、どう答えていいか分からなかったし、一体自分が、何をしているのか、自問せずにはいられなくなった。
「何かな？ 何してると思う？」
「服、着せてるんでしょ。」
そう言って、彼女は、女の死体を縛っている縄に手を触れた。それでやっと、私は、どうして、彼女だけが、輪の中に入り込めたか、分かった。顔が、死んだ女にそっくりなのだ。そして、彼女の細い指が死体に触れると、その土気色だった肌が、そこだけピンクに輝くのだった。そこで、折角私が苦労して貼付けたボロ布は、簡単に剥がれて、更にボロボロに千切れて、風に舞って行ってしまった。縄も自然に解けて行った。そして女の死体は、元の裸に戻ったが、息をしていた。つまり、もう死体ではなかった。アベックの女は、素早く、自分の着ていたものを全て取って、小走りに女の輪を擦り抜け、待っている男の腕にしがみ付いた。二人は立ち去って行った。男は相変わらず眠そうな目をしていたが、女は、小さな尻を振って、スキップしながら遠ざかって行った。
私が、アベックを見送る内に、生き返った女は、もう服を着ていた。彼女は、私には見向きもせず、黙って歩き出した。囲んでいた女達は、狼狽えたように

道を開けるしかないようだった。私は後を追った。
「何処へ行くんですか？」
彼女は、冷たい微笑みを浮かべたまま、表情を変えず、私を無視し続けた。それでも私は、しつこく聞いた。女は、前を見据えたまま、今すぐ戻って、残務整理しなければ、明日、銀行を開ける時間に間に合わないという事を、尖った小さな声で、恐ろしく早口に言った。私は付いて行くしかなかった。
「どうぞ、ご自由に。」
さも言い慣れていないような、少し舌足らずな口調で、ゆっくりそう言うと、女は、グングン歩く速さを増した。私は、全く付いて行けず、独り取り残された。無理に付いて行こうとしたので、心臓がバクバク鳴って、その場に、倒れ込んで、脂汗を流すしかなかった。
風が戻って来た。人の皮で撚った縄と女の服だったボロ布も、戻って来た。縄は、すっかり解れて、捩れた人の皮の細かな破片でしかなかった。ボロ布も、ただの細かな端切れだった。それらが、汗で濡れた私の肌に、次々に張り付いて来た。どれも、更に細かな塵芥を付着させていて、体中にそれが張り付くと、私は、ゴミの山にすっかり埋もれたような気分になった。（二〇〇一年九月十三日）

目が見えなくなっていた。周りで声がする。耳元近くでも、大きな声がする。ピクニックの連中が戻って来たようだ。彼らは、二枚の女の手を取り戻した事を、盛んに言い立てていた。私は、目の周りに付着したものを取り去って、何とか目を開けた。もっと沢山居ると思えたが、三人の姿しかなかった。彼らも、私と全く同じようなものを、体中に付着させていた。三人が三人とも、女の手を両手に持とうとして、体を寄せ合い、足を絡ませて、フラフラしながら私の周りをグルグル回っていた。全身塵芥で覆われていて、彼らの声に聞き覚えのある私だからピクニックの連中と分かるが、知らない者が見れば、興奮して奇声を発する、三つの頭をかち合わせた、六本脚のケダモノだろう。

辺りは真っ暗で、他に動くものはなかった。もう真夜中だろうか。私達を照らすのは、のっぺりした白い壁だけを見せる、二階建ての建物の、二階の窓からの光だけだった。いや、建物かどうかは分からない。ただの白い壁で、二階に見える所に、ただ照明器具が取り付けられているだけかも知れない。ピクニックの他の連中が、戻って来た。彼らは、塵芥は纏っていないが、先の三人と比べると、皆、生気がなくて、びしょ濡れで、痩せ細って見えた。彼らは、私

の前を、口を噤んだままゾロゾロと通り過ぎ、その白い壁の前に寄り集まって、盛んにその壁を撫で始めた。それからやっと、ボソボソと言葉を交わし合った。それは、私の耳にも聞こえて来て、どうやらそこは、彼らにとっては、白い壁ではなく、何か他のものがなければならないようだった。

その内に、声が次第に大きくなって行ったが、大きくなる程、何を言っているのか、聞き取り難くなった。怒りが籠もっているようには聞き取れた。或いは、彼らが発しているのは、言葉でなく、叫びなのかも知れない。撫でていた手も、壁を打ち付けていた。その壁から、白い小さな破片が、少しずつ零れ落ちて、彼らはそれに勇気を得たように、壁を蹴ったりもした。中から真っ白な光の筋が、数本、突き出された。それから直ぐに、壁の下半分の大方が、呆気なくボロボロと崩れた。光が溢れ出し、その前の黄み掛かった乾いた地肌を、キラキラと照らした。中には、何か商品が陳列されているようだった。ただ、崩れた白い壁の直ぐ次には、厚いガラスが立ち塞がっていて、中には入れなかった。さすがに彼らは、そのガラスまで蹴破ろうとはしなかった。そこに、物を並べた店があるのが確かめられれば、それで、気が済んだようだ。彼らは、その場に、互いに寄り添って横になり、体をいっぱいに丸めて、穏やかな寝息を立てて、眠りこけた。

その間に、私の周りを回っていたケダモノは、その光を嫌ったのか、私から、

更に暗い方に少し離れて、そこで、やはりクルクル回っていた。私は、女の二枚の手を取り返そうと思った。それを持って、あの木の家の銀行に戻れば、女はきっと喜ぶだろう。手首から先が蛇口のままでは、金を数えるのも楽ではあるまい。しかしとても、あの獰猛な動きの中に、入り込めそうにはない。私は、ケダモノから目を離さないまま、店の方に近付いて行った。そこに何か、打開の手掛かりがあるかも知れない。そうして近付いて見ると、なるほどガラスの壁は立ち塞がっていたが、横に隙間があって、簡単に中に入れそうなのが、直ぐに分かった。彼らは、ガラスに立ち塞がられて入れなかったのではなく、入ろうとしなかっただけなのだ。私は、寝ている彼らを踏まないように注意しながら、その隙間に近付いて行った。しかし、一方で、ケダモノから目を離す訳にもいかなかったので、私は、寝ている者の腕を踏ん付けてしまった。

「何処見て歩いてるんだ、気を付けろ。」という声が、何処か遠くから聞こえた。

いや、それは、私が腕を踏ん付けた者の声だった。しかし、そうだと分かるのは、私が、この者の腕を踏ん付けているからだ。もしそれを直ぐ隣で聞いたなら、遠くから聞こえて来るように思えたままだったろう。それはまるで、道でぶつかった者のような、早口の、少し巻き舌の、挑み掛かるような口調だった。そいつは、眠ってなどいなくて、その振りをしていただけなのは、明らかだった。

だ。それでもそいつは、体を丸めたまま、首の向きまでそのままで、思い切り横目で、私を睨むだけだった。他の者は微動だにしない。しかし、聞き耳を立てているに違いない。私は謝るべきかどうか、迷った。しかし、謝らなくてもいいように思えるのだった。彼らは、ただ独り、体を起こしていられる私に、期待しているのだ。私は、彼らのためにも、意気消沈して謝るのでなく、寧ろ、その言葉を激励と取って、事に当たるべきなのだ。そうして私は、ガラスの壁まで辿り着いた。

私に腕を踏まれた者が、今度は、首だけ無理矢理突っ立てて、ケダモノの方を向いている。そこで、私は、ケダモノの監視は、暫く彼に任せて、直ぐにガラスの壁を回り込まないで、ガラス越しに店の中を覗いてみた。細い真っ直ぐな棒が、何本も真横に正面の壁に掛かっている。その前の低いガラスのショーケースの中には、獣の革で作った小さな置物が並んでいるように見える。そして、その壁とショーケースの間に、女が立っていた。服を脱いで行ったアベックの若い女だった。今は、売り子の制服のような青い服を着ている。じっと真っ直ぐ私の方に顔を向けているが、目は、少し高い一点を、冷たく見詰めるようだった。私は、女から目を離さず、ゆっくりと、壁の端へ移動して行った。案の定、彼女の目は、私を追わず、同じ一点に留まった。しかし、私の姿が目に入っていない訳はない。私はガラスの端を回り込んで、中に入った。

しかし、そこは店の中ではなかった。ガラスの壁は二重になっていて、私は、その壁と壁の間に、入り込んだに過ぎなかった。外では、塵芥に包まれたケダモノが、ゆっくりと闇の側へ遠ざかって行くようだった。固まって寝ている者達の中に、首を突っ立てている者はいなかった。頼みの監視役は、その中に紛れて分からなくなってしまった。私は、外に戻るべきだろうか。いや、まだ店に入れないと決まった訳ではない。手ぶらで外に出ても、私に出来る事はない。私は、ガラスの壁の反対側の端に向かって進んだ。突き当たりには、茶色の紙の箱が積み上げられていて、そこで行き止まりのようだった。どの箱にも、整った大きな青い字で、「青虫」とだけ書かれてある。少し興味をそそられたが、中を調べるには、積み上がった一番上の箱を開けるしかなく、脚立か何かがなければ無理だった。

その店の一番端は、分厚いカーテンが引かれていて、店の中や表からは隠されている。ただガラスの壁の外の、一番端の、私の居る所からだけは、そのカーテンの奥が見えた。そこのガラスの壁の店の側が、微かに曇っていて、そこに男が、指で絵を描いている。眠そうな目のアベックの男だった。肌の色までカーテンと同じ色をしている。それは、立派な鶏冠を付けた雄鶏の絵だった。描き進むに連れ、ガラスの曇りも増して行き、細かな水滴まで見えて来た。実物の雄鶏よりは、数倍の大きさだろうか。仕上がったのか、男は、腕を降ろし、

それを眺め回した。それから男は、その雄鶏の腹に、手を突っ込んだ。ガラスを通して、その手が、私の方に突き出されるように思えて、私は、咄嗟に身構えた。男はそれきり動かなかった。そこに突っ立って、目はただ、真っ直ぐ前を見た切りだった。私は、右手に、鶏冠の形の真鍮の大きな擦り切れた鍵を握っていた。それを手にした以上、私は出口を探さなければならなかった。二、三歩、後退ると、またショーケースの所に立っている女が見えた。女の目は、今度は私の方に向けられたいた。或いは、私ではなく、私が手にしている鍵を見ているのか。

　いや、これは鍵だろうか。擦り切れたからなのか、先は鋭利な刃のようだ。その刃で、青虫の箱を切り付けられそうだ。私は早速試した。目の高さの箱の側面に、×の形に切れ目を入れ、そこを指で拡げた。中は空っぽだった。そこには元々、アベックの男の体の一部が入っていたように思えて来た。カーテンの色は真っ青だった。男の色も真っ青なのだ。青虫とはあの男の事だ。もう他の箱まで調べる必要はない。男が、そこに居る以上、体の各部分を収めていた箱は、どれも空に決まっている。そして、中身を取り出された箱は、中身を待っているようだった。替わりに、私がバラバラにされて、その中に収められるなら、それで少しも構わないようだった。

　私は、外の側のガラスの壁に、闇雲に、真鍮の鶏冠を突き立てた。何処かに

鍵穴があるに違いない。そうしている内に、私は外に出ていた。或いは、鍵を突き立てながら、ただガラスの壁の端に辿り着いて、そこの隙間から外に出ただけだろうか。しかし、そうした覚えもなかった。店の中に居たアベックの女が、長い棒を真横にして、両腕で抱えて、立っていた。私をずっと待っていたかのようだった。私と女は、黙って、真鍮の鶏冠とその棒を交換した。女は、俯いて、棒の或る一ヶ所だけをじっと見詰めていた。私は、寸分の狂いもないように、慎重にそこを握った。棒は、真横のまま、私の手に握られた。ずっしり重い。もし少しでも握る位置がずれていたら、棒は忽ち傾いただろう。そこへケダモノがまた、足を絡ませ、フラフラしながら近付いて来た。恐らくチャンスは一度切りだ、そう思った私は、その棒の尖った先を、ケダモノに向けた。ケダモノの肉の軟らかな感触が、棒を握る手に伝わった。もちろん、ケダモノと言っても、三人の人間が、体を寄せ合っているだけだ。棒は、その体と体の間に突き刺さったのかも知れない。一瞬、そんな事を考えた私の頭を、棒が直撃した。

やっとまた前が見えた時には、棒を激しく振り立てながらクルクル回るケダモノは、遠ざかって、闇の中に消えそうだった。私もまた、フラフラしながら、とにかく急いで後を追うしかなかった。

距離を詰める事はなかったが、闇はずっと少しだけ白く濁って、ケダモノの

黒い影を見失う事もなくなった。それが、先に進まなくなった。その前は崖で、そこで行き止まりなのだ。その先どうすると言う考えも纏まらないまま、私は、それに近付いて行った。しかし、近付いて見ると、そこは崖には違いなかったが、低くなだらかで、そこから横に延びていた。ケダモノがそこから進めなくなったのは、棒が、その崖に突き刺さったからだ。それを見て取った瞬間、棒が私に向かって振り回されて来た。慎重に距離を取った積もりだったが、棒の先端が、私の頭を直撃した。そこでまた私は、前が見えなくなった。

　前が見えた時には、もうケダモノの姿はなかった。私は、フラフラと前に進み、崖に向かって身を預けた。顔を埋めて、そこに倒れ込んだ気分だったが、実際はそこに、斜めに凭れ掛かっただけだった。その地肌に耳を押し付けると、遠くのその崖の地肌をズルズルと引きずるような音が、聞き取れた。私は、崖に凭れ掛かったまま、その地肌に体を滑られて、その音のする方に進んだ。途中何度も止まって、耳を崖に押し付けては、その音を確かめた。崖の終わりに、屋根も壁も錆びたトタンの、傾いた小屋が見えて来た。

　近付くと、それは奥に長く続いていて、小屋と言うより、長屋だった。一番手前の戸口の脇に、あの棒が、斜めに立て掛けられてあって、また、その直ぐ横に、店の若い女が立っていた。私は、そこでまた、女から、真鍮の鶏冠の鍵を受け取った。今度はちゃんと鍵穴を見付けた。私は、戸口を引き開けて、中

に踏み込んだ。
裸電球の下で、三人が、川の字になって、横になっていた。三人とも右脇腹の同じ所に、同じ深手を負っていて、そこから血が湧き出ていた。（二〇〇一年九月十五日）

腹

三人は、板の間に寝かされていて、その頭の側に、その三人を見下ろして正座している者が見えた。白い羽根飾りをいっぱい付けた服を着ていて、頭には、赤く尖った高い被り物をしている。雄鶏を装っているらしいのは、直ぐに見当が付いた。血を流している三人は、裸だった。彼らが脱いだものを探そうとすると、私は、ケダモノの毛皮を踏み付けていた。それは、三人分の、一繋がりの大きなものだった。三人が怪我で使い物にならないとなれば、彼らに代わって、恐らく私が、これを着なければならなくなるだろう。しかし、こんなものを着たくない。私は、これが、人の皮と端切れと塵芥で出来ている事を知っている。そこでそれを、粉々になるまで、足の裏を擦り付けるようにして踏み付けた。

しかし、私は、そうしてその表面の汚れを、刮ぎ落としただけだった。塵芥を払い除けると、本物の毛皮が出て来た。雄鶏を装った者が立ち上がって、近付いて来た。脚は剥き出しで、骨と皮しかないように見えた。

「それを着て、女の手を探して来てくれないか。」と、それは男の声だった。

「え？　女の手なら、ここにあるんじゃないんですか。三人がしっかり握って、ここまで持って来たのでは？」

「いや、あの子達は、手ぶらで戻って来た。あんな大怪我じゃ無理もない。」

「なぜ、私が探しに行かなくちゃいけないんですか。」

「あんたが、あの子達に大怪我をさせたからだ。あの子達を助けられるのは、あんたの他に居ない。決まり切ってるじゃないか。幾ら代わりたくても、他の誰かが代わる事は出来ん。やった者とやられた者の関係は、取り消しようがない。死ぬまでもう、逃れようがないんだよ。」

「関係？　そんなもの、簡単に取り消せますよ。」

私はそう言って、寝ている連中に近付いて、その脇に座った。

「見ていて下さい。」

私は、血が湧き出していて止まらない、脇腹の傷口に、口を付けた。血を一口だけ飲んで、血は止まった。口を付けたまま、唇を閉じると、傷口も塞がった。私は身を乗り出して、真ん中の者にも、その次の者にも同じ事をして、三

人の傷をすっかり治した。
「これでどうです。これでもう、関係は解けましたね。」
男は、私が踏ん付けていた毛皮を左手で掴み、聞いた事もないような笑い声を上げげながら、近付いて来た。それともそれは、笑い声ではなくて、雄鶏の鳴き真似だったろうか。男は、三人の直ぐ側まで来て言った。
「こら、何時まで寝てるんだ。さっさと起きろ。」
三人は、目をパチクリさせながら、フラフラと上体を起こした。男が、そこへ毛皮を被せ、三人の太腿を、代わる代わる平手打ちした。脚は、引っ込められて、毛皮の中に潜り込んで行った。三人の体が、すっかりその毛皮の中に収まると、男は、パックリ開いたままのその毛皮の腹を、紐で結んで、閉じ合わせた。それから、被り物を取り、羽根飾りで覆われた服を脱いだ。男は、全身骨と皮だけで、苦しげな表情を浮かべて、その場にゆっくりと横になった。ケダモノが立ち上がった。しかし、その纏っている毛皮は、さっきまでと同じ塵芥を被っているようだったし、相変わらず、三人の人間が、二枚の女の手を掴もうと、身を擦り合っているようにしか見えなかった。踏ん付けていた毛皮がどのようなものだったかも、私はもう思い出せなかった。
しかし、明らかに何かが違った。見掛けは、三人の人間のようでも、中身は一匹のケダモノに違いなかった。ズーズーと、息をザラザラの舌に擦り付ける

ような音が、一つだけはっきりと聞こえて来る。それは次第に澄んで、ヒューヒューと高い音に変わった。私に向かって近付いて来る足取りも、重く獰猛な感じで、私に迫った。私に出来る事は、男が脱ぎ捨てた、羽根飾りの服と鶏冠の被り物を身に着ける事だけだった。私はまだ、全身塵芥にまみれていた。それでも無理に着込んで、何とか間に合った。私の目の前で、ケダモノは、ぴたりと止まった。その中に女の手があるのかどうかは、もちろん分からなかった。もう、三人ではなく、一匹のケダモノであるなら、そこに女の手があるかどうかは、その肉を裂かない限り、分からないだろう。骨と皮の裸の男は横になって、体をきつく丸めるようにしていた。士気色で、骨と皮の一塊にしか見えなかった。触ると冷たかった。それなら私が後釜なのだ。このケダモノに、命令する事も出来るのではないか。

しかし、私は、何と言って声を掛けていいか、分からなかった。見掛けは確かに後釜だが、声を出した途端に、化けの皮が剥がれそうだった。ケダモノが、私の前からひらりと身を躱し、私の脇を通り抜けて、そのまま戸口に向かった。私は黙って付いて行くしかなかった。

外では、若い女が、腕を前で組んで、少し寒そうにして待っていた。鍵を持っていたので、私が、戸締まりをしなければならなかった。しかし暗くて、何時まで経っても鍵穴は見付かりそうにない。気持ちばかりが焦って、愈愈ダメ

だった。鍵を掛けた振りをして、後ろを振り返った。若い女とケダモノが、腕を組んで遠ざかって行く。私は、ケダモノを殺そうと思い、立て掛けられたままの棒を握った。しかしそれは、重くてびくともしない。棒の先を見上げると、銀色の大きな星が、銀紙を指でちぎったように、輝いていた。私は、何となくそれを見上げるままに、手に力を込めて、何とか棒を持ち上げようとした。棒の表面はざらざらしていて、次第に私の手は、血塗れになって行った。しかし、その血を舐めると、手は、透き通るように艶々して、傷一つなくなった。その掌に、星の銀色が微かに映っているのさえ見て取れた。そして、掌を見詰める内、その銀色は輝きを増して行った。見上げると、星は少しずつ、ずり落ちて、輝きを失って行くようだった。私は、咄嗟に、掌を閉じた。このままでは、星の光を全て、私の掌が吸い取ってしまいかねない。しかし、手遅れのようだ。星は落ちて消え、辺りは真っ暗になった。

　後ろで風の動く音がした。振り返って掌を拡げると、闇は取り払われ、また星明かりが戻り、その中を、若い女が、大きな雄のライオンを従えて、私の方に近付いて来ていた。ライオンの目は、兎の目のように静かだった。私はまた棒を握った。今度は、棒は浮き上がった。しかし、別の誰かと一緒に、それを持ち上げているような感じだった。一八〇度向きを変えて、尖った先をライオンに向けたかったが、なかなか思うように行かない。棒は、見た目は真っ直ぐ

のままだが、握っている手の感触では、くねくねと曲がっているような感じだった。棒は棒で、フラフラとその尖った先が定まらないままなのに、そのくねくねした感じだけが、私の体に蛇のように絡み付いて来た。女は、立ち止まった。ライオンはその脇にしゃがみ込んで、顎を前脚の上に乗せ、眠そうな目で、私を上目遣いに見た。

　私は、棒を離した。棒は見失われた。それを待っていたかのように、くねくねした感じは、私の体を締め付け始めた。右腕はもうすっかり駄目だったので、まだ少しは自由の利く左腕で、私は、出来る限り全身をまさぐって、真鍮の鶏冠の鍵を探り取った。何処かに鍵穴がある筈だ。私は、その鍵を左の胸の辺りに突き立てた。もう左手は、その辺りにしか届かなかった。その辺りの羽根が毟れて、宙にフワフワと漂った。女は、それには見向きもせず、ただ私の方を、軽く口を窄めて、細い目で見据えるままだった。瞳は、瞼の影に沈んで、見えなかった。その内に、もう左手も全く利かなくなった。頼みになるのは、この若い女だけではないのか。

　「鍵を受け取ってくれますか」と、私は尋ねた。

　そう言い終わった瞬間、真っ直ぐな長い棒が、女の胸の真ん真ん中に突き刺さった。それは、女の体を貫いて、その尖端が、ライオンの眉間にまで達した。女は、優しく微笑んで、私から鍵を受け取って、それを直ぐに飲み込んだ。で

は鍵穴は、女の腹の中にあるのか。飲み込んだ後も、女はまた微笑んで、そのまま表情は、ぴたっと止まった。
くねくねした感じは残ったが、締め付けられてはいなかった。ただ、じっとしていれぱだ。体を動かそうとすると、その動かそうと思った所だけが、締め付けられる。尤も、それは少し遅れるので、初めの三分の一くらいは動かせて、そこで急に動きを止められた。私は、まだ自分の体の何処かに鍵穴があるような感じがして、体のあちこちをまさぐった。そして、それらしき穴を、二、三、見付けた。ただ、鍵がなければ、それが鍵穴かどうか、確かめようがない。私の目は、どうしても、女の腹に行く。
表情が止まったままだからか、女の顔の肌が乾いて、パサパサになって、粉を噴くようだった。いや、もうボロボロになって、表面が剥げ落ちて行くようだった。それでも、微笑むままで、私は、女が人形になってしまったのではないかと疑った。それからまた腹を見ると、脹らんでいた。それは、まだまだ大きくなりそうだった。売り子の制服が、腹の所で、ビリビリと裂けた。
長屋の、三人が寝ていた部屋の、隣とそのまた隣の戸口が、ガラガラと音を立てて開いて、中から、手足の長い、何処かくねくねした感じの男が、一人ずつ走り出て来た。直ぐに二人は、私の両脇に来て、私の腕を乱暴に掴んで、私の着ている羽根飾りの服を脱がせに掛かった。女から、やっと微笑みの表情が

消えて、もうそれ以上、顔の肌はボロボロにならなくて済むようだった。女は、服のボタンに手を掛けて、自分で服を脱ぎ始めた。

　私は抵抗した。どちらか一方だけなら構わなかったが、私と女が二人とも裸になるのは、避けたかった。そんな事になったら、ここは全く、ケダモノだけが幅を利かす世界になってしまうではないか。しかし、二人掛かりでは時間の問題だった。

「絶対に脱がさせないぞ。どうしても脱がせたかったら、こびり付いてる塵芥も一緒に脱がせてみろ。」と、私は言った。

　二人の男は、私の腕を放し、出て来た戸口に走って戻った。そして直ぐにまた走り出て来て、私の腕を掴んだ。二人とも、ナイフを手にしていた。それで羽根飾りの服を脱がせながら、私の体を覆っている塵芥を、刮いで行った。それは、三人のケダモノが脱いだのと同じように、一枚の毛皮になって行った。しかもそれは、羽根飾りの服と一繋がりだった。肌が冷たい風に晒された。私は、まだ温かい女が脱いだものを、身に着けて行った。腹の辺りが裂けていたので、サイズもぴったりだった。ただもちろん、下腹部だけが、冷たい風に晒されるのは、我慢しなければならない。

　女もまた直ぐに、私の脱いだ毛皮を纏った。女の腹はもう、脹れるだけ脹れていた。棒は何時の間にか胸を突き抜けていて、胸には、肉を剥き出しにした

赤く丸い穴が開いていた。女は毛皮を着込むと、私の頭から被り物を奪って、自分の頭に被せた。腹のでかい雄鶏の出来上がりだった。私の両脇の男達は、蹲って、ナイフをペロペロ舐めながら、その女の勇姿をトロンとした目で眺めていた。私は、二人の後頭部を同時に殴り付け、前に突っ伏した二人から、二本のナイフを奪った。女が奇声を上げた。男達は直ぐに立ち上がり、また、出て来た戸口に走って戻った。そして、直ぐにまた走り出て来た。青い紙と白い紙を持っていた。それを女の両手に一枚ずつ掴ませて、二人の男は、地面に転がっている長い棒の両端を持って、闇の中に走り去った。

　女は、鳥を真似たような、上体を揺らす歩き方で、大人しくしゃがみ込むままのライオンに近付いた。ライオンの眉間は、割れて、血を流していた。女は、ライオンの顔に、正面から跨って、腰を振り、自分の下腹部を、ライオンの傷口に擦り付けた。卵でも産むつもりらしい。両腕を激しく振り立て、掴んでいる紙を、ビュンビュンと鳴らした。

　とてもこんなものに、付き合ってはいられない。私は、両手のナイフを強く握った。するとそこはまた、星明かりさえない、真っ暗闇になった。耳を澄まし、男達の足音の微かに聞き取れる方に向かって、私は走り出した。（二〇〇一年九月十七日）

8の字

　男達の足音は、私の足音と風を切る音に掻き消されている。しかし、何も困らない。私の足音は、男達の足音と一つだった。自らの足音が聞き取れれば、闇の中でも、進むべき方向は分かった。それは何処までも真っ直ぐだった。

　ナイフを握っている手が、熱くなって来た。もう大丈夫だろうか。女とライオンから、私の姿が見えない所まで遠ざかっただろうか。私は、きつく握っている手を緩めた。いきなり、二本揃って、打ち上げられるように、キラキラ輝くナイフが手から離れ、前に向かって放り出された。それは、幾ら遠ざかっても、同じ大きさで輝いて、それがスッと闇に消えると、辺りにまた、星明かりが戻った。少し先に、丸めた背中が、寄り集まって横たわっているのが、見えて来た。ピクニックの残りのメンバー達だ。しかし、その直ぐ前のある筈の、棒を置いている店は、見当たらなかった。その脇で、影のような黒尽くめの男二人が、白い棒に、くねくねと絡み付かれて、藻掻いていた。近付くと、彼らの開きっぱなしの口から、間を置いては、やっと微かに弾き出されるような息の音が、聞き取れる。棒はもう、彼らの胸をしっかり締め付けて、そこで固定され、彼らは、息が出来ないようだった。黒い影に見えていたものが、いきな

り、白く透き通る肌に変わった。

　彼らは、足を滑らせたように、急に、その体を傾けて、見えなくなった。私は、直ぐそこへ走り寄った。そこから、彼らは、斜面を滑り落ちて行った。棒は、二重の8の字に彼らの胴を締め付けるままだった。そこで、私は、両足に一つずつ硬いものを踏んだ。見ると二本のナイフだった。光を失っていた。

　斜面を滑り落ちるに連れ、男達の体は、擦り切れてなくなって行った。その斜面には、ギザギザの恐ろしく硬い葉の草が密生していて、そこを転がる度に、男達の肉や骨が、削り取られて行ったに違いない。斜面の下まで落ちて止まった時には、８の字の棒だけになっていた。そこは、たっぷり水を湛えた川で、白い二重の８の字は、水に浮いたまま流れて行った。それは、遠ざかって小さくなっても、その8の字だけは、くっきりと見て取れて、見て取れている内は、それから目を離せなかった。それが、流れて行くのをやめて、そこでクルクル回るようになって、消えた。そこはもう、海かも知れなかった。その周りは、幾ら目を凝らしても、何処までも闇だった。

　私は、喉が渇いて、その場に膝を付いた。闇に、目を凝らし過ぎたからに違いない。その闇の海に、まさか魂まで送り込んでしまったのだろうか。そんな考えをグルグル巡らしながら、私の意識は朦朧として行くようだった。その問いに答えるべく、遣わされて来るように、海からの長い道のりを、真っ直ぐ私

の方に近付いて来る者がいないだろうか。いや、そんなものが見える筈はない。私は、項垂れた首を振って、その幻想を払い除けようとした。そうしている私の側を、誰かが、通り過ぎるようでもあった。目を開けて、周りを見渡した。海は消えていた。その方向の闇には、海どころか、水の気配さえなく、喉をカラカラにして噎せ返らせるような乾いた空気が、すっかり空高くまで、占めているようだった。

私の目は、何時の間にか激しく動き回って、水を探していた。足が勝手に前に進んで、草を掻き分けた中に、水の溜まったバケツを見付けた。中の水が、ゆらゆら揺れて、星明かりを集めて、輝いていた。私は、もう、見付けたナイフを両手に握っていて、それを水に入れて、掻き回した。両手は自ずと８の字を描いたが、それでも二本のナイフが、水の中でかち合う事はない。しかし、どうしてかち合わないのか。私は、ナイフを水から出した。柄だけで、刃がなかった。刃は、水の中に溶けたのか。そう思って見ると、水の表面の輝きに、目を切られるようで、目を背けたくなった。

私は、右手にバケツを、左手に二本のナイフの柄を持って、固まって横たわっている連中の所に戻った。そして、バケツの水を、彼らの丸い背中の上にぶちまけた。それで少しは、彼らに仕返しが出来たようで、何となく気が晴れた。バケツを地面に放り出すと、そこから、金属同士が激しく当たり合うような、

キンキン言う高い音が響いた。また拾って中を見ると、微かに水が残っていて、それが、弾け合って打ち当たっているのだった。横たわっている連中の背中を見ると、無数の切り傷が口を開けていて、キラキラと輝いていた。

　それを輝かせる光の来る方を見ると、そこはまた、８の字を沈ませた海に見えていた闇の方向だった。そしてそこに、横になった８の字が銀色に光っていて、その光が、真っ直ぐここまで届いているのだった。それは一体何なのか。あの棒なのか。星なのか。銀紙なのか。海に浮いているのか。空に浮いているのか。何も分からない。そんなものの光を、浴びていたくなかった。私は、身を隠せる所を探した。何度見直しても、その光を避けられそうなのは、バケツの底だけだった。どうしても、そこに目が行く。ダメで元々で、私は、バケツを拾い上げた。そして、その底に向かって、拳を打ち付けた。底は少しだけ凹んだ。また拳を打ち付けた。打つ度に、バケツの中は、少しずつ拡がって行った。そうして何度も打っている内に、何時の間にか、私の体は、横になったバケツに、すっかり入り込んでいた。それで打つのをやめ、バケツの向きを、光が差し込まない方に向けた。

　バケツの底に背中を凭せ掛けて、しゃがみ込むと、真ん前に、横たわっている者達の姿が見えた。バケツの中から見ると、連中の背中も、切り傷の中も、その先の闇も、全て、青味掛かって見えた。背中の肌は、光を受けて、少しば

かり透き通って行くようでもあった。その中に、小さな青いものが、ネズミのように動き回っていた。それもまた、真っ青だったが、なかなか、その形を捉えられなかった。そして、他に動くものもなく、それだけを目で追っている内に、それが、一つではなく、二つであるのに気付いた。すると、バケツが縮んでいるのにも、気付いた。このままでは、バケツの中に閉じ込められて、出られなくなってしまう。私はまた、くるりと体の向きを変えて、バケツの底を拳で打った。しかし、バケツは縮まる一方だった。諦めて外に出ようとしたが、もう体の向きを変える事も出来なかった。それでも何とか私は、そこから出ようと、腕や脚を突っ張ろうとした。その弾みで、バケツはゴロゴロと転がり出した。私は慌てて、全身の力を抜いた。（二〇〇一年九月十九日）

卵

バケツから水が零れるように、私の体は、スベスベした青味掛かった地面に投げ出された。そのまま、丸い水滴のように滑って、横になった８の字から来る銀色の光を受けている辺りを大きく回り込んで、その先の青い闇の中に、落ち込んで行った。その闇の底に行き着いて、強張った冷たい手足を伸ばして震

わせていると、上の方で、カラカラと転がり続けるバケツの音が、小さく聞こえてきた。温かい血が、手足の先に行き渡ると、私の体は、その音に絡め取られるように、そちらに引き寄せられ、大きく弧を描いて、浮き上がって行った。そしてまた、銀色の光を受けている辺りに戻った。結局、その青い闇を、その底まで降りて、ぐるりと一周したようだった。

固まって横になっているピクニックの連中を探したが、それより先に、ライオンの姿が目に入った。ライオンはしゃがみ込んでいて、前脚でバケツを掴み、その中に大きな口を突っ込んで、その底の水を飲もうとしているようだった。ただ、それは巧く行かず、バケツを色々に傾けていて、それが硬い地面に打ち付けられる音を、私は、闇の底で聞いていたようだ。ライオンが居るという事は、若い女も一緒ではないのか。私は、体を一回転させて、ぐるりと周りを見渡してた。それでも誰の姿もなかった。もう一度、見渡した。やはり誰も見当たらなかった。それでも、もう一度見直すと、女が、少し離れた所に立っているのを見付けた。全身を覆っていた羽根飾りの毛皮の服は、随分縮んでいて、細くてしなやかそうな両腕と両脚は、すっかり剥き出しだった。被り物は、鶏冠のようではなく、真っ白な長い羽根を何本も突き立てるものに変わっていた。腹の脹らみは、すっかりなくなって、すらりとしていた。私は、そちらに近付きながら、白と青の紙をどうしたのか、聞いた。女は手ぶらだったからだ。彼女は、

二、三歩後退って、微笑むだけで、無言だった。更に、私が近付こうとすると、顎を突き出し、腰を引くようにして、笑い声を上げ、くるりと後ろを向いて、その先の二階建ての建物の方に歩き出した。建物の一階のガラスの壁の奥は、真っ暗で、何も見えなかった。二階の窓にも、灯りは点っていなかった。ただ、その暗い中から、誰かがこちらを見ているかも知れない。女を追うのは、危険な気がした。私は立ち止まって、女が、建物の奥に回り込んで行くのを見届けながら、紙ではなく、鶏冠の形の鍵について、聞くべきだったと思った。

　気を取り直して、ライオンの方に戻ると、その眉間に開いた真ん丸な穴に、どうしても目が行く。ライオンは、バケツの底の水に夢中になっている。今がチャンスかも知れない。私は、滑るように静かにライオンに近付く、腰を折って首を伸ばし、穴の中を覗き込んだ。穴の中は、銀色に一際明るく光り輝いていて、ずっと奥行きがあった。その奥行きからすれば、ライオンの胴体は、尻まで全て空洞でなければならない程だ。そして、その内面をびっしり埋め尽くしているのは、銀色に輝く、先の尖った小さな卵だった。若い女が、ライオンの顔に跨って、産み付けたものに違いない。綺麗に卵が並んでいるだけで、鶏冠の鍵は、見付からなかった。私は、ライオンが鍵をひり出したかも知れないと思って、ライオンの尻の方に、そっと回り込んだ。

　そこで、私は、足首を掴まれた。見ると、ピクニックの連中が固まって横に

なっていて、その一番端の者が、私の足に腕を伸ばしていた。私は、直ぐにそれを振り払い、

「何時まで、横になっている積もりなんですか？」と、別にどうでもいい事のように、抑えた調子で聞いた。

「血が止まらないんだ。お前のせいだ。バケツの水は、何だったんだ？」

「ナイフが溶けていたようです。」

私の声は、自ずと、嬉しそうにうわずった。彼らの互いに寄り添う背中は、服が裂かれてすっかり剥き出しで、透き通ってキラキラしていて、その煌めきが、絶えずその肌を傷付けているようだった。その血の色は、銀色の光を受けて真っ青に見えて、背中から止め処なく滴り落ちては、彼らの頭や手足を、青く塗り込めて行く。私は、笑いが込み上げてきた。すると、その私の笑い声が、彼らの背中を濡らしている水の煌めきを、細かく震わせ、それによって、傷口が更に開いて、その度に、そこから血がプックリと盛り上がって流れ出た。血は、そこから何処にも流れて行かなかったし、地面に染み込む事もなかったので、直に、彼らの全身を覆い尽くし、その姿は、ただ真っ青な山盛りの血の塊にしか見えなくなった。それでも、そのツルリとした表面を、鼠のように動き回る二つのものだけは、見て取れた。それが、切り取られた女の二枚の手であるかどうかだけは、確かめたい。それにはやはり、鶏冠の鍵が必要であるよう

に思われた。尻の側にもないなら、やはりまだ、鍵は、ライオンの体内だろうか。中に入って、銀色の卵の隙間を調べるべきだ。

　中が空っぽなら、もう何も恐れる事はない。私は、ライオンの腹を、力一杯蹴った。蹴破る事も出来そうに思えたのだが、辺りに響き渡るような大きな音がして、少し凹んだだけだった。私はまた、顔の方に回り込んだ。横っ腹に大穴を開けるまでもなく、巧く身を捩れば、眉間の穴から、ライオンの体内に入り込めるのではないか。私は、穴を見詰めながら、色々に身を捩った。自分の体が、自由に長く伸びるゴムのように感じられた。

　ふと見ると、側に、眠そうな目の男が立っていて、先程、若い女が着ていた羽根飾りの小さな毛皮の服を抱えている。

「おい、服を返せ。」と、男は言った。

　私は、売り子の制服のような青い服を着たままだったが、それは、下腹部ばかりでなく、もう全身びりびりだった。私は、断る理由もないので、それを脱いで、毛皮の服と交換した。男は、直ぐに背を向けて、建物の方に歩いて去った。私は、交換の条件にすれば、紙や鍵の事を聞けたかも知れないと悔やんだ。毛皮の服は、試すまでもなく、小さすぎて、着られないだろう。しかし、まさぐると、鶏冠の鍵が出て来た。いや、或いはそれは、別のものかも知れない。私は、それがまだ鶏冠の鍵に見えている内に、慌てて飲み込んだ。それからま

た、身を捩ると、その捩った形なら、パズルが解けたように、ライオンの眉間の穴の中に、入って行けそうだった。私は、思い切って、その穴目掛けて、頭から飛び込んだ。穴の中が奥まで全て見て取れたと思えた瞬間、額を激しく打って、目から火花が散った。私は、ライオンに頭突きをしたに過ぎなかったのだ。しかも、ライオンの額は、陶器のように硬くて冷たくて、ゴーンという音がして、その振動が私の全身を震わせた。私は、何も見えなくなって、私の体は、グルグル回り続けるようだった。

暫くして、やっと落ち着いて、ものが見えるようになると、ライオンは、大きな壺が、無残に砕け散ったような有様だった。私は、まだ痺れている頭を必要以上に揺らさないように、ゆっくり四つん這いになって、それらの破片を手に取っては、そこにこびり付いている銀色の卵にしゃぶりついた。卵の殻は薄くて、直ぐに卵は割れ、私は、殻ごと喉に流し込んでいった。腐った水のようなく味がしたが、次々に手が伸びて、最後まで止まらなかった。食い尽くすと、私の体は、少し縮んで、女の着ていた毛皮の服も着られそうだった。しかし、毛皮の服は見当たらず、替わりに、水の一杯入ったバケツを見付けた。

その水面に、銀色の光が揺れているのを見ただけで、私は、吐き気を催した。卵を吐くのかと思ったら、次々に、切り取られた女の手が吐き出された。喉を通る時、それは一番女の手だと分かった。凹凸のある貝殻のような硬い手の甲

と、ふわりとした掌が、確かに感じ取れた。口から出ると、それはもう、よれよれの手袋のようで、地面に吐き出されて、積み重なってゆくと、ただのドロドロの塊にも見えてしまうのだった。吐くだけ吐くと、私は、その山盛りの女の手の残骸に、両手を突っ込んで、私の求めている女の手を掴み取ろうとした。しかし、逆に、女の手が一斉に私の手を掴みに掛かるのだった。慌てて手を引っ込めたが、全く手遅れで、左右二手に分かれて、全ての女の手が、私の手を掴んだまま、くっついて来て、まるで白っぽい巨大なグローブを嵌めているようだった。振り回しても、一つも振り落とせない。仕方なく、私は、肘を突いて、這って、バケツまで辿り着き、今にも溢れそうな水を口に含んでは、房になった女の手に吐き付けた。そうすれば、女の手は、溶けて流れ出すように思えたのだ。しかし、女の手は、ただ濡れるだけだった。

カサコソ音がするので、そちらを振り返ると、真っ青な山盛りの血の塊に見えていたピクニックの連中が、私の吐いた水で、すっかり遠くの方まで、流されていた。全身の青い血を洗い落として、真っ白な肌が、青い闇の中に、ぼんやり、ポツリポツリと浮かび出ていた。そのまま彼らは、バラバラになって消えて行った。鼠のように動き回る二つのものだけは残って、カサコソと音を立てているのだった。ただ、それは、動きが速すぎて、白っぽいと分かるだけで、形は見て取れなかった。私の手を掴んでいた女の手が、一斉に、私の手を離し、

その二つの動くものの方に向かった。私は、二度とそちらを見ずに、バケツを持って立ち上がり、それと反対方向に歩き出した。直に、銀色の光を受けている所からも遠ざかり、バケツの中で揺れている水の音だけが、頼りだった。

歩き疲れて立ち止まり、バケツの中を見ると、水は全て、外に零れてしまっていて、その底に、白いものが見えた。取り出すと、二枚の女の手だった。その指先は、微かに青と白に染まっていて、私の求める女の手に違いなかった。私は、それを、一枚ずつ両手にしっかり握り、バケツを闇の中に蹴飛ばした。するとそこは、二階建ての建物の前だった。私は、何処かの闇をぐるりと一回りして来ただけだった。

相変わらず灯りは消えたままだが、ガラスの壁に額を当てて中を見ると、銀色の光が、微かに差し込んでいるのが分かった。更に目を凝らすと、そこに、ピクニックの連中が、恐らくほぼ全員、思い思いの恰好で、寛いでいるような様子が見えてきた。私は、若い女が、私が着ていた売り子の青い服を着ているのかどうか、確かめようとしたが、女の姿は見付からなかった。眠そうな目の男も居なかった。（二〇〇一年十月二十五日）

*

*

*

物陰

　円い小さな池の真ん中で、私は平泳ぎをしている。少しも前に進まない。尤も、前に進んだら、池から飛び出てしまいそうで、進まなくてよいのかも知れない。その内に、髭が伸びてくる。髭は、留まる事なくふさふさと伸びて行って、池の中が、髭で真っ黒になった。私は、その場に立ち上がって、池の表面を歩き出した。しかし、前には進めず、体はそこでグルグル回って、髭が体にグルグル巻き付いた。少し高い所の草地で、ほっそりした若い女が、しゃがんで頬杖を突いて、それを見ていた。私の体が回る度に、池は縮んで、もう私がそこを踏ん付ければ、池は、私の足の下に隠れてしまう程になった。私は、髭を顎の直ぐ間近から、両手でちぎった。それはもう、腐り掛けていて、ミシミシと小さな音を立てて、直ぐにちぎれた。

　私の体は、腐った水の匂いがした。私は、女の方に歩き出した。それを見た女は、細い小さな目を丸くして、慌てて立ち上がり、私の顔を見詰めたまま、軽い足取りで一歩一歩後退った。腐った水の匂いを落とすには、泉から湧き出たばかりの澄んだ水で、体を洗わなければと思った。しかし、ここは全く見知らぬ土地だった。女に、泉の場所を聞くしかなかった。私は尚も女の方に進ん

だ。女は、後ろを向いて、走って逃げた。私は、足元の草をちぎって、女の足元目掛けて投げた。草は、風に乗って、地上スレスレに緩い弧を描いて、飛んで行き、女の足に絡まった。女は倒れた。しかし、倒れてしまうと、私は、女を見失った。女が倒れた辺りまでやって来たが、女は見付からなかった。

　その先に、切り立った崖があって、濡れていた。尖った草を突き刺すと、その先から水が滴った。私は、その水を手酌で受けては、体に擦り付けた。丸々と肥えたお婆さんが、ひょこひょことした足取りでやって来て、若い女を見なかったかと聞いて来た。私は、知らないと答えた。お婆さんは、強烈な匂いがした。時間の経った大便と小便の混じった匂いにしか、思えなかった。私は、それをそのまま口にしてしまった。お婆さんは、口を尖らせた険しい顔付きになって、私の胸を強く突いた。そして、私が居た所に立って、私と同じように、草の先に滴る水で体を洗い出した。私は、尻餅を搗いたまま、それを見ていたが、そこは、そのお婆さんの使った水が流れ込む、傾斜のきつい溝の中で、私は、頭を下にして、そこを滑り落ちて行った。

　行き着いた先は、コンクリートで出来た真四角の池だった。その中で、私の体は激しく動き回った。なぜなのかは、分からなかった。自分でそれを止める事は出来なかったし、別に止める必要も感じなかった。私の体は、ただ神経のない操り人形のように動いて、私は、何の痛みも疲れも感じなかったからだ。

寧ろそうしていれば、池の水が、体の匂いを洗い落としてくれそうで、私は、体を動くに任せた。ただそれで池の水は、どんどん外に掻い出されて、遂には、なくなってしまった。四角い顔の肩の角張ったがっしりした男がやって来て、池の水について、私に詰問した。私は何も答えられなかった。答える替わりに、涸れた池の中で、私は体を動かし続けた。もう動きを止めようと思えば止められたに違いないが、男の追及を逃れるために敢えて、動かし続けた。体を止めれば、私は、男の問いに答える以外、する事がなくなってしまう。

池の底は、ゴツゴツしていて、私の体は、傷だらけになっていった。傷は、遂に太い動脈まで達したらしく、血が勢い良く噴き出した。池は、みるみる私の血で満たされた。しかし、私の血だけで、池が満たされるのは、少しおかしい。誰かが隠れて、ホースか何かを突っ込んで、水を入れていたのかも知れない。そんな事を考えていて、私はつい、体を動かすのを已めていた。男は、私の首根っこを掴んで、私の体を池から引っ張り出した。池の水は、真っ青に濁っていた。私は、全身を擦り剥いていて、どこもかしこもズキズキと痛んで、耐え難かった。

私は、男が呼んだ、別の二人の痩せた男に連れられて、医者に行った。二人の男は、途中で消えた。診察室に入ると、草地で見失った女が、一人で椅子に掛けていた。彼女は、少しだけ顎を上げて、私の顔を無表情に見るだけだった。

髪が濡れていて、風呂上がりかも知れなかった。私は、医者が何処にいるか聞いた。女は、口を利いてくれなかった。私は、カッとなって、女の細い首を絞めようとした。前のめりになった私の体は、激しい勢いで女に向かって突き進んだ。女は、何食わぬ顔で、特に急ぐ様子もなく、立ち上がり、自分の椅子を持ち上げて、私を避けた。私の体は、その先の壁に激突した。壁はコンクリートで、私は額を割った。また、私の体の動きが止まらなくなった。私は、骨がズタズタに砕けるまで、壁に体をぶつけ続けた。女は、傍らで、椅子を持ったま、それを黙って見ているようだった。

　それでも、壁も少しずつながら、ぐらつき出した。そうして遂に私は、壁を突き倒した。天井が落ちて来て、女は素早く椅子の下に身を避け、丸く縮まったようだ。私の体は、そこから更に真っ直ぐ前に突き進んだ。しかし、直に脚が冷えて来て、止まった。私は、女の事が気になって、直ぐに引き返した。もう消防が来ていて、瓦礫は全て、横一列に地面に綺麗に並べられていた。グニャグニャになっていた椅子は見付かったが、女は見付からなかった。その代わり、小さな円い池の真ん中で、平泳ぎしている女の写真を見付けた。瓦礫を取り除いた所には、円い池が出来ていた。

　私は、それを持って、会う人毎に見せて回った。ただ写真の中の女は裸だったので、私は、写真を斜めにしか見せなかった。しかし、誰も私に応えてくれ

なかった。碌に、写真を見る者さえいなかった。それはきっと、私の全身の骨が砕けていて、誰の目にも異様に映るからではないだろうか。

　私は、やり方を変えた。写真を見せるのを已めて、ただ私の体付きを、どう思うか聞いて回った。すると多くの者が私の話に乗って来て、私の体の奇妙な所をあげつらって、笑い合った。そこですかさず写真を見せると、例外なく、彼らの体は、白くてつるつるした石に変わった。そして、また私の体が勝手に動いて、その石が砕けるまで、私は、それに体をぶつけ続けた。それで、体の中の砕けた骨は、却って一つに固まって、私の体は、すっかり硬くなって、直に動かなくなった。

　その一部始終を、女は、何処かの物陰から、ジッと見ていたようだった。静かな軽い足取りで私に近付いて来て、私から写真を取り上げ、それをビリビリに細かく破った。

　私は、私が砕いた石ころに向かって、何でもいいから、喋り掛けたくなった。しかし、石の言葉を忘れてしまって、私は一言も言葉が出なかった。私は、ついほんの今まで、石の言葉を知っていたのだった。それを忘れてしまっては、私は、もう死ぬしかなかった。

　私は、崖の上から飛び降りた。しかし、私の体は硬すぎて、私の体が崖を転げ落ちると、崖全体がガラガラと崩れて、私は無傷だった。私は、死ねない体

になっていた。私が目を向けただけで、岩はみるみる砕け、最後にはサラサラの砂になった。直に私の周りは、何処までもすっかり白い砂漠になった。私はもう、死ぬ必要も感じなかった。(二〇〇一年九月二十三日)

＊　　　＊　　　＊

金

コップの縁に息を吹き掛けて、音を鳴らしている者が、そこに居るように思えた。それに気を取られると、私の周りで啜り泣いていた者達が、消えていた。コップの縁を唸らせる息は、大きな風になって、その誰もが居なくなった所を、音もなく吹き抜けた。ただ私だけが、その風に乗って、そこから連れ去られた。何の障害物もなかった。その風が冷たいのを知っているのは私だけで、私は、私の体を凍らせて、その冷たさを、誰かに伝えようとした。しかし、誰も居ない事が分かっていたから、そうしてみただけかも知れなかった。

その風に連れ去られた先には、海の水だけがあって、陸地は跡形もなく消えていた。陸地ばかりではなく、海の底もなかった。ただ水ばかりが浮かんでい

た。そこに、小さな舟が浮かんでいるのを見付けた。浮かんでいると言っても、水の中に浮かんでいる。その水は、この星の全ての海の水が、一塊りになっているものに違いないのだ。どんな大きな船でも、小舟に見えてしまうだろう。実際、他に比べるものがないのだから、舟の大きさは測りようがない。いや、舟の形をしているかどうかも定かではない。水はどのようにも捩れて、全く別の形のものを舟に見せているだけかも知れない。

　脚が四本生えているようにも見えてくる。それなら、それは、机か、四本脚の動物を象った彫刻かも知れない。いや、舟以外のものであったら、私は、この水の塊の前から立ち去るしかないだろう。しかし、風の他に私をここから連れ去れるものはなく、ここはその風の果てた所だ。もう何処にも立ち去れる筈はない。それは舟でなければならない。私は海を揺らした。海を揺らす？　では私が海なのか。舟も揺れた。揺れている間は脚が生えたりはしない。そして、それが決して舟以外のものであり得ないと見えた瞬間、私はそれに乗り移った。

　私は、操舵室で舵を握っていた。薄暗い中に、広い甲板が白っぽく見下ろされ、恐ろしく大きな船だった。制服姿の二人の男が、私の両脇に少し下がって立って、手にした紙コップの中を見詰めていた。海は真っ暗で、窓は、大波を次々に被った。外で女と子供の喚き声が遠く微かに聞こえたが、操舵室の中は静まり返っていた。女の喚き声だけでは心配だが、子供の喚き声が聞こえる内

は安心だろう。子供は恐怖に駆られれば声を失う筈だ。そんな事を三人で話し合っていた。

ただその子供の喚き声によって、操舵室は少しずつ縮んでいた。私達三人は、もう、体をぴったり寄せ合わせなければならなかった。しかし、このまま何もしないでいたら圧死してしまうのは間違いない。たとえ船が操縦不可能になっても、操舵室をぶち壊す事で三人の意見が纏まった。私だけは舵を握ったままだったが、二人は、床と壁と天井の抜ける限りの釘を抜いて行った。直に壁も天井もバラバラになり、生暖かい風と生暖かい波が入り込んできた。

私達三人は、一艘ずつの小舟になっていた。私は真っ直ぐ進み、右の小舟男は右に、左の小舟男は左に、それぞれ逸れて、直に見えなくなった。二人を見失うと私は、ギシギシ軋む小舟にしがみついていて、何度もそこから滑り落ちそうになった。両腕を回して、小舟を抱えるようにしていなければならなかった。陸地がない事が頭に浮かんだ。小舟にしがみつこうが、そこから投げ出されようが、何も変わらないのだ。ただ何処まで行っても、水だけを相手にしなければならない。しがみついている自らの姿が滑稽に思えて、私は力を抜いた。

すると私は、ボートではなく、丸太を抱き抱えるようにして、全身を、針金で丸太に縛り付けられていた。

丸太私は吐き気を催して、水ばかりを吐き続けた。吐く水がなくなると、私は丸

太を囓った。その度に丸太は、水に溶けた。丸太が溶けると、私もまた水に溶けた。
嵐は収まり、水は青く静かに輝いた。私は、その全体を見渡せる所から、それを眺めていた。その水の塊を両手で受けるようにすると、丸ごとそれは降りてきた。しかし、その青い塊は、私の掌を透き通って、真っ直ぐ下に落ちていった。
喉がカラカラに渇いていて、水を求めて、白い平面の上を、私は歩き出していた。しかし、この星の全ての水が、真下に向かって落ちて消えたのを、見たばかりではないか。歩いて行ける先に、水がない事は分かり切っている。降りて行ける方法が見付かればいいのだが、見渡す限り、白く平坦なだけだった。
そこで何人もの人間と擦れ違った。彼らは一様に、私の顔を覗き込んでは、私が喉がカラカラで苦しんでいるのを見抜き、水を汲み上げて来る男の事を、私の耳の囁いた。歩き回った甲斐あって、私はその男を少し遠くに見付けた。
そこは少しだけ窪んでいて、人の足跡が十字路を作っていた。男は、下半身を毛皮で覆っていて、その中に水が溜め込んであるようだった。その前に五、六人が列を作り、金を払って、平たい皿に水を注いでもらっては、嬉しそうに飲んでいた。無一文の私は、何とか金を稼がねばならなかった。
私は、彼らに背を向けて、歩き続けた。裸足の女に行き会った。彼女は、な

くした靴を探していて、私にも探すのを手伝うように頼んだ。私は、断るのも面倒なので探す振りだけした。それを突っ立ったまま見ているだけの女の気配を背中に感じて、振り返ると、女は居なくて、私の背より高い太い杭が一本、打ち付けられてあった。

　私は裸になって、抱き付くようにして、自分をその杭に縛り付けた。そうして、そこで、誰かが私の背中を鞭で十回打つ毎に、私は、金を貰える事になった。長い行列が出来る程の盛況で、直に金は貯まった。数えた訳ではないが、一生掛かっても飲みきれない程の水を買える金が貯まったに違いなく、さっさとこの痛い稼業から足を洗おうと思った。しかし、自分を括り付けた縄を解く事が出来なかった。行列に向かって、もう今日はお仕舞いなんだと幾ら言っても、誰も私の言葉など無視して、黙って暗い顔で、ただただ鞭で私を打っては、金を置いて行くのだった。鞭打たれている間は、ずっと歯を食いしばっていなければならず、私が声を掛けられるのは、次の者に鞭が渡されて、鞭打ちが始まるまでの、ほんの短い間だけで、新しい客の目は、もう私の血塗れの背中に釘付けで、私の言う事など、まるで耳に入らないようだ。仕方なく、私は、諦めて、もう何も言わず、ただ打たれるに任せた。剥き出しの背骨に、直に鞭が当たるような虚ろな響きすら耳に入った。ただ、痛みは、初めからずっと変わらなかった。それでもやはり、体力は消耗して行く。目の前がぼんやりして

くる。足元を見返ると、節くれ立った汚れた指で、私のお金を、堂々と持ち去る者がいる。振り返ると、そいつが私を鞭で打っていて、客はお金をそいつに払っている。何時の間にか、そいつが私を鞭で打っては、お金を取るようになっていたのだ。金は全てそいつの懐に収まった。日焼けした顔の、目つきの鋭いずんぐりした男だった。

私を助けてくれそうな身内の顔を次々に思い浮かべたが、もう皆死んでしまっていた。陽が暮れて、この見世物が終わるのを待つしかなかった。しかし、辺りが暗くなると、四方に篝火が焚かれ、見世物は続けられた。寧ろ、夜になってからが本番かも知れなかった。すっかり人集りに囲まれていた。

直ぐ側の篝火の熱が伝って、背中がグングン熱くなると、鞭の痛みも増すばかりだった。私は、目を見開いて、犇めき合っている客の方を見た。彼らの中に、私を救い出せる者を求めるしかない。すると闇に浮かび上がるのは、多くは子供の顔だった。子供でないにしても、子供のような顔の、人の良さそうな若者ばかりだった。彼らは皆、涙を流していた。一体何を泣く事があるのか。どうやら私を鞭打っているヤツが曰っている口上に泣いているらしかった。そして、愁嘆場が来て口上が盛り上がる度に、彼らは、啜り泣きの声を上げながら、花を一輪懐から取り出して、それを或る決められた一ヶ所に投げるのだった。そこにはもう花が山になっていた。

花など何の役にも立たない。私は、がっかりした。もし金ならば、この見世物が終わった後に、ひょっとして私は、鞭打ち屋と交渉して、幾らか分け前に与れるかも知れない。花では仕方がない。

人集りの中から、四、五歳くらいの男の子が、私に近付いて来て、花を私の口元に差し出した。顔にヒンヤリしたものを感じ、私は迷わずそれに食らい付いた。花びらは水分を含むだろうし、花粉も蜜もあるだろう。花を噛み砕いて飲み込むと、鞭打たれながらでも、私は、声が出せるようになった。私は、何事かを叫んだ。その声は朗々と通って、人集りの隅々にまで行き渡るようだった。

「涙など流すな。火の熱が涙に伝って、目を焼き焦がすぞ。」

そう私は、何度も叫んでいた。

すると、彼らは目を押さえて、盛んに呻き声を上げ、一斉に地面を転げ回った。花の山は蹴散らされ、もう見世物どころではなくなった。鞭打ち屋は、警察に連行され、花も全て没収された。篝火が私から遠ざけられると、私は、更に大声を張り上げて、水を呼んだ。家より高い水が押し寄せてきて、あっと言う間に篝火を消し、水はそのまま全てを呑み込んだ。何も見えないし何も聞こえなかった。ただ水の流れる勢いだけが全身で感じ取れた。どれ程か時間が経って、水が引いた。見上げると、高い所に小さな円い月が浮かんでいて、その

周りの夜空を青く透き通らせていた。杭に体を括り付けた私だけが、流されずに残ったようだ。腹一杯水を飲んでいて、体を揺らすと、チャポンチャポンと腹が鳴った。その音を聞きながら、私は、安らかな気分で、息を引き取った。
　死んだ私の体は、まだ温かい内に、直ぐにすっかり水になって、流れて行った。それが或る一ヶ所に溜まると、それは、この星の全ての水だった。尤もそれをそのように見る事が出来るのは、死んだ私だけに違いない。いや、必ずそうであって欲しかった。そして、私は、私だけで、傍らでその水をずっと眺めていたかった。しかし暫くすると、また警察がやって来て、その水の溜まっている周りを鍬で切り取って、水ごと持ち去った。
　私はまた、水を探しに出掛けるしかなかった。そうするのは初めてではない。私は、水を失っては、その度にまた、水を探しに出掛けていた。もう私は、ずっと前に死んでいたのだ。（二〇〇一年九月二十五日）

*　　　*　　　*

（鈍器→水掻き→黴→悪態→階段）

鈍器

毎日のように、私は、黒く塗られた戸も窓もない、ただのっぺりした大きな建物の脇を、通り過ぎていた。直ぐ近くから屋根を見上げると、屋根の上に、薄い色の小さな昼の月を見付けた。もう何度も、その同じ辺りに月を見た。その建物の開け閉めは、壁を丸ごと取り外したり、取り付けたりするに違いない。そんな風に見える。その取り外しの利く壁の端に、隙間を見付けた。私は、急いで駆け寄って、そこから中を覗いた。中が燃えているような気がしたからだ。しかし、真っ暗で何も見えなかった。いや、よく見ると、その隙間に黒い幕か何かが張られていた。中が覗けないようにされているのだ。私は今度は、急いでそこから離れた。私が覗いていたのを、誰かに見られてしまったようで心配になった。地面を這うように枝を伸ばす低い桜の木が、葉を青々と繁らせていて、その中に誰かが身を隠していて、私のした事をずっと見ていたかも知れない。私は、その低い枝の下を潜った。誰も居なかったが、そこから崖が下っていて、そちらに逃げてしまったとしたら、もう分からない。

池の脇の小径を行くと、また黒い大きな建物の前に戻って来ていて、山羊が杭に繋がれていて、そこから小径は、右に折れた。その辺りはずっと平らな草地だった。小径はその草地に吸い込まれるように消えた。そこから左に、狭いコンクリートの上りの坂道が続く。両側は、石垣で、その上は、葱畑だった。

　その坂道を上り始めて直ぐ、私は、後ろを振り返った。池の直ぐ向こうに、大きな木が生えていて、その姿を池の水に映していた。ここはもう何度も通っているのに、その木には見覚えがなかった。そこへ空から、二羽の燕が、絡み合いながら、落ちてきた。それを池辺で、毛皮を着た若い女が睨み上げている。胴体は全て毛皮で覆われていたが、腕と脚は、剥き出しだった。女は、何か小さなガラクタのようなものを、背負っていた。それは、私には、翼が生えているように見えた。燕は、その木の中に埋もれて見えなくなった。女は、背負っていた物を、胸の方に持って来て、身構えた。弓のような飛び道具に違いない。もしそれで燕を射落としたら、燕は池に落ちて、池の水は血で汚されるだろう。それを見る私の目も、汚されるに違いない。私は、慌てて向き直り、坂を上り始めた。

　坂の上から卵が転がり落ちてきた。コンクリートの上を飛び跳ねるように転がって、どうして卵は割れないのだろうか。それとも、それは卵ではないのか。私は、いきなり、皮を剥いた茹で卵を、丸々一個、吐いた。それは一個では済まなかった。私は、殆ど四つん這いのような姿勢で、次々に、同じものを吐き出した。どれもネバネバしていて、坂を転げ落ちる事はなかった。胃が空っぽになったのが分かったので、私は、石垣に手を付いて、ノロノロと立ち上がった。足元に、茹で卵が綺麗な三角に積み上がっていて、それを上から順に手に

取って、割いて、中から黄身だけ取り出した。黄身は、どれも硬くてコロコロしていて、一つとして形が崩れる事はなかった。それは両手一杯になったが、私はそれをどうしていいか分からなかった。仕方なく、私は、それに息を吹き掛けた。すると、それは、乾燥したトウモロコシのような粒々になって、風に舞っていった。掌が真っ黄色に染まっていた。私は、一所懸命指を舐めて、その黄色を取ろうとした。

　鳥の耳を掠めたものを目で追うと、真っ白な小さな鳥だった。真っ白では、その鳥の種類は、分かりようがない。見上げると、何羽も、私の頭の上を、その同じ鳥達が旋回している。私は、頭に手を遣った。髪の中に、風で舞った黄色の粒々が幾つも入り込んでいて、鳥達はそれを狙っているに違いなかった。私は、頭を掻きむしった。しかし、直ぐに已めた。掌の黄色が、髪の毛にも染まってしまうかも知れない。鳥達は、その粒々の中身でなく、ただ黄色を目掛けて襲い掛かってくるのかも知れないのだ。私は、早足に坂を上った。転がり落ちてきた卵を、立てて続けに踏んだ。それらは石のように硬くて、私は足を滑らせて、起き上がっても直ぐにまた、ひっくり返った。そうして何度か繰り返す内に、坂を上り切った。

　後ろから、若い女の金切り声が響いて来た。その声で、池の水面を震わせる音まで聞こえてきた。金切り声が已んでも、その水の音だけが、耳の中に残っ

た。私は、耳の中に爪楊枝を突っ込んで、その音を掻き出そうと思い、ポケットに爪楊枝を探った。ポケットの中は水浸しだった。手を出してみると、その水で黄色が落ちていた。私は、その場でズボンを脱いで、逆さまにした。黄色い水が、坂を流れ落ちたが、コンクリートは水を弾き、道は白いままだった。その黄色い水が池に流れ込むのを見て取ると、私は、自分の両目が、ドロドロの茹で卵のように思えた。私の目ばかりか、池もまた、ドロドロの茹で卵のようなのだ。私は、池を見習って、仰向けになった。それで何とか、目の穴から目玉がこぼれ落ちるのは防げた筈だ。私の目は、白い鳥達に好き勝手に啄まれた。しかし、啄まれたのは、ドロドロの部分だけだった。私の目は、みるみる澄んで、空の奥まで見通せるようだった。空の奥は、銀色のピカピカの鏡だったが、それはただ銀色で、何も映さなかった。。

　私は、立ち上がった。目が綺麗になった分、体がひどく汚れているようだった。鳥の翼が運んできた埃が、体中にこびり付いていたに違いない。近くで火事があったらしく、池の水は、消防が殆ど汲み上げてしまったようだ。若い女は、桜の木の奥の崖に沿った白い石段を駆け上って、消えていった。剥き出しの脚が、ひどく汚れているように見えた。

　坂の上には、平屋の小さな家があった。部屋は二つしかなくて、東側の部屋は、窓から青空が見渡せて、明るかったが、少し寒かった。西側の部屋には窓

はなくて、蛍光灯の灯りの下で、布団の上の寝間着の女が、上体を起こして、編み機で毛糸を編んでいた。女の体温が籠もって、こちらは、暖かかった。私は、二つの部屋の境目にあるドアから、その奥へと進んだ。そこは、部屋より５０センチくらい低くなっていて、直ぐ前が漆喰の壁で、細長い通路のようになっていた。床張りではなく、地面だった。暗い中で、上半身裸の小さな女の子が、小瓶から軟膏を指に取って、体に擦り込ませていた。私が、彼女に頬ずりしようとすると、私もまた、小さな子供になっていた。後ろで物音がした。振り返ると、寝間着の女がドアに凭れ掛かって、私達の方を見ていた。私は、服を脱ぐように、子供の姿を脱ぎ捨てて、また元に戻った。女の子は、背中を風船のように脹らませた。暗い中に浮かび出た、その丸く白い背中も、私の体と同じように、ひどく汚れているようだった。私は、暗さに目を慣らして、もっとよくその汚れを見ようと、思い切り目を見開いた。すると、目もまた汚れてゆくようだった。目は痒くなって、擦らずにはいられなくなった。しかし、寝間着の女が、私に向かって、目を擦ってはいけないと盛んに忠告するので、私は、どうしていいか分からなくなった。

　どうしたらいいかを、私は、女の子に尋ねた。それとも、大きな丸い背中をしているなら、もう成長を遂げた女だろうか。彼女は柔らかく首を何度も横に振った。彼女がまだ子供であるのが、そのおずおずした首の振り方から分かっ

た。私は、彼女の背中に、自分の目を擦り付けた。女の子は、黙ってされるに任せた。私は、痒いなりに、目は気持ちよくなって来た。暫く暗い中でそうしていると、また、寝間着の女の声がした。何かを催促しているようだった。目を開けると、女の子の姿はなくて、私は、丸く腫れた黄色の指で、盛んに自分の目を擦っていたのだった。

　足元の小瓶を拾い上げて見ると、軟膏は、瓶の底まで使い果たされていた。私は、唾を指に吐き掛けては、指を擦った。唾が黄色くドロドロになると、それを小瓶に入れていった。小瓶はいっぱいになったが、指はまだ黄色だった。寝間着の女が、ドアの所から降りてきて、私の右手を、針と糸で壁に縫い付けた。私は、右手を思い切り引っ張った。黄色い手袋のような右手だけが、壁に縫い付けられたまま残った。左手も同じようにしたかったが、もう針と糸がなかった。私は、小瓶を右手で掴んで、地面に叩き付けた。地面と言っても、岩肌が剥き出しになっていて、小瓶は、割れる事なく、高く鋭い音を立てて、私の顎目掛けて跳ね返った。私の顎は砕けただろうか。それを確かめたくなくて、私は、自ら進んで意識をなくそうとした。しかし、寝間着の女が、私の頭に冷たい液体を注ぎ掛けたので、私の意識は、後頭部の冷たさを振り払う事が出来なかった。女は、私に、顎はどうもなっていないと言った。舌で、濡れた唇を舐めると、牛乳の味がした。

私は、顎をさすりながら、瓶を探した。直ぐにそれは足元に見付かった。瓶は空になっていたので、まだ黄色のままの左手に唾を吐き掛けては、その黄色くなった唾を、また瓶に詰めていった。瓶がいっぱいになって、左手も元の黄色に戻ったところで、やっと私は、その瓶が別の瓶だと気付いた。それは、初めの瓶よりずっと細長くて、ガラスの厚みがなくて、落としたら直ぐに割れそうだった。初めの瓶を見付けようと、キョロキョロしていると、女が、そういう事はみっともないから已めろと言った。その女の声が、鈍器のように私の後頭部を打った。意識を失い掛けた私は、慌てて、瓶を口に付け、舌を尖らせて、瓶の中の黄色の軟膏の味を確かめようとした。女はまた、みっともないから已めろと言った。その声がまた、私の後頭部を打つ前に、私は、その声から身を躱しながら、漆喰の壁にぴたりと背中を付けた。壁の冷たさを感じ取ると、私の全身から、汗が噴き出た。漆喰が溶けて、私は、壁の中に埋まりそうになった。女が、ぶつぶつ言いながら、私の手を取って、私の体を壁から引き剥がした。私の体は、すっかり強張って、自分ではどうにも出来ず、女に全て委ねるしかなかった。女は、漆喰の壁と壁と間の狭い引き戸を、ガラガラと重そうに開けて、その奥に私の体を押し込んだ。私は、直立の姿勢のまま、独楽のようにクルクル回りながら、そこの明るさに目を眩ませた。（二〇〇一年九月二十七日）

水掻き

小さな部屋だと分かって、直ぐに、そこは真っ白になった。手探りすると、その部屋の狭さが、手に取れるようだった。部屋の四角の形が、隅々まで分かった。後は、明るさだけが邪魔なのだ。しかし、明るさは、そこに居座ったまま、決して私の目に、どんな小さな薄い影も見せなかった。次第に、私の頭の中までが明るくなり、遂に、頭ごと部屋の明るさに溶けた。私は、膝を付いて、それきり、動く事も考える事も出来なくなった。ただ、全身を激しく振り立てている自らの姿だけが、真っ白な中を、蝶のように舞って、目障りで仕方がなかった。

その姿も、どうにか消えたようだ。ただ多分それには、かなりな時間が必要だったただろう。私は、その部屋で、二人で風呂に入っていた。天井に窓があるかも知れず、その外から、真っ白な光が落ちて来るようだった。湯船の辺りは、暗くて、湯気が立っていて、ぼんやりしていた。二人とも私だった。多分、男の私と、女の私だ。それとも、まだこれから男と女になる私かも知れなかった。ただどちらが男になって、どちらが女になるかは、もう分かっていて、見間違う事はないだろう。

狭い筈の部屋だったが、奥にずっと長いようでもあり、その先は広くて、その広い部屋へと、長い階段を降りてくる、若い女の剥き出しの細い脚が見て取れた。その女は、腰の辺りに小さな木の桶を抱えていた。

女の私だけが、湯船から出て、饐えた匂いのする分厚くゴワゴワしたタオルに、石鹸を付けて、体を洗い出した。ドアが開いていて、風呂場の直ぐ外に、顔付きも体付きも牛のような、モジャモジャ頭の中年の女が、姿を見せた。それが先程の寝間着の女だとは、直ぐに分かったが、何を着ているかは、よく分からなかった。或いは、何か、透き通るような生地の、フワフワした服のようでもあるが、女の体に纏わり付いた湯気が、そう見えるだけかも知れなかった。

女は、男の私に、笑いかけながら、湯船を出て、女の私と一緒に体を洗うように促した。男の私は、そうしたいとも、そうしたくないとも、思わなかったが、すっかりのぼせていて、やっと目の前に見て取れた蛇口を捻って、水を足すのがやっとだった。それにどうやら、足の裏が吸盤になっていて、立ち上がる事は出来ても、湯船からは出られそうになかった。女の私は、体を洗い終わって、桶に汲んだお湯で、石鹸を洗い流した。ツルツルの赤く染まった肌の丸い背中が、斜めに浮き上がった。男の私は、それに見入って、背骨の筋を探したが、柔らかそうな肉ばかりだった。

女の私が、また湯船に入ろうとすると、風呂桶は少し縮んで、二人の私が並

んで入れば、もう全くなった。それを見て、牛のような女が、笑い声を立てた。二人の私は、額を寄せ合って、階段を降りてくる細い脚を見たかどうか、確かめ合った。二人とも、それを見ていた。私達は、改めて周りに目を遣った。暗くて湯気が立ち込めてはいても、何とか隅々まで見渡せた。狭い風呂場に、その脚の持ち主を見付けられる筈もない。そんな事は分かっている。私達は、替わりに、白い大きなタイルの割れ目に、砂粒のような小さな茶色の蛙を見付けた。女の私が、それは蛙ではなくて、虫かも知れないと囁いた。男の私は、もしそれが虫だとすれば、お湯の中ですっかりふやけた尻の穴が、その虫に狙われているようで恐ろしくなった。男の私がそれを口にすると、女の私も、恐ろしくなった。虫は、尻の穴から入り込んで、私の体の中に卵を産み、それは直ぐに孵って、体の中を駆け回りそうだった。私達は、湯の中で力み返って、唾に毒を含ませ、そのタイルの隙間を狙って、唾を何度か吐いた。唾まみれのその蛙か虫は、脚を細かくばたつかせ、そこを動けなくなったようだった。ただ、毒は少しも効いていないのではないか。効かないどころか、毒を喰らって、ますます元気になっているに違いない。もし唾の中から這い出したら、

　私達は、何をされるか分からない。

　女の私は、喉の渇きに我慢出来なくなって、湯から上がった。その弾みに、湯船から溢れたお湯が、そのタイルの割れ目に掛かり、蛙か虫を押し流した。

男の私は、それが素早く壁を這って、天井の隅に張り付いたように思えて仕方がなかった。それとも、見えなくなって直ぐ、それはもう、尻の穴から私の体の中に入り込んでいて、目をキョロキョロさせながら、私の腑を品定めしているかも知れなかった。たとえそいつが、私の腑を食い尽くしたとしても、ずっと私の体の中に閉じ込めて、死ぬのを待つべきだろうか。それとも、私の腹を割いて、無理矢理そいつを引きずり出すべきか。それより私は、風呂桶の縁に額を打ち付けて、気絶したかった。それで、ジッとその縁を見詰めていた。女の私は、その縁に手を乗せて、湯船のお湯を飲もうとしていた。男の私は、已めるように声を掛けたが、声は、湯気に掻き消され、少しも届かなかった。女の私の直ぐ後ろに、牛のような女が、ぴったりくっついて、身を隠すようにしていた。男の私と目が合うと、女は、黄色い歯を出して笑った。作り笑顔のように見えた。ゴワゴワした乾燥肌の手が、女の私のしっとり濡れた両肩に、乗せられていた。男の私は、それを払い除けようと、少し前に体を押し出した。それだけで、吐き気に襲われた。ただ口をきつく結んで、表には出さずに済んだ。女の私が、お湯を飲もうとするのを已めて、自分の足の指を弄りだした。足の指は、皮が剥け掛けていて、それを更に大きく剥いてしまった方がいいのか、迷っていた。牛のような女が、そろりそろりと立ち上がった。男の私には、湯気で、彼女の着ているものは分からないままだった。

二人の女は、声を揃えて、男の私の両腕を抱えて、持ち上げるようにした。男の私の体は、湯船の外に引っ張り出された。ゴーゴーと物凄い水音が湧き起こった。天井で、湯数を増やしていた、小さな茶色の蛙が、ボトボトと落ちてきた。しかし、軽く息を吹き掛けただけで、それらは何処かに吹っ飛んだ。それより問題は、男の私の足の裏だった。吸盤がちぎれて、肉が剥き出しで、血が滲み出てきて、止まらなかった。ちぎれた吸盤は、風呂桶の底に張り付いたままだった。男の私は、両腕を突っ込んで、それを取り出そうとしたが、手が届かなかった。男の両手の指は、湯の中を虚しくさまよった。湯の中を漂っている小さな蛙が、その指に食い付いて、血を吸い出した。男の私は、それを一々もう片方の手の指で摘んでは、潰していった。それでも、蛙は次々に、指ばかりか、掌にも手の甲にも食い付いてきた。腋の下が、しっかり風呂桶の縁を挟んでいて、体を引き揚げる事が出来なかった。そうしている内に、両手に、水掻きと吸盤が生えて来た。それで、水を掻くと、男の私の体は、浮き上がった。湯船の奥の壁は、ゴツゴツした黒い岩肌が、剥き出しになっていた。そこに両手を突いて、吸盤を吸い付かせた。

見下ろすと、湯船の中のお湯が、潰れた蛙の腹から飛び出した、私の血と蛙の腑で、汚れているのが分かった。牛のような女が、女の私を風呂場から外に出した。それから彼女は、その汚れたお湯を、ズルズルと音を立てながら、さ

も嬉しそうに飲み始めた。
「どうして、そんなものを飲むんだ。美味しぃのか？」と、誰かが、低い声で、彼女に尋ねた。
しかし、私には直ぐに、それが牛のような女自らの声だと分かった。
「どうして、自分で自分に質問するんですか？」と、私は聞いた。
「※※ちゃん、それは、大人になれば分かるよ。それまでのお楽しみぃ。それより、そんな所にいたら、風邪引くから、降りてきなさい。」
しかし、降りるには、一度また、その汚れたお湯の中に入らなければならなかった。私は躊躇った。
「ああ、そういう事。じゃあ、そっちから回り込んで来て。」
私がそちらを見ると、牛のような女が、右の大きな乳房を出して、女の私に、乳を与えていた。男の私は、その姿が我慢出来ずに、女の私の背中を掴んで、引っ張った。女の私の体は、岩に叩き付けられ、牛のような女の乳房から、白い乳が噴き出して、黒い岩肌を真っ白にした。乳は、ゴーゴーと水音を立てて、湯船に流れ込んだ。湯は直に溢れ出し、湯船は、乳で真っ白になった。男の私は、その中に飛び込もうと思うのだが、岩に吸い付いたままの手の吸盤が剥がれなかった。女の私は、乳で全身真っ白になったまま、独り、岩を辿って湯船の脇まで降り、両手両足を使ってその縁に乗り、そこから、その向こうに飛び

降りた。男の私は、女の私に助けを求めたが、その声は届かなかったようだ。女の私は、体を拭いて、風呂場から出て行った。牛のような女は、体を柔らかく捻って、体中に掛かった自分の乳を舐めていた。男の私は、どうしていいか、分からなくなった。

「どうしたらいいんだ。」と、私は、叫んだ積もりだった。

しかし、私の声は、私の体から、ほんの少しも、外に出る事はなかった。それでも私は、叫ぼうとし続けた。そのせいか、岩肌が脆くなってきて、今にも吸盤から剥がれそうに思えてきた。それはそのようだが、一方で、私の体が、岩のように硬くなって、その脆くなった岩の壁の中に突き刺さってゆく。私の体は、前のめりに一回転し、牛のような女の直ぐ隣に来た。牛のような女が息を吐くと、それは乳を含んで、真っ白で、その雫さえ見て取れた。私は、足元にある石鹸を見付け、それを擦り付けて、また体を洗い出した。すると、牛のような女の姿は、その石鹸に洗い流されるようにして、消えた。その消えた辺りに目を凝らすと、湯気が、女の姿をしていて、私は、その湯気を、その女の姿に見誤っていただけかも知れなかった。そちらに腕を伸ばしてみると、また私の体は、前のめりに一回転し、真下に、私の血と蛙の腑で汚れたままのお湯を満たした湯船が見えて、私は、そこに向かって、落ちて行くのだった。後ろから、牛のような女の、私を優しく呼ぶ声が聞こえた。それは、ひどくのんび

りした、間の抜けたような調子だったので、私は、それに安心して、自分がこのまま、汚れたお湯に落ちる事はないだろうと考えてみた。しかし、そんな風に考えてしまっては、いけなかったのだ。そこで私は、真剣に、苦境を脱する方法を考えるべきだった。そうすれば、何か、お湯に落ちないで済む途を、探り当てられたかも知れなかった。(二〇〇一年九月二十九日)

黴

女の私は、青い羽根の小さな扇風機の回っている部屋で、脚を投げ出し、背中を丸めて、ぬるい蜜柑ジュースを飲もうとしていた。ジュースの入った湯飲みの表面を見ると、濃紺の小さな文字が、びっしり書き込まれているのが、浮かび上がった。一つ一つの文字の形は、どれ程小さくても見て取れたが、私は、それを読めなかった。しかし、二、三年前に、それらを何度も書き取らされた事を思い出した。また紙に書き取れば、読めるように思えた。蜜柑ジュースを急いで飲み干すと、扇風機が、カラカラと音を立てて踊り出し、その下から、ノートと鉛筆が見付かった。ジュースは、水の味さえしなかった。手の甲で、唇に付いたジュースを拭うと、鉄の錆びた味がした。湯飲みの底に、錆びた鉄

片が溜まっているのが、覗けた。私は、右手の指で、それらを全て掻き取り、左の掌に乗せた。そして、それをしっかり握り、それが必要になるまで、決して掌を開かない事にした。

　机はなかったので、床にノートと湯飲みを置いて、蹲るような姿勢で、文字を写し始めた。脇を何人もの人が歩いて行くようだったが、私は、顔を上げてそれを確かめるような事はしなかった。たまにノートの直ぐ脇を踏んで行く足が、目に入るだけだった。それは、底の厚い、大きな登山靴を履いていた。時々、頭の直ぐ上で、恐らく三、四人くらいが集まって、話し込むような事もあった。そんな時、文字を書き写している筈が、その彼らの依頼に応じて、彼らが見た幽霊の絵を、ノートに書き込んでしまうのだった。もちろんそうだと分かれば、その頁は、直ぐに破って捨てた。彼らは、その紙を、空中で受け取って、立ち去った。私はまた、何もなかったかのように、文字を書き写した。

　文字を全て写し終えると、人の気配が消えていた。それればかりか、書き写した筈の紙の上の文字も消えていた。湯飲みを見ると、真っ白で艶々していた。私は、慌ててノートを閉じた。真っ白な紙を、見続けていれば、その白さが頭に乗り移って、頭まで真っ白になってしまいそうだったからだ。頼りは、右手の指に挟まった鉛筆だけだった。その鉛筆だけが、文字の姿を憶えているに違いない。私は、他の鉛筆と間違えないように、その鉛筆の特徴を、目に焼き付

けようとした。しかし、それもまた、真っ白で、一つも特徴を見付けられなかった。噛んで歯形を付けようとすると、風呂に入る前に、部屋中の鉛筆に、歯形を付けて回った事が思い出された。では、それらの鉛筆は何処にあるのか。私は、立ち上がって、ゆっくり体を回転させながら、部屋の隅を、なぞるように見回していった。すると、その部屋の隅までを照らしている光が、どうやら自分から出ているのに気付いた。部屋には、扇風機の他に何も置かれていない。他にものを隠せる所の全くない部屋だった。ただそれは、私から出た光で照らされた部屋を、私自身が見ているからそう見えるだけかも知れなかった。しかし、どうしようもないのだ。私は、またその場に蹲り、出来るだけ体を丸めて、小さくなった。それから、鉛筆の先を口に含んだ。それは溶けて、唾に混じった。私は、口を半開きにして、少しだけ苦い涎を、だらだらと途切れる事なく垂れ流した。それが、真っ黒な一筋の流れになって、床をくねくねと這って行くのが見えた。床は、微かに揺れているようで、その唾の流れの表面が、細かく震えているのが、見て取れた。その震えの一つ一つに、正確に目を凝らせば、そこに文字を読め取れる事は明らかだったが、そのための視力を、私は持ち合わせていないようだった。腕を伸ばし、その直ぐ上に右の掌を翳した。掌に震えが伝わった。ゆっくり腕を縮め、掌を唇に当て、その震えを口に含んだ。それで、私の口は、床の微かな揺れを、コントロール出来るようだった。私は、

顎を震わせて、奥歯を細かくカチカチ鳴らした。床の揺れが、全身で感じ取れるまでになった。真っ白にされた私の頭が、その揺れによって、端から黒く塗られていった。その頭の中の黒く塗り潰された表面が、細かく捩れて、そこから一斉に滲み出た小さな文字を、私の喉の奥に、一度に数え切れない程、送り付けた。私は、ひどい吐き気を催したが、吐こうとすればする程、文字は、喉の奥深くに入り込み、その文字のための通路が、緩い螺旋を描きながら、体の中に何処までも通じてゆくようだった。牛のような女が入って来て、食事の時間だと告げた。私は、鉛筆を胸のポケットにしまい、左の掌を、改めてきつく握り直した。

　女の私は、硬くて赤い肉が大好きで、それをよく知っている牛のような女が、自分の脇腹から肉を摘み出しては、鉄板の上に乗せ、そのジュージューと焼けた肉を、私の目の前に翳した。私は、亀のように首を伸ばして、それに次々にかぶりつき、肉を剥き出した女の脇腹を、潤んだ目で見詰めて、もっと食べたいと、催促した。牛のような女は、焼き肉の煙にもじゃもじゃの髪を振り立たせて、笑い声を上げ、太くてゴワゴワした白い指で、脇腹から、次々に肉を掴みだした。その内に、肉は、掴み出さなくても、独りでに脇腹からはみ出してきた。女の代わりに、私が、その肉を掴み取っては、鉄板の上に、乱暴に投げ出していった。牛のような女は、脇腹の肉はもうすっかり私に任せ、ただ腹を

突きだし、嬉しそうに両脚を投げ出したが、途端に汗が噴き出てきて、彼女は、扇風機を引き寄せた。脇腹の肉がその風に当たって、白く輝いた。私は、その白さが気に入って、それをちぎって、鉄板には置かず、ナマのまま口にした。そのヌルリと冷たい感触にゾッとして、私は、それを慌てて呑み下した。すると、それが、胃袋の方には落ちて行かず、喉の奥の文字のための通路を下って行くのが分かった。私が、その事を牛のような女に言うと、彼女は、急に険しい目つきになって立ち上がり、熱いままの鉄板とコンロを抱え上げて、部屋を出て行こうとした。私は、その足首を掴んだ。女は、そこで鉄板とコンロを持ったまま、わざとのような大仰な身振りで、前に倒れた。脇腹の傷口が、目に入った。それは、奥に窪んでいて、そこから真っ赤な穴が、体の奥に通じて行くようだった。私は、また吐き気を催し、その傷口に向かって吐こうとしたが、何も出てこなかった。女は立ち上がり、頬を窪ませて口を開けっぱなしにし、女の腰にしがみついている私を、きつい調子で罵った。女は、私の肩を突いて、部屋を出ていった。床には、半分火の通った肉片が、疎らに散らばっていた。私は、それを四つん這いになって、順々に食べていった。それを食べれば食べる程、私は、ほっそりした体付きになって行くようだった。牛のような女が、ドアから顔だけ出して、一転上機嫌の明るい声で、その私の体型に触れると、私は、顔が赤くなった。扇風機を引き寄せ、その風を顔に当てようとしたが、

扇風機は止まっていて、そのまだ熱いままのモーターの熱を受けて、ますます顔が火照った。私は、女に何とかして欲しかったが、女に顔を向ける事は出来なかった。女はそれを察して、一度だけだと言って、私の頬に、唾を一つ、吐きつけた。私は、それを、右の人差し指だけで、ゆっくり顔中に拡げ、熱を冷ました。女は、跳ねるように、ドアの奥へと身を翻した。

さて一方、男の私だが、湯船に頭から突っ込んで、逆さまになったまま、足をばたつかせていた。頭は、髪の毛が全て抜けて、替わりに吸盤がいっぱい生えていて、それが風呂桶の底に張り付いて、頭は動かしようがなくなっていた。私は、ぶくぶくと息を吐き続けた。肺の中に幾らでも息が詰め込まれているようで、私は、肺の大きさを、思わず手で確かめようとした。その息のせいで、私の血と蛙の腑で汚れたお湯が、澄んでゆくようだった。そして、すっかり透明になったお湯を通して、そのお湯の上で、ばたばたしている私の脚が、見て取れた。自分の姿が、決して誰にも見せられない、ひどく不恰好なものにも思えてきた。私は、脚を折り畳み、背中を丸めて、全身を湯船の中に、仕舞い込んだ。何時の間にか、息を吐くのは已めていたが、水の中でも、息は出来るようだった。

足の裏だけは、浮かぶように、お湯の上に出ていて、吸盤をちぎり取られて、肉が剥き出しになったままで、血を流し続けていた。その明るい色をした血が、

お湯の中に入って来て、また湯船の中は濁りだした。それに連れて、息が苦しくなっていった。風呂桶の底に、足の裏から剥がれた吸盤が、まだ、張り付いたままだった。それを剥がして、足の裏にくっつければ、血は止まるのではないか。そう考えて、私は、それを力尽くで剥がしに掛かった。どれもビクともしなかったが、一つだけグラグラしているのを見付けて、引き剥がすと、それは排水口の栓だった。赤いお湯が、みるみる落ちて行く。お湯の表面には、一面に垢が浮いていて、お湯が落ちて行く途中、それが、私の体中に全てくっついた。お湯がなくなると、頭の吸盤は、嘘のように呆気なく剥がれた。しかし、胴体は丸まったまますっかり固まっていて、逆さまで風呂桶の側面に斜めに寄り掛かったまま、私は、そこから出られなかった。

　手にした栓は、円盤型の金属で、私は、その鋭利な縁で、足の裏から剥がれた吸盤を、風呂桶の底から、こそげ取ろうとした。それらの吸盤は、金属が触れると直ぐ粉々に砕け、青い粉になったが、その円盤の縁で、それを足の裏にまぶして行くと、血は止まった。それから私は、その円盤の縁で、体中の垢を落とそうとした。しかし、その縁で皮膚を擦れば擦る程、却って、私は、全身垢まみれになるだけだった。そうしている内に、その円盤の鋭利な縁で削られて、皮膚の表面が薄くなっていって、あちこちから血が滲むようになり、その血と垢が混じり合って、腐ったような匂いをさせた。そして、体中に、白と黒の斑の黴が生えた。

それは、恐ろしく擽ったかった。堪らずに、円盤の縁を立てて、あちこち引っ掻いたので、体中、傷だらけになった。そこから流れた血を吸って、黴は奮い立つように、ますます繁殖した。私は、金属の円盤を放り投げた。しかし、逆立ちのままで、方向感覚が狂っていた。円盤は、風呂桶の内側をグルグル回り、そうして結局また、私の掌の上に、帰って来た。その円盤が風呂桶の内側を擦る音が已むと、幾ら耳をそばだてても、他に何の音も聞き取れなくなっていた。逆さまの額が、脹れながら、すっかり冷え切っているのが、感じ取れた。その冷たさが全身に広がっていって、辺りが真っ暗だと気付いた。体中の傷口が、そのまた猛烈に擽ったくなって、私の意識は遠ざかった。ただ円盤を掴んでいる指先の、円盤に吸い付いている吸盤の感覚だけが、何処まで遠ざかっても、ゴムのように伸びて、私と繋がっているようだった。(二〇〇一年十月一日)

悪態

女の私は、ずっと握っていた左手を開き、掌を見た。粘っこく鋭い匂いが鼻の穴の中を突き上がり、目をチカチカさせた。錆びた鉄片が、すっかり皮膚に擦り込まれて、掌は、赤くテカテカと輝いていた。その手で突けば、どんな屈

強な男でも、突き飛ばせそうだった。そうして、人の見ている前で力を発揮すれば、誰も、私のほっそりした体付きには、目もくれなくなるように思えた。あっ私は、戦う相手を見付けようと、表に飛び出した。白い地面の小さな庭があって、葱畑があって、その先は緩やかに盛り上がった草地で、更にその先は、乾き切った地肌が剥き出しの窪んだ平地で、その向こうは海で、暗ぼったい空にくっきり浮かび上がる水平線が、その平地よりずっと高く見えて、真っ青に澄んだその海の水の中には、生き物は居ないように見えた。何処まで進んでも、決して誰にも出会えない事は、明らかだった。それを眺めている内にも、私の体から露が滴り、それはキラキラと凍り付いた。口の中の凍った唾を噛み砕きながら、私は、また急いで、中に戻った。

　私は裸足で、それは真っ白だった。その冷え切った足で、誰も居ない部屋を横切り、風呂場に直行した。引き戸を引くと、男の私が、風呂桶の中で逆さまになって固まっているのが、嫌でも目に入る。部屋の方を振り返ると、牛のような女が、真っ赤な顔をして寝ている。脇腹の肉を取り出しすぎて、高熱を出して苦しんでいるに違いなかった。女の私は、独りで、男の私を助け出さなければならなかった。それは、屈強な男を倒すよりも、大仕事に思われた。

　男の私は、白と黒の黴で、すっかりまだら模様に覆われていて、手も足もないずんぐりした縫いぐるみのようだった。黴を水で流そうと、女の私は、蛇口

を捻った。水は出て来たが、その水はもう予め行く先が決まっていて、私に汲む事の出来る水ではなかった。仕方なく私は、風呂桶を壊す事にした。桶の側面を、左の掌で突いた。ビクともしなかったが、ツルツルの表面の真っ赤な掌が、桶の側面を滑って、オートバイのエンジンが掛かる瞬間のような音がした。二度目からは、ヴァイオリンの弦が、短く強く唸るような音に聞こえた。風呂桶がブルブル震え、何とかなりそうだと思って、何度も突いた。しかし、結局は、掌の鉄の錆が、桶の側面に擦り付けられてゆくだけだった。桶は、真っ赤にテカテカと艶を出し、掌は白くザラザラになって、もう突いても滑らなくなった。

　金槌で、桶を叩き壊す事にして、私は、家中、金槌を探し回った。天井裏にも縁の下にも、柱と床の狭い隙間にも、ここぞと思って調べた所に、必ず金槌は見付かった。何となく床に目を落としただけで、もう金槌を踏ん付けていた。風呂桶の脇に、それより高い金槌の山が積み上がった。それを見詰める私には、もう、その金槌を握る力さえ、残っていない事が分かった。私は、牛のような女が寝ている部屋ではない、明るい方の部屋の、南側の大きな窓のある壁にくっつけた、小さな座卓に向かって、数学の勉強を始めた。そうするだけの体力しか残っていなくて、他に出来る事はなかった。その教科書の最後の頁には、それを書いたのが、百年前の革命で、大衆を煽動しようとして失敗した人物だ

と載っていた。その人物の、口を歪めた暗い表情が思い浮かんだ。教科書には必ず載っていた。よく知られた顔だった。その顔写真を、見つけ出そうと、教科書を何度も何度も隅々まで調べる内に、数学はメキメキ上達するようだった。そして教科書を完全にものにすると、その見付からなかった写真が、注釈の欄に小さく載っているのが見付かった。

　男の私は、耳元に小さな破片のようなものが落ちて行く音を聞き取って、意識を取り戻した。それは、天井に描かれた夜空の絵の、黒く塗られた上に貼り付けられた、星に見せ掛けた金色の木屑に違いなかった。その木屑が全て落ちてしまえば、次には、真っ黒な天井が落ちてくるように思えて、私は、下を向いた頭を大きくくるりと捻って、その反動で頭を上にして、そのまま呆気なく立ち上がる事が出来た。直ぐに、ひらりと風呂桶の外に出て、金槌を一つ手に取って、胸を打った。弱い金属が潰れるような弾けるような、小さな短い音がした。黴は、乾いて硬くなっていた。全身に、細い針金が突き刺さっているようだった。私は、金槌でそれを削ぎ落として行く事にした。黴の根元は、カチカチになって、すっかり皮膚を覆っていた。その表面は、金槌で直ぐに割れたが、その下はネバネバしていて、それが金槌にこびり付いて、直に金槌は使い物にならなくなった。そうして、次々に金槌を取り替えては、黴を落として行ったが、全ての金槌を使い果たしても、黴は、まだ体中のあちこちに残った。

　仕方なく私は、風呂場を出て、服を着た。服を着てしまえば、黴は全て隠れた。しかし、匂いを嗅げば、その下が黴だらけだと、直ぐに気付かれてしまいそうだった。女の私には、全身黴だらけの姿を見られてもいる訳だし、決して誤魔化しは利かない。それなら、自分はもう、この家には居られないと思った。特に、牛のような女が寝ている部屋を、一飛びに踏み越えて、外に出て、下り坂の方に歩き出した。直ぐに、牛のような女の、なぜ出て行くのかという声が後ろから聞こえて来た。私は、黙ったままで、振り返らなかった。そして、下り坂を降りたのでは、幾ら遠ざかっても、牛のような女に、自分の姿を見られるままだと思い、坂道の手前で素早く脇に逸れた。

　そこは泥濘だった。足を抜くたびに、泥がクチャクチャと音を立てた。私は裸足で、それは真っ白だった。吸盤が剥がれた傷は、すっかり治っていた。皮膚は、泥を全て、コロコロした小さな玉にして弾いた。そこは緩やかな上りで、その上りきった所に、小さな四角い石に腰を下ろした、白い服を着た男が居て、私の方を見下ろしていた。石の周りから、泥水が滲み出ていて、それが拡がって、一面泥濘になっているようだった。男が口を動かした。辺りは恐ろしい程に静かで、男とはまだ大分離れていたが、私には、男が、三つの言葉を言ったのが分かった。すると、男の足元の泥の中から、真っ白な痩せた女が浮かび出て、口を大きく真上に向けて開けた。言葉を、それぞれ一つずつ、銜え込もう

とするように見えた。私は、女達が、言葉を呑み込む前に、彼女達の注意を私に惹き付けたくて、輪にした指を銜えて、思い切り息を吹いて、口笛を鳴らした。女だと見えたものは、泥濘の凹凸に映った空の輝きだった。私を見下ろす男の目が、揺れるように輝いた。乾いた風が吹き下ろされて来て、私の目も鼻も唇も、カラカラに乾いた。体中が擽ったくなって、服を脱ぎたくなった。しかしもちろん、男が見ていては、脱ぐ訳にはいかない。男を何とかしなくてはならない。ずっと足を動かしていて、男の方に向かって歩いている積もりだったが、少しも近付けていないようだ。私は、足で、足元の土を、せっせと混ぜ返しているだけだ。

　私は左手で、泥水を掬って、口に含もうとした。手に水掻きがある。私は、泥水を含む替わりに、両腕を拡げて、体を前に投げ出し、両手の指を拡げて、泥の中に差し込んだ。私の体は、泥の斜面を滑って上り、一気に、男の足元の側まで近付いた。泥の中で、身を反り返らせて横になっている三人の女の姿が見えた。その横目は、何かを期待するように、私の姿を追っているようだった。私の体の向きは、そこで鋭く曲がった。このままでは、また元に戻ってしまう。私は、女達に、男の言葉を呑み込むように言った。それが効いたかどうかは知れないが、三人は立ち上がって、男に襲い掛かった。男はまた、三つの言葉を言った。三人はその言葉を一つずつ口に含んで、その場に倒れ込み、体を痙攣

させながら、泥に埋まっていった。

　私は、男に悪態をついた。男は、口を閉じ、不快そうな表情を、ピクリともさせなかった。私は、女達に悪態をついた。しかし、もう細い背中は、どれもすっかり泥の下で、白い泡が微かに浮いて出るだけだった。私は、泥に向かって悪態をついた。すると泥の下で、女の体がくねくねと動いているのが分かった。私は、泥の中から起き上がって、鉄の錆の味がする泥を吐いた。泥は、大きな塊になって吐き出され、それが何度も続いた。すっかり吐き出すと、指の間の水掻きを噛みちぎっては、男に向かって吐き付けた。男は、それを顔に受けて、後ろに倒れ、緩やかな坂を転げ落ちていった。そこは、泥濘ではなく、乾いた砂地だった。私は、急いで服を脱ぎ、両腕を拡げて、その砂地に身を投げた。私の体は、ゆっくりとそこを滑り降りた。体中の黴が、擦り切れて、体から落ちて行った。坂を降りきった時には、もう何処も擽ったくはなくなっていた。しかし、体に力が入らず、頭を低い方に向けて、横になったままで居なければならなかった。

　湿った風が降りてきて、私の裸の胸を撫でた。胸の肉も、肋骨も、みるみる磨り減って、心臓が剥き出されてゆくようだった。胸に手を当てると、掌の中に拳大のプックリした突起を撫で回せた。それは、すっかり冷たくて、動く気配もなかった。そんな筈はないと思いながら、私はそれをしっかり握り締めて、

それを引っ張り上げるようにして、体を起こした。
　裸で、しかも風に当たっていなければならなかったが、それにしては、寒くなかった。胸を撫でると、ザラザラする。それから全身を撫でた。全身が、丈の短い殆ど透明な黴で、覆われているのが分かった。足が独りでに動き出し、何処まで続くか分からないような平地を歩き回った。（二〇〇一年十月三日）

階段

　しかしどうやら、平地が続いているのではないようだった。ただ、平地を歩く事しか出来なかったので、ずっと平地が続いているように思えただけだ。寧ろ、何処も彼処も、急な斜面やら崖やらで、何時も、そこから引き返してばかりいたようだ。私は、歩き疲れて、また砂地に横になった。カサコソ音のする方を見ると、小さな四角い石の上に、尖った爪をした青い小さな猿が乗って、手に持った小さな紙を、ヒラヒラさせていた。全身が青いのは、その背景の空の色だった。猿の体は、透き通っていた。それに気付いて、私は、急に自分の体の黴が気になって、体中がまた擽ったくなった。私は、両手で全身を掻きむしった。私の手は、もう吸盤も水掻きもなくなって、熊手のような形のまま、

固まっていて、引っ掻くには持って来いだった。猿が、石から降りて、私の鼻先に、手にしている紙を突き付けた。紙は、見たところ真っ白だったが、猿は、身振り手振りで、私が手を触れれば、その紙が黒くなると、伝えてきた。私は、手を出したかったが、どうしてもそう出来なかった。なぜ出来ないのか、猿に目で尋ねた。猿は、その紙が元々、猿のものだからと、身振り手振りで答え、それを丸めて口に入れ、クチャクチャ音を立てて噛んだ。その後ろで、先程の白い服の男が、小さな四角い石に腰を下ろし、真っ直ぐ私の方を見詰めるようだった。私は、何時までも横になっている姿を、男の前に晒しておく訳にはいかなかった。また、剥き出しの心臓を握り締め、それを引っ張り上げるようにして、体を起こした。そうはしたものの、それから、私に出来る事は何もなかった。

猿は、白い紙をもうすっかり呑み込んでしまったらしく、口をへの字にして、眠そうな顔で、その場に蹲った。私こそ、そうしたかったのではなかったか。しかし、猿に先を越されて、もうそうするのも叶わないと諦めて、また、平地を歩き回る事にした。と言っても、実際には、歩き回る振りをするだけだ。平地など何処にもなく、先程も、ただ起き上がった所を動かずに、そこで、ずっと足踏みしていたに違いないのだ。もう、そうと分かっていたので、私は、また、ただ歩き回る振りをするだけの事だと思って、歩き回る事にしたのだった。

暫くして、後ろを振り返ると、男と猿が、小さく遠ざかっていた。男と猿だけではなく、そこには他にも色々なものが見えた。それなのに、私の周りは、真っ白で何もなかった。私は、大声で、これは一体どうした事だと、尋ねた。答えなど返って来そうになかった。私は、また前を向いて、足元に目を落とした。どうやら、大きな白い紙の上を歩いているようだった。いや、それは大きく見えるだけで、猿が呑み込んだ小さな紙の上を歩き回っているに違いなかった。それでも、私は、グングンと前に進んで行けた。あの小さな紙も、そこを私が歩き回れば、何処まで続くか分からない程に、大きなものになってしまうのか。しかし、私は、猿の胃袋の中で、足踏みをしているだけかも知れないではないか。そう考えると、それを確かめようと、私は、猿と男の所まで引き返す事にした。来た道を真っ直ぐ引き返すだけだったが、何処まで行っても、猿も男も見付からなかった。私は、四角い小さな石の周りを、グルグルと回り続けていた。

さて、家に残った女の私は、その後、更に勉強を続け、数学の試験で最高点を取った。そして、それを切っ掛けに、その次の日から、数学の教師と、一緒に暮らす事になった。それでも、女の私は、毎日毎日、風呂場に籠もって、男の私が残していった、黴のこびり付いた金槌から、黴を落とさなければならなかった。それでも、一日、二、三本もこなせば、体はくたくたで動かなくなり、

それから残った時間を、仕方なく数学の勉強に充てたのだった。そして、私は、数学の教師よりも、余程程度の高い数学の能力を身に着けた。或る日、数学の教師は、家中の数学の本とノートを全て集めて、庭に山積みにし、油を掛けて、火を着けた。そして、窓からそれを見ている私に向かって、自分こそ数学の教師であって、お前はたかが、私の教え子に過ぎないと、目を釣り上げて言い募った。しかし、火に背を向けていた数学教師の背中に、火が移って、家中の、数学に纏わるものは、一切失われた。風呂場に行くと、金槌もちょうど、全て、黴を落とし終わっていた。女の私は、する事がなくなって、牛のような女の脇腹の肉を食う事に、明け暮れた。

　男の私は、グルグル回っている内に、四角い石を見失った。それでも、その石が砂に埋もれたように思える辺りの周りを、回り続けた。何人かに出会う内に、その石の埋もれた辺りも、何処だか分からなくなった。それでも、ただ歩き回るしかなかった。私は直ぐに、喉が渇いた。会う人毎にそれを訴えると、彼らは必ず、茹で卵を一個、私に手渡した。すると、もう一方の私の手の掌は、何処からか、水を掬い上げているのだった。その水と卵を口にする間も、決して立ち止まれなかった。それはもちろん、体中の透明な黴が、擽ったくて、仕方なかったからだ。とにかく動き回って、肌と空気を擦り合わせて、少しずつ黴を落としてゆくしかなかった。しかしそれで、本当に黴が落ちるかどうかは、

分からない。こんなペースでは、死ぬまで掛かっても、黴を落とし終える事は出来そうにない。

　或る日、男の私は、牛のような女の声を聞いた。女の声は、大分潰れていて、年月を感じさせた。女は、彼女の女友達の家に上がり込んでいて、低い声ながらも、途切れる事なく、その友達と競い合うように、言葉を吐き続けていた。男の私は、それとなくその友達の脇に立って、女の私の消息を尋ねた。牛のような女は、それまでの話の続きのように、女の私の事をすらすらと話し出した。それによると、女の私は、牛のような女の脇腹の肉ばかり食って、すっかり太ってしまった。それで、塞ぎ込んで、牛のような女を遠ざけるようになり、その頃から、自分の脇腹の肉を摘んでは、口にするようになった。終いには、もう牛のような女の脇腹の肉には、全く目もくれなくなり、彼女は、もうお払い箱で、こうして毎日、友達の家に入り浸っては、一日中お喋りし、自分の家へは寝に帰るだけとの事だった。男の私は、女の私が、自分の肉を食っているところを思い描いた。吐き気を催してもおかしくはなかったが、さもありそうな情景として、それを受け入れた。しかし、私は、自分でも気付かない内に、ゲロを吐いていた。それを、牛のような女の友達が、見咎めて、汚い言葉で騒ぎ立てた。私は、まだ牛のような女から色々聞きたかったが、その中年女の息も絶え絶えの喚き声にいたたまれなくなって、そこを後にした。

牛のような女が居ると言う事は、家も直ぐ近くな筈だ。私は探し回った。黒い建物も山羊の居る草地も桜の木も崖も、見付からなかったが、何とか池だけは、見付けた。そこから、坂道がある筈だったが、坂道もなくなっていた。仕方なしに、私は、立ち尽くして、牛のような女の帰りを待った。暗くなるのも覚悟していたが、彼女は、まだ明るい内に、戻って来た。私の目の前を横切って、直ぐに左に曲がると、彼女は、坂を登りだした。その上には庭があり、その横には、平屋の小さな家があった。そして、牛のような女の姿が、家の中へ消えると、直ぐ前にある筈の坂道が、また見えなくなっていた。しかしそれは、私が、そこに立ち止まったままでいるせいに違いなかった。そちらに歩き出しさえすればいいのだ。そうして、家に近付きながら、私は、風呂場の奥の広い部屋と、そこへ若い女が降りてきた長い階段を思い出した。あの階段を一度も上った事はない。あれを上ると、何処へ行くのだろう。

男の私は、肉を食い続ける女の私の姿を、見ないように、目を閉じて部屋を横切った。クチャクチャと、自分の肉を噛む音だけが聞こえた。目を開け、風呂場に入って直ぐ、階段を上りだした。スパイクシューズでも履いていたのか、階段を踏む音が、カンカンと響いた。それを聞いた女の私は、その音が、心臓に凄い負担となって、その場で死んだ。元々太り過ぎで、負担を掛けていた心臓だったのだ。男の私は、階段を上りながら、それに気付いたが、どうにも出

来なかった。
　階段を上りきると、少し先に、斜め後ろ向きの、細い脚を剥き出しにした若い女だけが居て、他には何もなかった。女に近付いて、どうして、私と女の二人の他に何もないのか、聞こうとした。私は、女に近付いて、彼女との距離は一向に縮まらなかった。その内に、心臓が激しく踊り出した。しかし、彼女との距離は一向に縮まらなかった。その内に、心臓が激しく踊り出し、私はその場に倒れ込んで、死んだ。最期の瞬間、私は、女が、大勢に囲まれているのを見た。しかも、そこに居るどいつも、足が短くて、私より足が遅いのは明らかだった。つまり、女の方から、群がっている彼らの方に、近付いて行ったに違いないのだ。（二〇〇一年十月五日）

椅子、その他

著者　u_

© 2001 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently　published